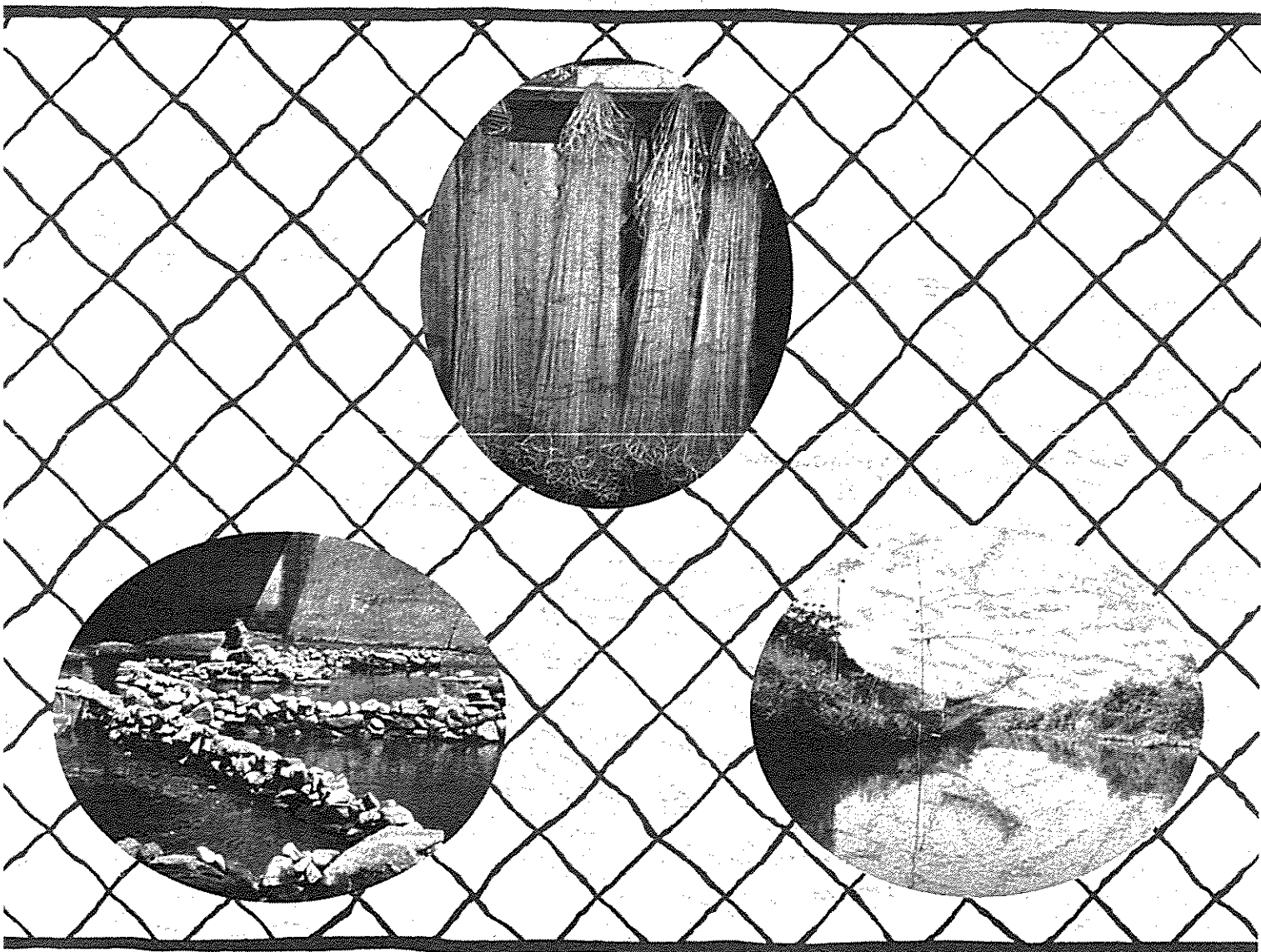


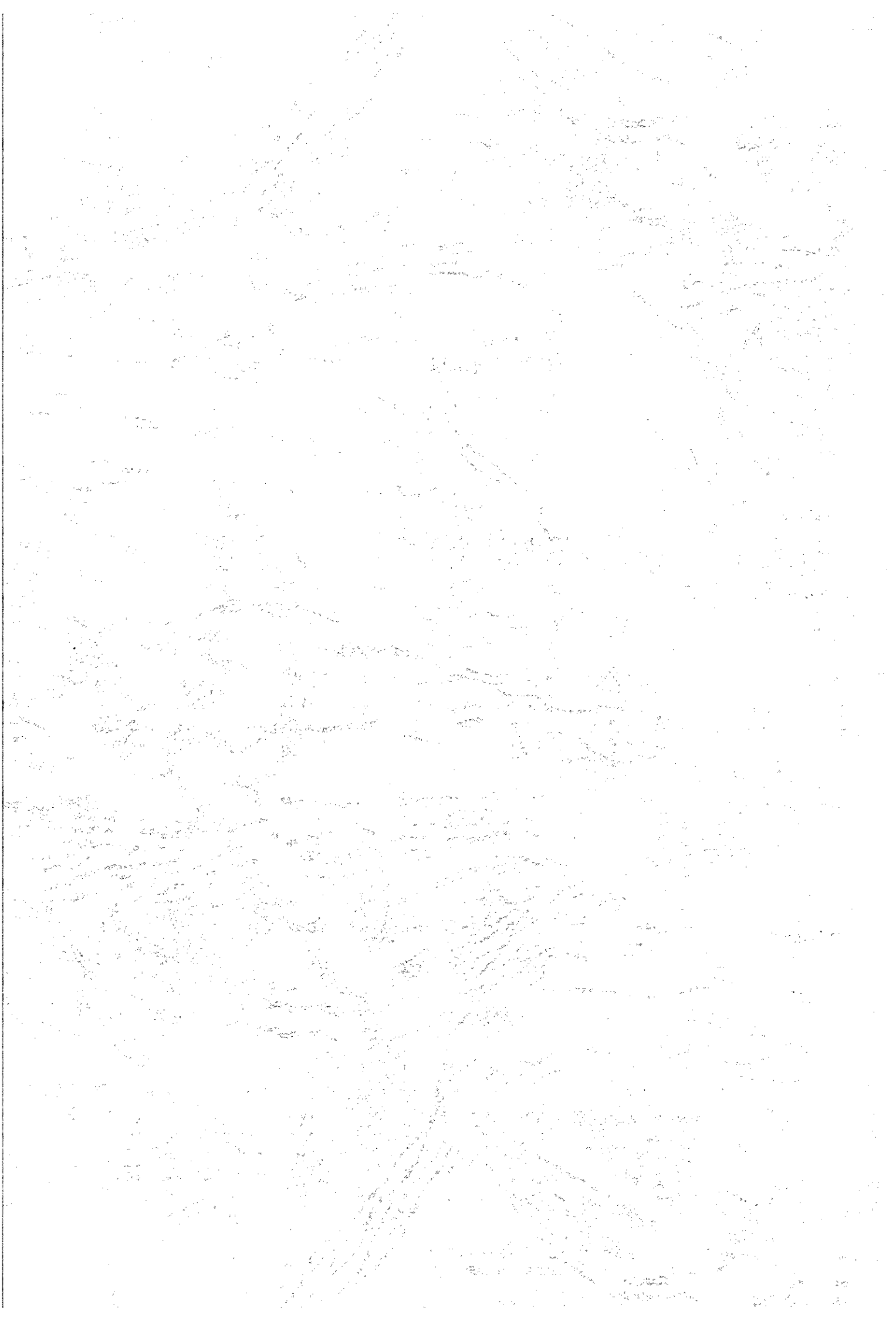
# 宮城県の伝統的漁具漁法 V

## 内水面



宮城県水産試験場

平成4年3月



漁村高齢者活力促進事業

宮城県の伝統的漁具漁法 V

内 水 面

宮城県水産試験場



# はじめに

漁業を取り巻く環境は、時代の流れとともに次第に変化してきており、内水面漁業においても漁業者の高齢化、就業者数の減少、資源の減少等様々な問題が生じている。さらに、内水面漁場は、単に漁業のための水域ではなく、飲料水や工業用水の供給源として、またレクリエーションの場等として都市住民に憩いの場を提供している。このようなことから、現状を踏まえたより良い内水面漁業の形態を考えて行くことが、今必要となってきた。

漁業技術は、古くから自然条件、魚族の生態に応じた改良が加えられ、同時に資源管理を踏まえた様々な教えを後世に伝えてきた。このことは、現在にも通じることであり、これらの記憶を後継者に伝えていくことが、漁村高齢者の大きな役割の一つであり、この記録がそのためにも、なくてはならない資料である。

漁村高齢者活力促進事業の一環として行われてきた宮城県の伝統的漁具漁法のとりまとめも今年度は5年目を迎え、内水面の漁業を取りまとめることになりました。古くからの内水面漁業を伝える資料として、ご利用いただければ幸いです。

漁具漁法の収集については、各方面の方々から多大なご協力をいただきました。心から感謝申し上げますと共に、敬意を表する次第です。

宮城県水産試験場長 佐藤 誠 一



# ○ 目 次 ○

## 宮城県の伝統的漁具漁法 V

### 内 水 面

1. 内水面の概要 .....	1
2. 各漁法の主漁期 .....	2
1. 内水面の漁業 .....	4
2. サ ケ .....	7
① サケ、マス地曳網 .....	10
② サケ、マス流網 .....	12
③ 無 双 網 .....	13
④ 魚堰(ウライ) .....	14
⑤ 四ッ手魚堰(ウオセキ) .....	16
⑥ カ マ ス .....	17
⑦ 滝 .....	18
⑧ アンデエ網 .....	20
⑨ 荷 網 .....	21
⑩ さ で 網 .....	22
⑪ つ な ぎ .....	23
⑫ 伏 せ 鈎 .....	24
⑬ や す .....	25
3. ウ ナ ギ .....	27
① ウナギ胴(ウナギド) .....	29
② ウナギ刺胴 .....	31
③ 竹筒(タガッポ) .....	32
④ ウナギ延縄 .....	33

⑤	刺し針 (サシコ)	35
⑥	穴 釣 り	37
⑦	楢葉漬け (ナラッパツケ)	39
⑧	ウナギ搔き	42
⑨	ウナギかけ (ウナギカギ)	43
<b>4.</b>	<b>ア ヌ</b>	<b>45</b>
①	梁 (ヤナ)	46
②	鵜 縄	47
③	さで鵜縄	48
④	アユさで網	50
⑤	友 釣 り	51
⑥	どぶ釣り (毛針釣り)	53
⑦	てんば (カラ掛け)	55
⑧	宙曳 (ちゅうびき)	56
⑨	アユ釣り	58
<b>5.</b>	<b>コ イ</b>	<b>60</b>
①	コイ刺網	61
②	コイ釣り	62
③	コイ置針	63
<b>6.</b>	<b>フ ナ</b>	<b>65</b>
①	フナ釣り	65
②	フナ延縄	67
<b>7.</b>	<b>イ ワ ナ</b>	<b>68</b>
①	イワナ釣り	68
②	イワナ毛針釣り	70
③	置 き 針	71
④	イワナ突き	72



<b>8. カ ジ カ</b> .....	74
① ゴリ押し .....	74
② チェーン押し .....	75
③ ガクダレ .....	76
<b>9. シラウオ</b> .....	78
① シラウオ網 .....	78
<b>10. 雑 漁</b> .....	80
① 手づかみとツッカゴ .....	80
② ヤ ス .....	81
③ ドクモミ .....	82
④ 引籠(ヒコ) .....	83
⑤ 浮筒(バフリ) .....	84
⑥ 投 網 .....	86
⑦ スガ刺網 .....	88
⑧ 四手網(モツパ) .....	89
⑨ 簀 建 .....	91
⑩ キッコミ .....	92
⑪ 地 曳 網 .....	94
⑫ スガ網 .....	97
⑬ カニ籠 .....	99
⑭ エビ胴 .....	100
⑮ エビナラッパ .....	101
⑯ エビタモ .....	102
⑰ ゴカイ .....	103
<b>11. その他の漁</b> .....	104





# 各 漁 の 主 漁 期

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
漁 種												
サ ケ												
サケ.マス地曳網								(河北町)				
サケ.マス流網								(河北町)				
無 双 網									(河南町)			
魚堰 (ウライ)								(仙台市)				
四ッ手魚堰 (ウオセキ)								(丸森町)				
カ マ ス											(仙台市)	
滝								(丸森町)				
ア ン デ エ 網											(小野田町)	
荷 網											(登米町)	
さ で 網										(津山町)		
つ な ぎ											(仙台市)	
伏 せ 鈎											(仙台市)	
や す												(志津川町)
ウ ナ ギ												
ウナギ罾 (ウナギド)												(河北町)
ウナギ刺罾												(河北町)
竹筒 (ダガッポ)												(河北町)
ウナギ延縄												(河北町)
刺し針 (サシコ)												(河北町)
穴 釣 り												(仙台市)
橋葉漬 (ナラッパツケ)												(河北町)
ウナギ搔き												(仙台市)
ウナギかけ (ウナギカギ)												(志津川町)
ア ユ												
梁 (ヤナ)												(仙台市)
鵜 縄												(中野田町)
さ で 鵜 縄												(白石市)
アユさで網												(志津川町)
友 釣 り												(仙台市)
どぶ釣り (毛針釣り)												(仙台市)
てんば (カラ掛け)												(仙台市)
宙曳 (ちゅうびき)												(仙台市)
アユ釣り												(仙台市)
コ イ												
コイ刺網												(河北町)

漁種	月												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
コイ釣り				■	■	■			■	■	■	■	(河北町)
コイ置針				■	■	■			■	■	■	■	(河北町)
フナ													
フナ釣り	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	(河北町)
フナ延組	■	■	■	■	■	■					■	■	
イワナ													
イワナ釣り					■	■	■	■	■	■	■	■	(蔵王町)
イワナ毛針釣り							■	■	■	■	■	■	(蔵王町)
置き針					■	■	■	■	■	■	■	■	(蔵王町)
イワナ突き							■	■	■	■	■	■	(蔵王町)
カジカ													
ゴリ押し	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	(中新田町)
チェーン押し				■	■	■							(仙台市)
ガクダレ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	(仙台市)
シラウオ													
シラウオ網				■	■	■	■	■	■	■	■	■	(歌津町)
雑漁													
手づかみとツッカゴ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	(河南町)
ヤス	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	(河北町)
ドクモミ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	(仙台市)
引籠(ヒコ)	■	■	■	■	■	■						■	(河南町)
浮筒(パフリ)				■	■	■	■	■	■	■	■	■	(河南町)
投網	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	(仙台市)
スガ刺網	■	■	■	■	■	■						■	(河北町)
四手網(モッパ)			(石巻市)	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
箕建							(若柳町)	■	■	■	■	■	
キッコミ	■	■	■	■	■	■					■	■	(河北町)
地曳網	■	■	■	■	■	■					■	■	(河北町)
スガ網	■	■	■	■	■	■						■	(河北町)
カニ籠								■	■	■	■	■	(仙台市)
エビ胴	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	(仙台市)
エビナラッパ				■	■	■	■	■	■	■	■	■	(河北町)
エビタモ				■	■	■	■	■	■	■	■	■	(仙台市)
ゴカイ												■	(河北町)
その他の漁	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	

# I 内水面の漁業

内水面で行われる漁業は淡水および汽水（河口域）に生息する魚貝類を対象とした漁業です。魚種としては、サケ、コイ、アユ、ウナギ、エビ、カニ等を対象としています。漁場としては、河川（上、中、下流域）、沼等内陸にある水界が操業の中心となります。

操業場所は、海で行われる漁業とは違い、限られた範囲に限定されているものがほとんどです。この理由としては、漁場が自宅地先を中心に行っていること、自分自身が水の中に入っても操業できる場所が多いこと等があげられます。このため、難しい漁法はあまり必要なく、そのほとんどが簡易な漁具と漁法を中心に発達してきました。それに加え、技術的にも産業的にも発達しなかったもう一つの原因としては、その需要が少ないことがあげられます。それは次のような点です。主菜（主に食べるおかず）としては海産魚と比べて漁獲が少ないこと、魚の種類が少ないこと、流通経路が限られていたこと等です。

日本人は魚を多く食べます。そして、米を主食とし魚を主菜としてきました。しかし、多くの場合その中心は、海産魚です。河川で漁獲される魚は、量的に見た場合、魚を主菜とする日本人にとっては、食をまかなう位の漁獲量は望めませんでした。また、海産魚と違い、魚の種類が少ないため、食卓を飾るには質的に不足していました。流通面でも冷凍技術等は発達していませんから限られた範囲の販売が中心となっていました。このような理由から、漁を行っても海のように高い収入は望めませんでした。つまり、それのみで生計を立てていくことは難しいわけですから、産業的にも確立しにくかったわけです。

漁業経営をみると、限られた漁獲しか望めず収入が少ないことから、漁業のみの専業というよりは多くが農業等の兼業として営まれてきました。

しかし、そのような状況の中でも産業的に成り立っていた（専業的に行われていた）河川での漁業もいくつかありました。その中でも鮭漁等は漁獲高が大きく、漁具や漁法も多くあり、産業的に成り立っていた漁業の一つでした。

現在、耳にすることはほとんどありませんが、宮城県の特産品として藩政時代に伝えられた「ここもり漬け」（鮭を使用した塩蔵品）や鮭漁に関する税の徴収等は河川での漁業（漁獲物）が産業的に成り立っていたことを示す一例としてあげられます。また、終戦前後まではウナギを中心に漁獲し、川漁のみで生計を立てていた人達もかなりいたようです。しかし、昭和半ばから現在にかけては、専業者は数少なくなり兼業的に漁業を営む人が多くなって来ているのが現状です。

このような経過をたどってきた内水面漁業ですが、漁具漁法の発達をみると手づかみ等

の原始的なものから、網漁具等を使用した進んだもの、漁獲量も少ない漁獲から、大量の漁獲を目的としたものに変化してきました。また、各漁法は魚の習性と資源量を考えた、独特の教えや考え方のもとに行われてきました。

漁具漁法は、漁場、魚種等によって違っています。漁には、道具を使わず自分で川の中に入って行う手づかみ、簡易な道具を使って行うかぶせ籠、ヤス、竹等を細工して漁具を作り行う籠や筒、糸を使って行う釣り、網を使って行う刺網、流網、地曳網、堰を使って漁獲する梁等様々なものがあります。

内水面ではこれらの道具を使って、魚の生態に合わせた四季折々の漁法が行われて来ました。それは、人間と魚の知恵くらべであり、自然と人間がお互いを尊重しあってきた、共存の歴史でした。魚はいつも同じ量が捕れるわけではありません。その年により漁獲が多い時も、少ない時もあります。ところが自分達の都合だけで獲れるだけとてしまえば、魚は減りいなくなってしまうわけです。それは、自分達が生活していくための糧を失くし、最後には自分の首をしめることにつながります。昔から天災等による飢饉が多く発生しました。しかし、そんな中で内水面で生活している人達は自分達の中に信仰や習慣等を交えながら、魚や漁の大切さ、資源の管理等を伝えてきました。そして、自然を破壊せず共に生きることが、自分達の生活にとってもっとも大切だということを知っていました。また、現在（自分）よりその子に、また子孫に伝えるために、長い目で常に資源を絶やさないようにしていました。このことは、今につうじることではないでしょうか。

内水面における漁場は、広い海とは違い、河川や沼等限られた場所となっています。その中に生息する魚も漁業として漁獲に結びつくものは、限られた種類となっています。そんな内水面漁業の中で、産業的に見た場合重要だったものは、サケ、ウナギ、アユ等のようにその一生を河川で過ごすのではなく、海と河川の両方を生活場所にもつ魚が多かったようです。このことから漁業を考えると、内水面における漁業は、ただ単に内水面の魚資源を守るだけではなく、海での保護も大変重要だと言うことが言えます。それは、魚資源が海と河川にまたがったものであり、どちらかが悪くなっても両方に影響がでるためです。そのためにも、つねに漁業を行う人達（海、内水面）がお互いを理解し合い、より良い方向性をもつことが大切だということです。

その良い例が、サケの増殖です。内水面の孵化場で、生まれたサケは川を下り海に出ます。海で育ったサケは、大きくなり自分の生まれた川に戻ります。その途中で、海で行われる定置や刺網で漁獲されます。しかし、海で獲るだけでは資源は減りますから、内水面において孵化を行い放流します。こうして、お互いが協力し力を合わせれば、いろいろな問題も解決していくわけです。また、河川が汚れば、汚れた水は海に流れ込み海も汚れ

ます。川や海は別々の様ですが、実はつながり合いお互いに生きているものです。そして、お互いを良くしていくためには、海と内水面の協力の上でできるということです。このことを覚えていてください。

現在、内水面漁業は、実質的には産業として成り立つものは少なくなっています。また、従事する漁業者の人達も少なくなっています。しかし、昔から受け継いで来た魚や自然に対する考え方、見方等、私達が理解し、それを役立てていけることは多くあると思います。漁業は、昔から漁業に従事する人達が生きる糧として守り発展させてきました。その古いものを、高齢者の人の話しをもとに若い世代の人が聞くことにより、いろいろの面で現在と違うところ、良いところ等を理解していけるとと思います。



## II サケ

サケは多くの種類が漁獲され、私たちの食卓に上っています。そして、そのほとんどのものが、現在海で漁獲されています。しかし、サケは昔から河川を中心に漁獲され、内水面漁業にとっては重要な産業となっていました。そして、内水面漁業としてだけでなく宮城県にとっても重要な産業の一つでした。生産量も多く、加工品は県の特産品として県内外に知られていました。また、それだけ重要視されていたから、多種類の漁具漁法や信仰、習慣等も伝えられています。しかし、漁獲の中心が河川から海へと移っていく時点で産業としての内水面でのサケ漁とそれを取り巻く人達は姿を消そうとしています。

ここではそんなサケ漁について、生態、漁業との係わり、信仰や習慣について漁具漁法に入る前に理解して欲しいと思います。

生態：現在私達が食用としているサケの仲間はかなりありますが、宮城県の河川で漁業の対象となっているサケは、その中で名前の前に何もつかない標準和名でサケと呼ばれる種類です。（シロサケとも呼ばれています。）

サケは、一生のほとんどを海で過ごします。しかし、親となって産卵のため河川を遡上する時と、卵から生まれて海に下るまでの短い期間は川で生活します。川で生まれ海で育ち、また川に戻るこのような魚を、降海性の魚と呼びます。

サケは、生まれてから3～5年の間、北の海で餌を取りながら生活します。その後、自分が親になるための条件がそろった時、初めて自分の生まれた川を目指して帰ってきます（回帰する）。

海を泳ぎ、長い旅をしてきたサケは、自分の生まれた川にたどり着くと、それまで銀色だった肌が、黄色の婚姻色にかかります。同時にそれまで同じ体型だった雌雄のものが、雄は南部鼻曲がりザケと呼ばれるような上顎が鉤のように曲がった状態になります。

この状態でサケは餌もとらず、体中ぼろぼろになりながら産卵場まで一心不乱に川をのぼっていきます（遡上します）。産卵場につくと水のきれいな場所を選び、尾鰭をつかって川底の砂や小石をかきわけて穴を掘り、ここに卵を産み付けます。雌が産み付けた卵には、上から雄が精液をかけて受精させます。これで産卵が終了するわけです。

それまで産卵のために、傷つきながらも必死になって川をのぼってきたサケも産卵を終えた時点でほとんどのものが一生を終わります。

受精した卵は、水温10℃前後であれば60日で孵化します。孵化したものは、10センチ前

後まで川の中で餌をとりながら過ごします。そして、翌年の春になり雪解け水が流れてくる頃に、この水と一緒に海に下ります。海に下ったサケは、生まれた川を後に成長のため、北の海に向かって回遊していきます。これがサケの一生です。

漁業：内水面における漁業はほとんどのものが、そのみで生計を立てていくことは難しく、現在でも兼業で漁業を営む人達が多くなっています。

しかし、そのような内水面漁業の中で、昔からサケを対象とした漁業は専門的に漁業を支えてきた業種の一つでした。

それは、宮城県内の北上川をはじめとした河川が昔からサケの産卵遡上に適し、多くのサケが宮城県沿岸や、各河川に回帰し、漁獲されていたためです。

縄文時代の貝塚からも、植物、動物の骨に混じってサケの骨がみつかったことでもサケが宮城県で食用魚類として古くから利用されていたことがわかります。

以上のことから北上川を始めとした県内各河川におけるサケ漁の歴史はかなり古いものと考えられますが、現存している文書では、寛永5年（1628）の「伊達政宗鮭役申付黒印状」があります。この中では、県内各地区の内水面漁業者に対し鮭漁で使用する船には1隻につきサケ5本を徴収する等税について記述があります。このことでも税の対象になるくらいの漁獲があったサケは、内水面漁業にとってはかなり重要な部分を占めていた漁業であることがうかがえます。

また、仙台藩がサケを重要産品として扱っていたことを知る文書もあります。それは慶長5年（1600）の「歳暮進物注文」です。この中で伊達政宗は、徳川家に「ここもり」、「塩引き」等のサケの加工品を送っているとの記述があります。この内容からも、鮭はこの頃にも仙台藩の重要産品として扱われていたことがわかります。

ここで、「ここもり」について少し説明します。ここもりと言う名前は、現在耳にすることはほとんどありませんが、昔は仙台藩の名産品でした。そして、このここもりのことが書かれているものに「仙台物産沿革」と言う文献があります。その中には、ここもりの製造法が書かれています。作り方は次の通りです。

ここもりを作るためには、まず重さ1貫目位のサケを選び用意します。次にこのサケの腹中および鱭に塩をすりこみ、この他の部分には強く塩を振り掛けます。同時に腹中内の筋子を胎囊を敗らないように取り出し、塩漬けとして別に漬けておきます。10日間位したら、塩をしておいたサケの腹の中に、別に漬けておいた筋子を静かに戻し、蕈を使って固く包み形が変わらないようにします。この状態で塩漬けし、塩が染み込み固くなったくらいがちょうど良い状態となります。これを適度の厚さに切ると、肉の中に筋子の挿入した

ものが見えて、大変見事な物となります。また、これを粕漬けする時は、塩分を取り去って作れば、子籠サケの粕漬けのようになります。これが作り方となります。

なぜ、ここでここもり漬けを紹介したかと言うと、仙台藩名産のここもり漬けに使われたサケは、北上川で捕れたものが多かったという記述があるためです。このことから、この時代のサケは河川で漁獲されたものが多く、特に北上川のサケ漁が盛んだったことがうかがわれます。

そのことを裏付けるものとしては、次のようなものがあります。北上川のサケ漁と水揚げに関する資料はあまり残っていませんが、その中に明治20年（1887）に北上川沿岸および川で捕れたサケは86,484貫で、当時県内河川では最大の産額だったとの記録があります。この水揚げ量は、現在の河川での水揚げ量と比較してもかなり多く、北上川を中心としたサケ漁が盛んに行われていたことがうかがえます。

また大正時代に刊行された「美味求真」には、天下に誇る味として、北上川のサケが上げられています。このことでも、北上川のサケの知名度が全国的であったことがわかります。

以上のことから、河川でのサケ漁は古くから行われ内水面漁業で重要な位置を占めて来たことがわかります。

漁法も、地曳網、流網、魚堰、すくい網、やす等様々な方法が昔から行われてきました。

しかし、サケ漁は昭和に入ると漁業の中心が河川ではなく、沿岸（定置網漁業）での漁獲に移って来ました。このため河川での漁獲は昔と比べかなり少ないものとなって来ます。また、現在河川で漁獲されたサケは、ほとんどのものが食用販売目的ではなくサケ資源を増やす目的から採卵親魚として孵化放流事業に向けられています。これに加え海で漁獲されているサケも、その一部を採卵用に内水面漁業協同組合に提供されています。

また、現在言われるように、放流数が多くなり回帰率がよくなるにつれて、各河川に帰ってくるサケの大きさも小型化してきているといわれます。

現在の河川で行われているサケ漁は、産業として個人の生活を支えるためのものではなく、資源増大の目的を中心に進められて来ています。このため、漁業としての漁具、漁法の発達、改良はある時期よりほとんどなく、逆に古くからの漁具、漁法はその姿を消し、操業している様子を今はほとんど見ることはできなくなっています。

信仰：サケを巡る習慣や信仰としては、サケの大介に見られるように、ある時期に漁獲をしてはいけないと言う話が多いようです。この話しは、秋をむかえサケが川を昇りだす時に始まります。毎年秋の11月15日は、サケの大介が仲間を連れて川をのぼってくる日とさ

れています。この日はサケの大介がこれから川をのぼるぞと叫んで大群を引き連れながら昇って来るので、絶対に漁に出たり、大介を見てはいけないとされています。これはいろいろな場所で聞かれる普通の昔話しのようですが、別の見方をするとサケの資源を守るための教訓だったのではないかと考えられます。サケは昔から宮城県の各河川で、生活を支える重要な資源でした。しかし、サケは毎年同じ量が漁獲されるのではなく、その年により豊富漁があります。それを決定する大きな要因の一つとしては、海況や産卵量があります。この中で、海況は自然が左右するものですから誰にも変えることはできません。では、産卵はどうでしょうか。サケは自分が生まれた川に帰って来て産卵します。ところが産卵のために帰って来たサケを産卵前に漁獲してしまったらどうなるでしょうか。生むものも、生まれるものもいなくなるわけですから、大きくなっても帰ってこないわけです。昔は、サケ漁の中心が海よりも川でしたから、確実に資源を減少させないで漁獲を続けて行くためには、川にのぼるサケをねこそぎ捕らないで確実に産卵させ、また自分達の川に帰って来させるという方法が一番なわけです。そして、この考え方をふまえ、サケの大介が帰って来る時が昔からの教訓で一番資源を維持していくのに適している日だったのかもしれない。だからこそ、大群を引き連れてくるとして多くのサケが川を上る時を伝えたのかもしれない。

この他では、神への捧げ物やサケ自体が神様扱いされる等様々な面を持っています。

もともと、サケは生活を支える重要な産業として、また神聖な魚として扱われてきました。しかし、現在河川においてはサケを取り巻く習慣や信仰は薄れており、時代の流れや変化を受けて、古いものがますます消え去ろうとしています。

## 1 サケ・マス地曳網漁

(河北町)

サケ・マス地曳網漁は、産卵のため河川に遡上してくるサケ・マスを漁獲対象として行われる、地曳網漁業である。

地曳網の操業は、寛永5年の文献資料にも操業していたことが記載されており、古くから行われていた内水面漁業の一つである。

網は袖網部分と魚取り部からなる。網の長さは、全長で50～100間。袖網は12号麻糸を使用し、目合い3～4寸100掛けとし、網丈は23尺とする。魚取部は長さ、10～15間。網地は8号麻糸を使用し、目合い2寸とする。浮子は桐製で、長さ6寸のものを使用する。沈子は瀬戸製で、5～30匁のものを使用する。浮子網は2種類使用し、1本の場合は3分径マニラ網、2本の場合は2分径マニラ網を用いる。浮子網は、3～4分径マニラ網を使

用する。曳網は、4～5分径マニラ綱を使用し、長さ20～100間用意する。

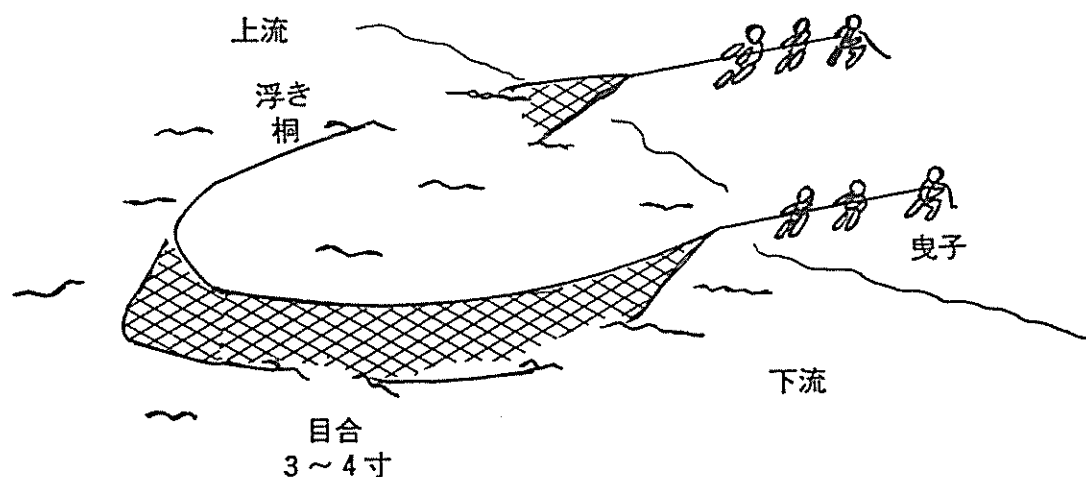
網は漁場により大、小の2種類がある。

漁期は、サケの場合9～12月、マスは4～8月。漁場は河川の曳網に適した場所とする。各地区には、決まった曳場がある。

漁は、5～8人を1組として行う。漁船は、長さ23尺、幅4尺の木船を使用する。始めに、瀬主を決める。全員で船に網を積み込むと、瀬主に曳網の片方を渡し、川の流れを横切るように進めて行く。適当な場所まで来ると、網を川に投入しながら、円を描くように川下の方へと船を進めて行く。全部の網が投入し終わると船を岸につけ、瀬主方ともう一方の二手に分かれて曳網を曳いていく。この作業を繰り返す。

1回の漁には、30分～1時間を用する。漁獲したものは、瀬主と曳子で7対3前後で分配する。また、曳網のカ統数が多い場所では、操業の順番をクジ等で決めて漁を行っていた。

古くから行われていた地曳網も、昭和10年代を最後に操業は行われなくなった。



サケ、マス地曳網操業図

## 2 サケ、マス流網漁

(河 北 町)

サケ、マス流網は、小人数で行う流し網漁業である。

網の長さは、50～100間、網丈は1間5尺とする。網の長さは、川幅の半分位を目安とする。網地は麻糸を使用し、目合い5寸とする。浮子は桐製で長さ6寸のものをうい、浮子綱に1尺6寸間隔で取り付ける。沈子は自分で鉛を購入し、操業時期に合わせて作っておき、網の長さにより数を調節しながら沈子綱に取り付ける。浮子綱は麻糸20号を使用する。沈子綱は麻糸50号を使用する。手綱は麻糸50号を使用する。

網目は、サケとマスで大きさが違う。サケの場合は目合い5寸、マスの場合は目合い4寸とする。また、操業方法も違い、サケの場合は水面近くで漁を行うため沈子を軽くし、マスの場合は底すれすれに漁を行うため沈子の量を多くする。

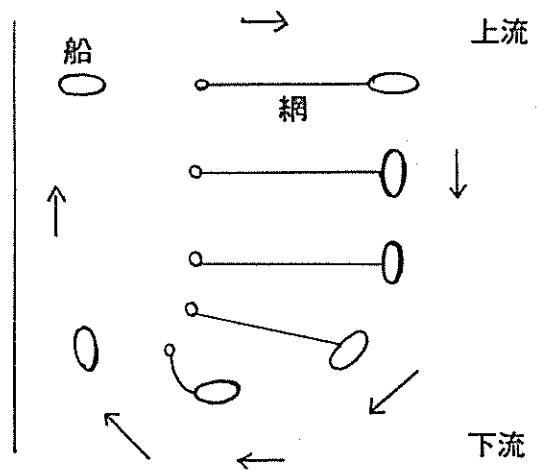
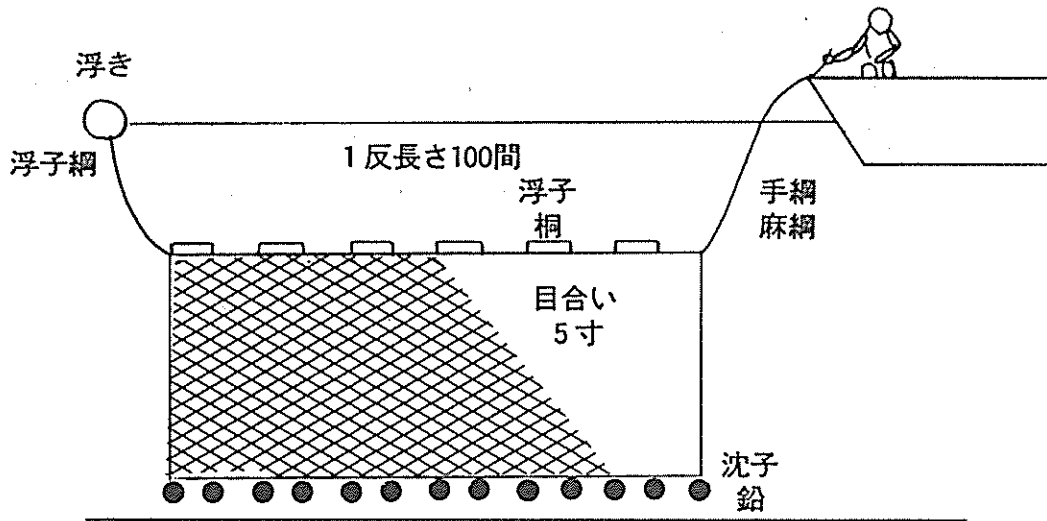
漁期は、サケの場合9～12月、マスの場合は2～5月。漁場は、大型河川の河口付近。

漁は、日没から日の出まで行われる。水の濁っている日は、日中も行われる。小型の木船に1人乗り込み出漁する。川を横切るように船を進め、船が適当な場所まで来ると、川の流れと風を見ながら浮きを投入して行く。その後、船を進めながら網を投入していく。網の投入が終わると、船を川の流れにまかせ、網と一緒に川をくだって行く。ある程度くだと、船を網を閉じるようにしながら進め、浮きの所まで来ると網を回収し、かかった魚を取り上げる。その後、船を上流に戻し、この作業を繰り返す。1回の作業時間は30分前後である。一晩で6～7回操業する。

漁場は、操業する者が多いので、あらかじめ操業範囲が決められており、問題の起きないような、漁場配置となっている。

漁獲量は、水かさが増して濁っている日が多い。一回の流網で、多い時で4～5本の漁獲があった。また一番多い時では、一度に15本前後の漁獲があり、重さにして13貫800位あった。

サケ、マスは、昔は6キロ前後のものが多かったが、現在は2～3キロのものが主体となっている。全体的に小型になっている。



サケ・マス流網操業図

### 3 無 双 網 漁

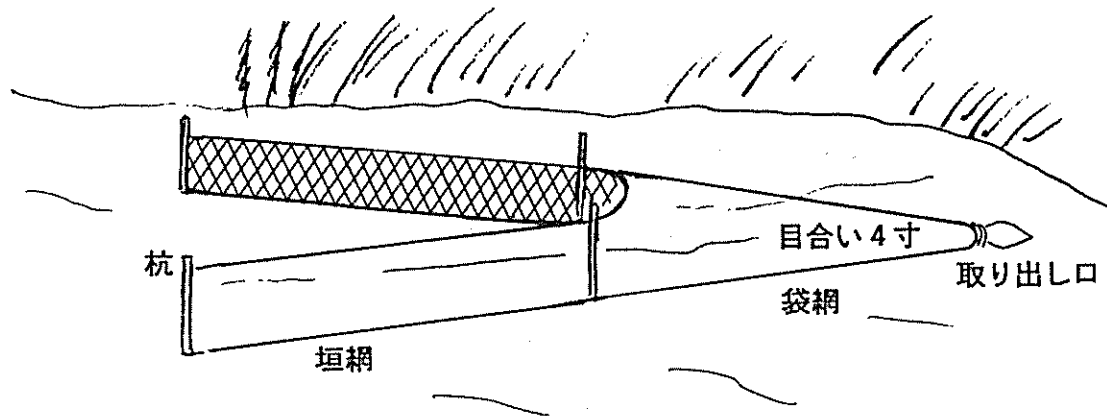
(河 南 町)

無双網漁は、垣網を川の中に設置してサケを誘導し、袋網に入ったサケを漁獲する簡易な定置網漁業である。

網は、垣網、身網、舌網、袋網からなる。川の広さにより、規模は変わる。垣網は藁縄を使用し、設置する漁場の広さによりその長さを変える。身網は、綿糸を使用し、目合い4寸、高さ6尺、大きさが4間四方とする。身網の前方には、舌網を取り付ける。袋網は、漏斗状とする。

漁期は、10～12月。漁場は地先河川とする。

無双網漁の操業は、朝夕に行われる。網は川筋に仕掛けらる。まず、各自の設置場所が決まると、川に竹竿を刺し、これに網を固定し設置していく。サケが、川を上ってきて垣網にぶつかると、上流に進もうと垣網をよけながら進んで行く。垣網の先には身網が付いており、ここにサケが入り込む。身網には脈糸と鈴が付いており、サケが身網に入ると鈴が鳴り陸上で待機している者に知らせる。陸上で待機しているものは、鈴の音を聞くと素早く網の側に行き、舌網をあげてサケの逃げ場をふさぎ、サケを袋網に追い込んで漁獲する。



無双網漁具見取図

#### 4 魚堰（ウライ）漁

（仙 台 市）

魚堰漁は、河川に竹または鉄の柵を設置し、この柵の間に漁獲用の籠を取り付け、籠の中に入った魚を漁獲する、設置式のえり漁業である。

この漁業は県内各地区で行われ、現在は孵化放流用親魚確保のために行われている。

魚堰は、柵（堰）と魚取部（籠）からなる。大きさは、水深、広さ等川の規模によって違ってくる。柵を作るには、始めに高さ7尺の竹を使用し、これを両方の川岸を結ぶように設置していく。次に竹の柵に対して、5尺間隔で、補強のための太めの竹を設置していく。補強竹には、流れに対して斜めにも支えをいれていく。また、竹柵には横の補強用として、上と下に竹の棒を取り付ける。柵には1カ所か2カ所に魚取部を取り付ける。魚取部は、高さ7尺、幅5尺の箱型であり、前面は魚が入るように開け、ここにふた棒を取り



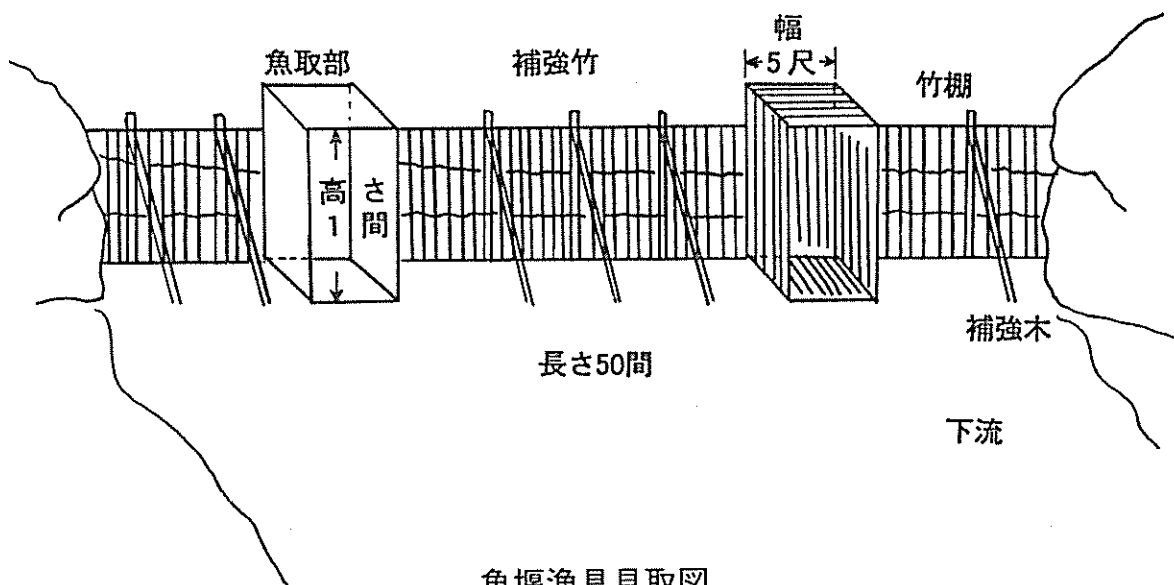
付けておく。

現在は、柵と魚取部分が鉄で出来ており、道具があれば半日程度で100メートル前後の魚堰ができる。

漁期は、10～12月、漁場は、地先河川。

漁期が近付くと、河口から少し上った場所を選定し、ここに魚堰を設置する。サケが川を上り始めると川の途中には、魚堰が設置されておりサケはそこから上へは上れなくなる。柵にあたったサケは何とか上流に上ろうとその切れ目を探し、設置してある籠の中へ入り込む。漁師は1日に何回か見回りし、サケが籠に入っていればふた枠をして、網ですくいあげて漁獲する。漁獲したサケは、生きた状態で孵化場まで運び採卵親魚として使用する。

現在は籠の形も改良されて、ふた枠ではなくかえしの付いた籠ができており、一度籠に入ったサケは逃げられないようになっている。



## 5 四ッ手魚堰（ウオセキ）漁

（丸 森 町）

四ッ手魚堰は、川の中央にサケの遡上を阻む柵を作り、柵の下流に四つ手網を設置して、この網に入ったサケを漁獲する、設置式の網漁業である。

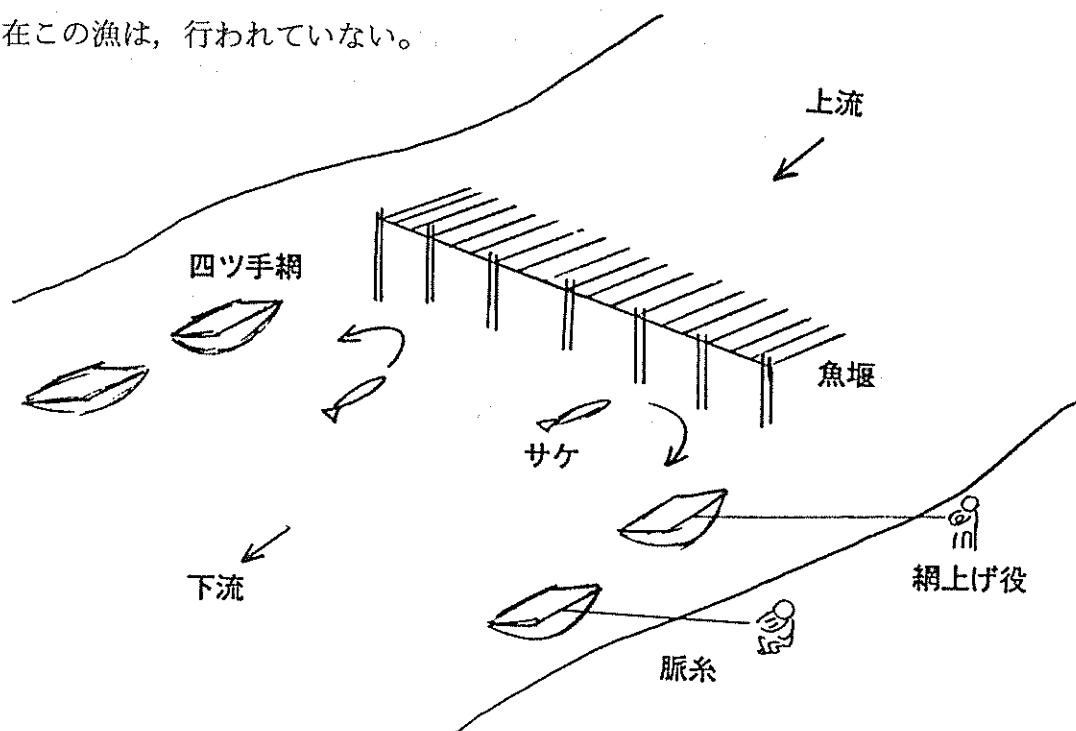
漁具は、堰と網からなる。堰を作るには、次のとおり行う。始め柵を作るのに適した場所（川の流れを考える）を選び出し、川の流れに直角になるように木の杭を打ち込んで行く。この場合、川の両側は、ある程度の間隔を開けるようにしておく。次に、杭が打ち込み終わると、横木を杭に渡し、横木に斜めになるように竹簧を渡して行く。竹簧を斜めにするのは、川の流れに対して、抵抗がかからないようにするためである。四ッ手網はその場所によって大きさと目合いを変えて使用する。

漁期は9～12月。漁場は小河川または、水深の浅い場所。

秋になり、サケが上り出す前に魚堰を準備する。四つ手網は、魚堰の少し下がった川岸沿いに設置しておき、網を上げる者がこれについている。操業は夜間行われる。サケが川を上ってくると設置しておいた魚堰にあたるため、これを避けようとして下に引き返す。この時、設置しておいた四つ手網に入る。夜間の漁なので、網には脈糸を取り付けておく。漁師は脈糸の動きでサケが網に入ったのを知ると、網を素早く引き上げ入ったサケを漁獲する。この作業を繰り返す。

この漁では、網を素早く上げないとサケを逃がすことが多い。

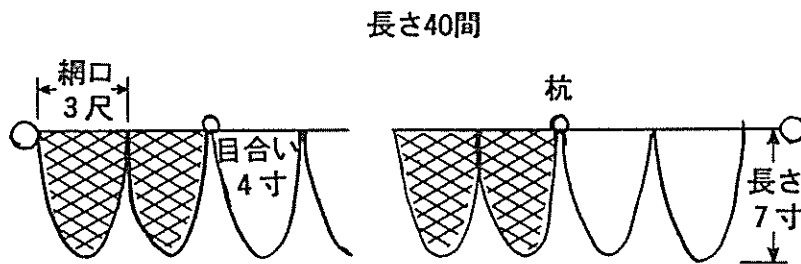
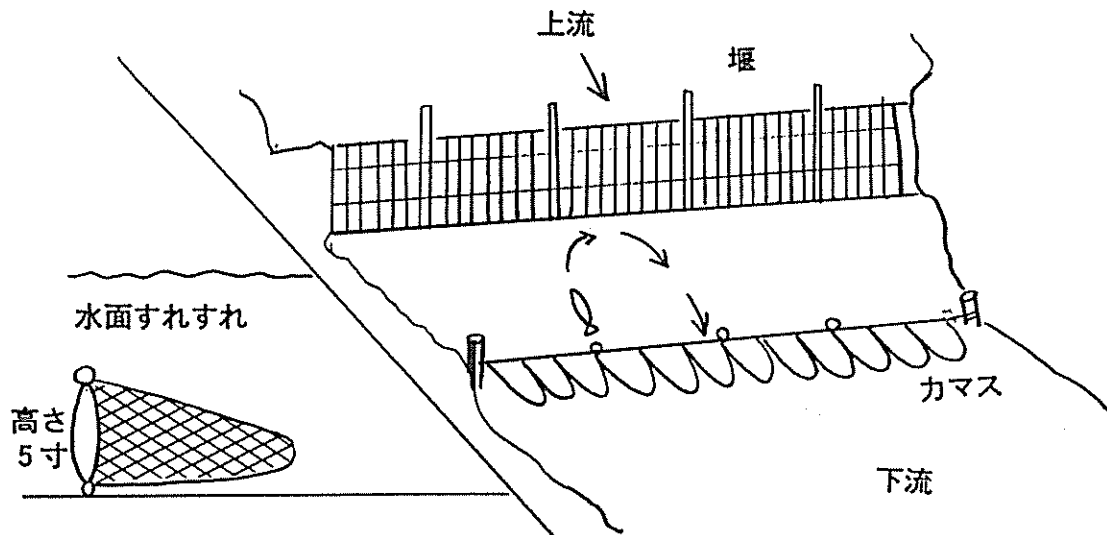
現在この漁は、行われていない。



四ッ手魚堰漁具見取図

## 6 カマス漁

(仙台市)



カマス漁見取図

カマス漁は、川に連なった袋網を設置し、この袋網に入ったサケを漁獲する独特の網漁法である。

この漁法は、ほとんどが魚堰とともに行われる、補助的な漁法である。

網は、全体で長さが40間あり、これに3尺の小さい袋網が数多く付く型となっている。一つの網の大きさは、網口が3尺、高さが5寸、長さが7尺とする。目合いは4寸とする。一網作るには、材料を買って来てからだいたい1週間位かかる。

漁期は、10～11月。漁場は地先小河川。

漁が始まる前、川に網の設置を行う。カマスを設置する場所は、水深の浅い所で、上流

に魚堰がある場所か、ない場合は張り網をはった下流部とする。網を設置する場合兩岸に網を支える杭を立て、これに川幅いっぱいになるように網を張り渡す。網は、川の流に流されないように、3網毎に鉄の棒を立てて、これに結び付けるようにする。網の高さは、川の水位によって調整する。

漁法は、産卵のために遡上するサケが、魚堰等に阻まれ上流に進めないため下流に戻る、この時設置された網にかかるというものである。サケがこの網にはいる場合は、ほとんどのものが頭からはいる。網にはいったサケは、網の高さがないため方向転換できず、鰓から水が入り死んでしまう。このため、1日に何度も見回りし、早めに取り上げる必要がある。漁獲したサケは、生かして孵化放流用とする。

1日に、20～30本程度漁獲できる。

## 7 滝 漁

(丸 森 町)

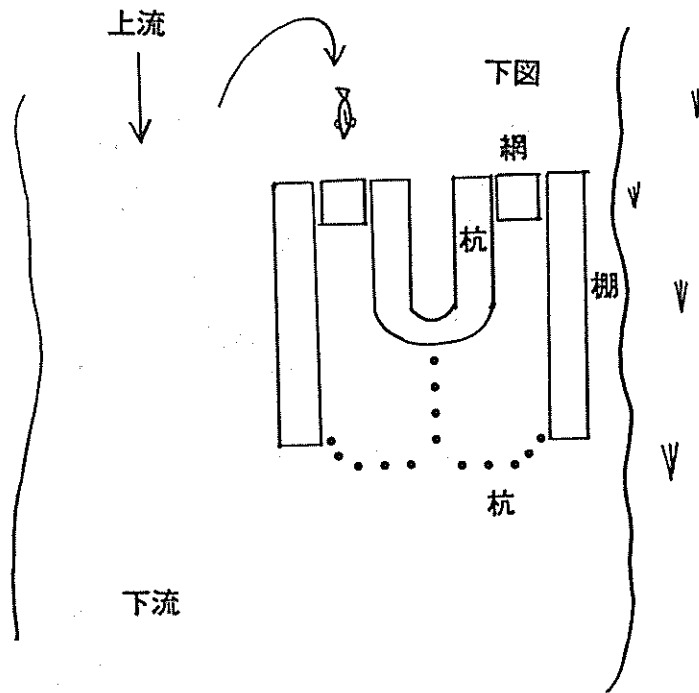
滝は、柵を使って川の流れを変化させ、流れを変えることによりサケを網に誘い込み漁を行う、独特の漁法である。

漁具は、柵と網からなる。柵を作るには、まず川の流れに沿うように川岸と川の中央よりの2ヶ所に杭をある程度の長さに打ち込んでいく。杭を打ち込むと、これを利用して柵を作り、この柵に石を入れて堰を作っていく。堰が出来ると今度は、堰の終わる部分に堰と堰とを結ぶように、杭を打ち込んで行く。また、堰の先端部には中央にブイの字になるように杭を打ち込んで行く。先端部の杭は、堰の内側に網を設置するため堰と堰との間を開けて打ち込んでおく。網は、6尺4方の四つ手網を使用する。網地は麻糸10号、目合い3寸とし、中央に脈糸を設置する。

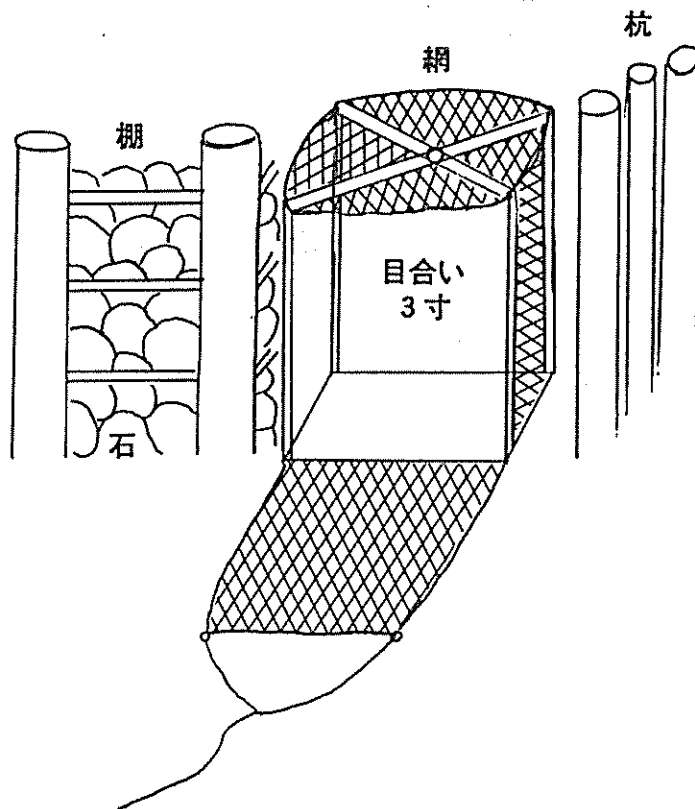
漁期は9～12月。漁場は小河川で水深の浅い場所。

漁法は、川に堰を作ることによって緩やかな場所を作り、産卵のため流れの急な場所を遡上してくるサケを、この流れの緩やかな場所に誘いこみ四つ手網によって漁獲するという方法である。サケは流れの緩やかな場所に入り込むと、少しそこに留まる。この時設置した網に入るの、網に取り付けておいた脈糸を合図に入り口を塞ぎ漁獲する。これも網の側には、常に誰がついていることが必要である。また、魚を傷付けることもなく漁獲できる方法である。

この漁は、サケの数も減り漁獲効率も悪く、手間がかかるため昭和20年代を最後に行われていない。



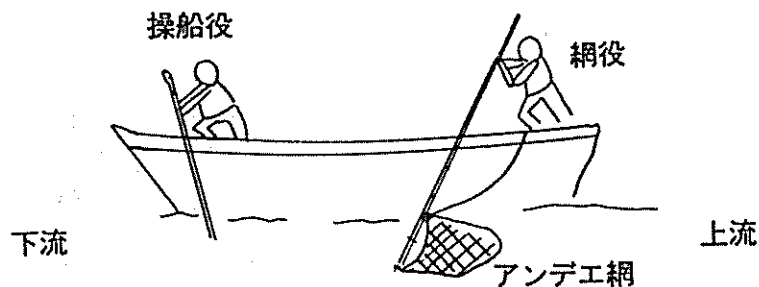
淹漁具見取図



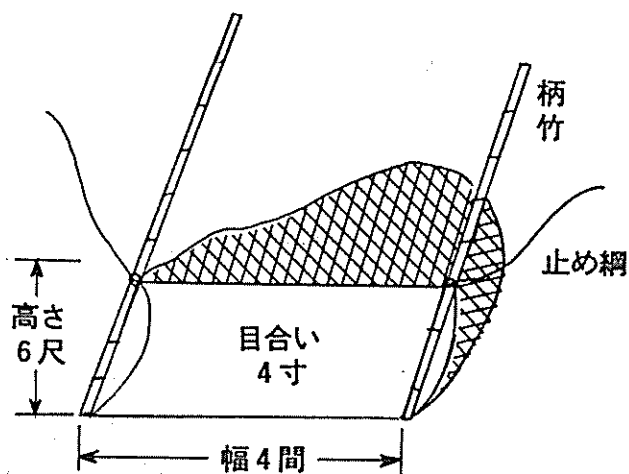
漁具部分図

## 8 アンデエ網漁

(小野田町)



アンデエ網操業図



アンデエ網漁具見取図

アンデエ網漁とは、漁船を使用して行い、すくい網漁業である。

網は、網と柄の部分からなる。2本の竹を用意し、これに幅4間、高さ6尺、奥行き8尺の網を取り付ける。網は、麻糸を使用し、目合い4寸とする。

漁期は、9～11月。漁場は、地先河川。

木船に2人ずつ乗り組み出漁する。船の中では各自役割があり、1人は船の中央で網を取り付けた竹を支える役、もう1人は船主において竿を使い川下に向かって船を進める役である。船が漁場につくと、2隻は網の幅程度の間隔をとり、各船の網持ち役が竹を支えながら船を川下へと進めて行く。船主にいる操船役は、サケをさがしながら船を一定の間隔を保って下流に進める。サケが網に入るとあたって感覚でわかるので、この時すばやく竹を引き網口をふさいでサケが逃げられないようにする。その後、竹と網を素早く引き上げ、

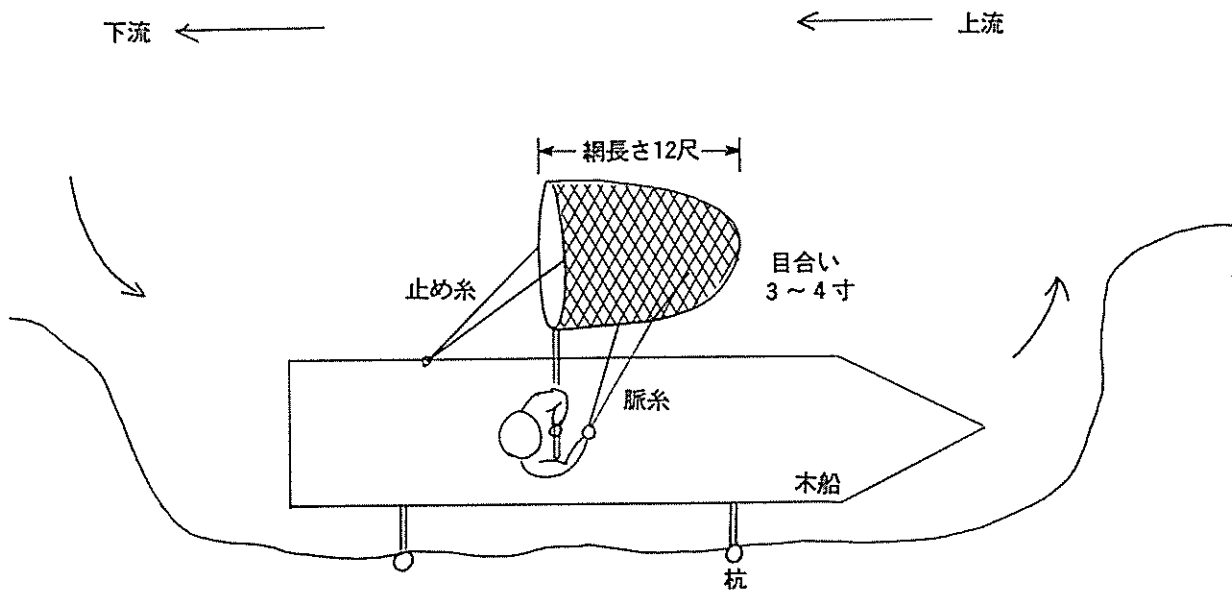
船を寄せて漁獲する。

この漁では、船を一定の間隔に保つことと、サケが網に入ったあとの網口のしぼり方が重要である。

この漁は、昭和なかばを最後に行われていない。

## 9 荷 網 漁

(登米町)



荷網漁操業図

荷網は、川の流れの緩やかな場所を利用して行われる、すくい網漁法である。定置的な、網漁である。

網は大型の袋網を使用する。網を作るには、まず竹を使用して網枠を作ることからはじめる。枠の大きさは、縦直径8尺、幅6尺3寸とする。これに、長さ12尺の袋網を取り付ける。網地は、麻糸、綿糸等を利用し、目合い3~4寸とする。

柄には、3尺の堅木を使用する。網の中央には、2本の脈糸を取り付ける。

漁期は10~11月。漁場は、河川の流れの穏やかな場所。

漁は、漁船に1人乗り組み行われる。始めに、適当な場所（淵等）を見つけて船を岸につなぎ止める。その後、用意した網を船の脇に設置し、サケが網の中に入るのを待つ。サ

ケが網に入ると脈糸でわかるので、この時網口をねじりサケが逃げられないようにしてから船に引き上げる。網が大きいので、サケが入ると同時に一気に引き上げることは出来ない。

ただ待ち続けるだけの漁のため、時間と労力がかかるうえ漁獲効率が悪く現在は行われていない。

## 10 さ で 網 漁

(津山町)

さで網漁は、陸上からさで網を用いてサケをすくいあげ漁獲する、独特のすくい網漁法である。

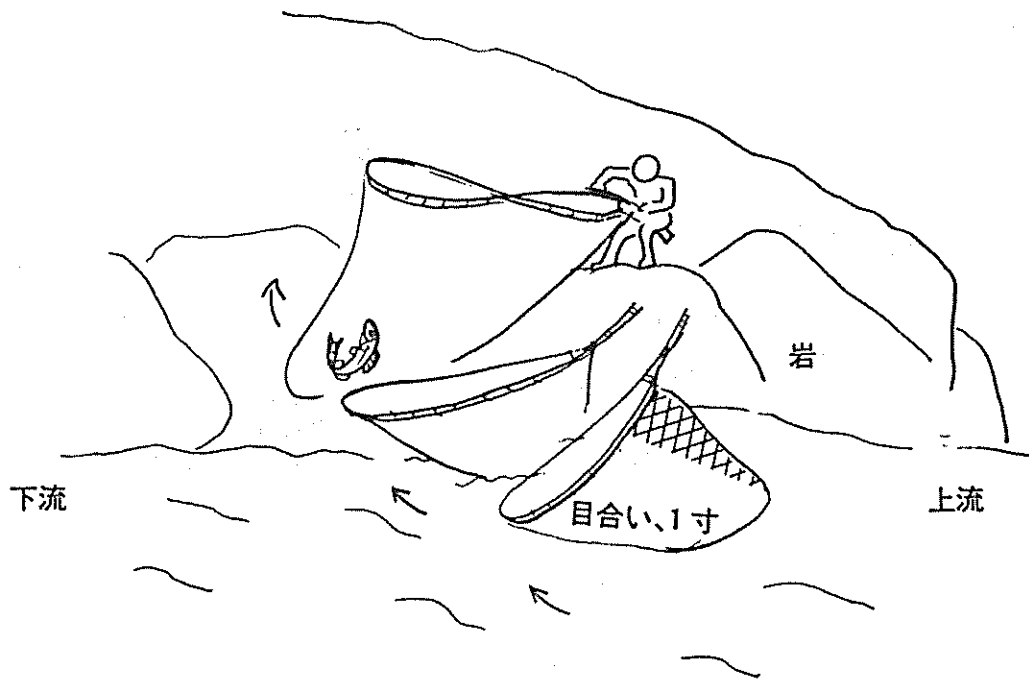
網には、竹を枠とした独特のさで網を用いる。さで網の作り方は、はじめ長さ3間前後の竹を根元で交差させて縛り、楕円型の輪を作ってこれに網を取り付ける。次に柄には木を用いて、柄と柄の枠を支える棒を枠に付けていく。最後に網を取り付ける。網は綿糸を用い、目合い1寸、深さ2間とする。枠には川から引き上げるための引き綱を2本結びつける。

漁期は、10～12月。漁場は、地先河川。漁を行う場所は、その地区で家ごとに決まっている。

漁を行う場所は、川岸から突き出た足場のよい所で、川の流れが岩にぶつかり渦を巻いているようなところや急流の場所がよい。漁師は、2人1組で漁を行う。1人は、網を操り、1人は引き綱を引く役に回る。まず、川水が渦を巻くような川岸の足場のよい岩を選び、1人が網を持ち立つ。もう1人は、枠に結んである曳き綱を押えその側に立つ。次に、川の流れを見ながらサケを見付けると、網を持った者は股間の部分に柄を支えながら、水面すれすれにサケをすくう。この時、曳き綱を持った者は、サケが逃げないように素早く綱を引いて網をあげ、鮭を漁獲する。2人で漁を行うのは、網に入った鮭を素早く引き上げるためと、水の抵抗があるのでこれを軽減し漁を楽に行えるようにするためである。又、事故等が起きた時のために安全性も考えている。

漁獲したサケは、頭を櫂の棒で叩いて、殺しておく。これは死んでいれば運搬する時に楽なことと、すぐに殺したほうが味が良くなるためだという。





さて網漁作業図

## 11 つなぎ漁

(仙 台 市)

つなぎ漁は、おとりの雌サケをつなぎ止め、それに近付いたサケを漁獲する、おとり式の投網漁である。

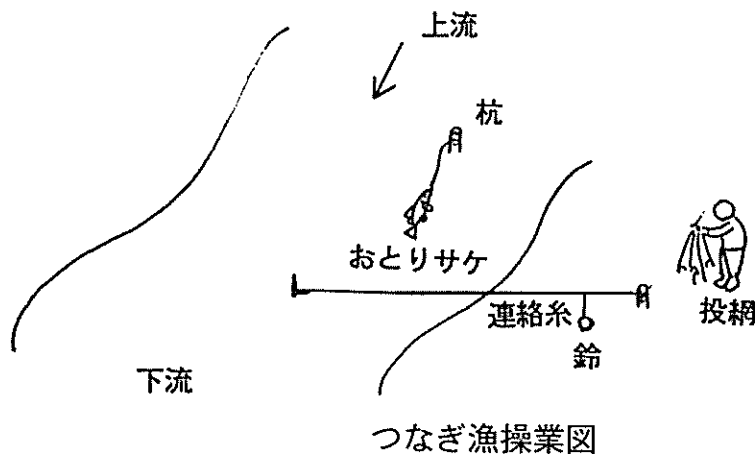
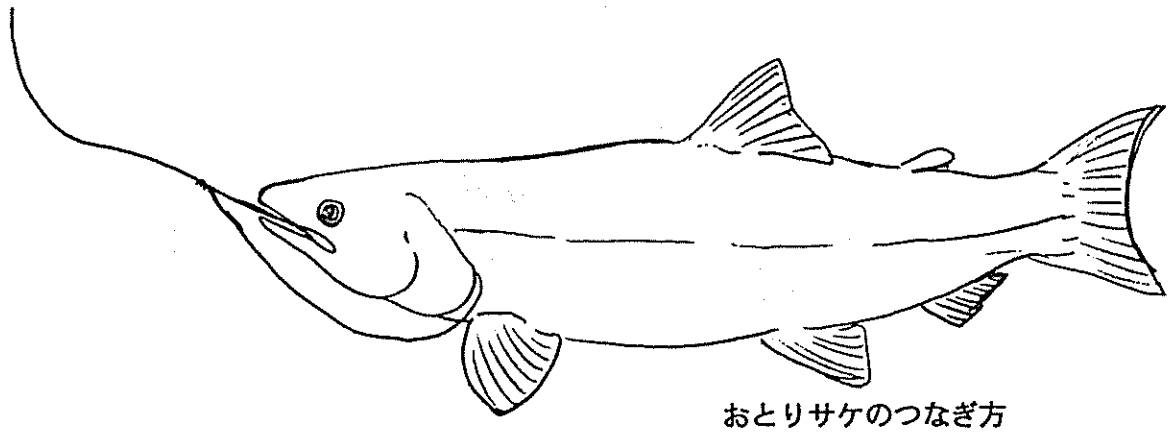
この漁では、まず生きたままの雌サケを漁獲し、おとりを確保することから始める。準備としては、川の岸寄りにサケをつなぎ止める杭を立てる。次に、その下に川の中央寄りに杭を立て、これに陸上との連絡糸をはる。陸上にも杭を立て、これに連絡糸をはり、糸には鈴を取り付ける。サケをつなぎ止める糸は、綿糸で太さ1分径のものを使用する。

漁期は、10～11月。漁場は、地先河川。

まず、サケの産卵適所を選定する。次に生きたままの雌サケの口から鰓にかけて糸を通し、杭につなぎ止める。雌サケには卵を生まないように腹に、木の栓や杉の枝を差し込んでおく。漁師は、陸上の連絡糸の所に待機し、雄サケが雌に近付き連絡糸に触れて鈴がなり出すのを待つ。しばらくして鈴がなりだすと、それを合図に、漁師は川の中に入り投げ網を打って、サケを漁獲する。

漁は、10月の大水が出るときから始まる。この時期のサケは上流に向かって遡上し産卵するため、漁場も上流となる。しかし、11月に入ると下流でも産卵するため漁場の範囲は

広くなる。また、漁期が終漁に近付くと、雌が多くなるのでおとりの効果がなくなるためこの漁は行わない。



## 12 伏せ鉤漁

(仙 台 市)

伏せ鉤漁は、川底に鉤を設置し、その側を通ったサケをこれに引っ掛け漁獲する、鉤引漁業である。

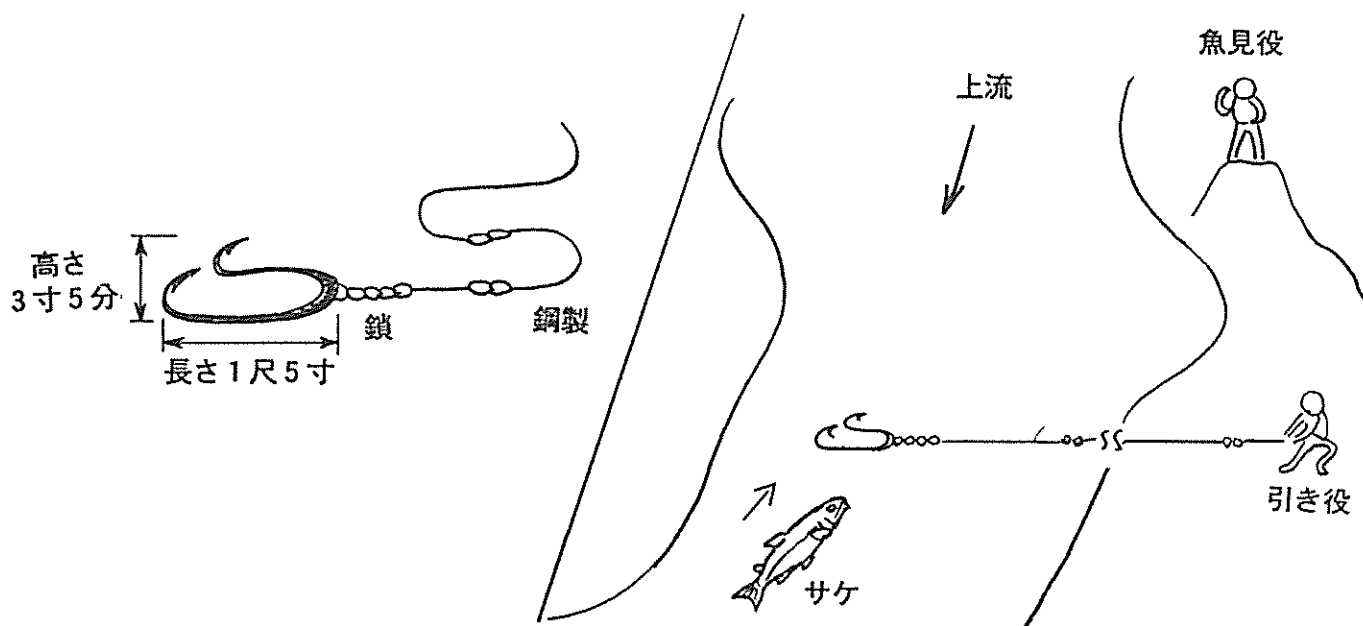
鉤は、鉄製の2本鉤で、曲がりまでの長さ1尺5寸、鉤の高さ4寸5分、幅3寸5分とする。鉤には、初め鉄製の鎖を1尺前後取り付け、鎖には引き綱として水に入る部分には鋼製8番線を、水から上がる部分には麻縄を取り付ける。

漁期は、10～11月。漁場は、地先河川。

漁は2人1組で行う。始めに役割分担を決める。1人はサケを見付け合図を送る役、1人は鉤を使ってサケを引っ掛ける役とする。始めにサケが多く産卵しそうな岸よりの場所を見付ける。次に川底に鉤を設置し、1人は引き綱を持ち、1人は高い所に上がる。魚見の者が川を監視しサケを見付けると、引き役の者に手を上げる等して合図し、サケが

鉤にかかる位置まで来ると次ぎの合図で引き役の者は引き綱を一気に引いてサケを鉤にかけ漁獲する。この作業を繰り返す。

この漁で取れるサケは、販売目的ではなく地域での食用とされていた。



伏せ釣漁具見取図および操業図

### 13 や す 漁

(志津川町)

やす漁は、河川に遡上してくるサケを鉄製のやすを使用して漁獲する、刺突漁業である。

やすは、鉄製の突刺部（歯）と、堅木を使用した竿の部分から出来ている。突刺部は、鉄製の3つ又で長さが、6寸から1尺位である。突刺先は、浅瀬で使うやす先にはかえしがなく、深い場所で使う大型のやす先にはかえしがある。竿は浅瀬のものは材質が竹または細木を使用し長さ1間半、深い場所のものは材質に堅木を使用し長さ2間とする。やすは、自分で作る。

漁期は11～1月。漁場は地先河川。

漁を行う場所は2ヶ所あり、浅瀬で水の中に入り漁が出来る場所と、水かさがあり岸から漁を行う場所である。

浅い川で漁を行う場合は、干潮の時に水が引いたのを狙って操業が開始される。水が引いて川の中でも漁師が動きやすい状態になると、短い方のやすを持って何人かが川に入りサケを突き始める。水が少ないため、サケも動きが遅くなるので目の前のものを突くのは、容易である。また、サケを大勢で追いかけると、サケは石垣の間に入り動かなくなるので、

この状態のものは簡単に突ける。しかし、親魚は販売目的があるので、突く時は腹をさけて首の付け根に刺すことが、商品価値を下げずにすむ方法でもあり、漁のコツでもある。突いたサケはすぐに堅い樫の木で頭を叩いて殺す。漁獲したサケは竹で編んだパンジョに入れて運ぶ。だいたい1人で30本前後漁獲すると、目標の旗をあげて漁は終了する。

水深の深い川で漁を行う場合は、水の中にいるサケが見えないのでそれなりの技術的熟練が必要である。まず、漁を行う前にやすを作ることから始める。この漁で使うやすは柄に杉を使うが、杉は山の中でも育ちが悪く細いものを選ぶようにする。理由は、漁ではやすが水の中に入った時沈みやすいものがよく、その点育ちが悪い杉は育ちの良いものより同じ太さでも年輪が多く、重さがあるためである。

漁は川水が出て水が濁った状態の時行われる。まず川岸にやすを持ち、サケが水面に顔を出すのを待つ、水が濁っているため、サケはどこに顔を出すのかわからないため集中力と反射神経が要求される。サケが水面に顔を出すと、その一瞬をとらえてやすを打ち込む。やすは、水中に潜ろうとするサケを捕えるため、水に沈みやすいようになっている。やすには紐が付いており、サケにやすが刺さると紐の感覚でわかるので素早く引き上げ漁獲する。しかし、一瞬の判断と技術を要するためこの漁を行う人は少なかった。

サケは昔から旧暦の9のつく日に、多く上るとされる。この地域では、明治前からサケが上がっており、漁獲量はその年によりまちまちだったが戦時中は地域で全体的に、サケが帰ってこなかったようである。

サケの値段は、大正から昭和の始めまでかなり高く、その当時の値段で1尾1円（現在の5,000円前後）にも値し、漁獲を消防団にも回し、消防団の運営費をそこから作り出していた時もあった。

旧暦の10月20日の恵比須講には、サケを神棚にあげる習慣がある。



ヤス漁具見取図および操業図

### III ウナギ

ウナギは私達の生活と昔から深く係わってきました。例えば、夏ばて防止として土用に食べる蒲焼き等が良い例です。また、内水面漁業の中では貴重な現金収入源として、一家の生活を支える重要なものでした。しかし、ヌルヌルとした細長い体は一見グロテスクで、その生態も不思議なものがある等、他の魚とは違う見方をされてきた部分が多くあります。そのため、特別な信仰や風習等も伝えられています。

ここでは河川湖沼に生息するウナギの生態、漁業の係わり、信仰等について漁具漁法に入る前に理解して欲しいと思います。

ウナギは主に河川湖沼の淡水域に生息しますが、河口付近の汽水域や沿岸の海水域等広い範囲にも分布する、淡海水領域を生活場所にもつ魚です。

現在ウナギの産卵場はまだわかっていませんが、フィリッピン東北方の深海ではないかとされています。ここで生まれた稚魚は、始め親とは全然にいていない、柳の葉の形をしたレプトセファルスと呼ばれる、体が半透明な姿をしています。この状態で、黒潮に乗り旅をしながら日本沿岸に来遊してきます。来遊してくる途中で、ウナギの稚魚はレプトセファルスから変態して、体が透明で細長いシラスウナギとなります。変態を終えたシラスウナギは春先に川を昇り始めます。日中は石等の下にいて、夜になると川の上流へと昇っていきます。そして自分達の生息する適当な場所を見付けると、そこで数年を過ごします。ウナギは河川での生活期が5年から10年とされ、早いもので4年で成熟するとされています。数年して成熟準備がととのい産卵親魚としての機能を持つと、晩夏から秋にかけて産卵のため海に下って行きます。これを下りウナギとよんでいます。そして海に出たウナギは、海を旅しながら自分達の生まれた遠い産卵場へと向かっていきます。これがウナギの一生です。

ウナギは夜行性で、日中は泥や石等の隙間にいて、夜に活発に動きだし餌を捕ります。一年の生活は、春から秋までの水温が高い時期には活発に活動し成長しますが、水温が10℃以下になるとほとんど摂餌しなくなり、泥の中に潜って冬を過ごします（越冬する）。春になり泥からはい出したウナギは、冬の間失った体力の消耗を補うため、摂餌行動が活発になり、貪欲に餌を捕りはじめます。同じように、秋にも越冬の準備を行うため、貪欲に餌を取り出します。餌は、小魚、エビ、昆虫、カエル等です。

他の魚と変わった部分としては、今までウナギがいなかった沼や川で突然ウナギをみかけることがあるということです。これはウナギが皮膚呼吸をすることができるため、雨等

が降り地面が濡れていれば、水の中を泳いで行かなくても、地面をはって移動できるためです。また、ウナギの滝上りというのがありますが、これも水の中を上るのではなく、滝の脇にある濡れた岩を上っていくために言われる言葉です。

この様なウナギの生態に基づいて行われるのが、内水面のウナギ漁です。

漁では、夜行性を利用した釣りや延縄、物の中に入り込む習性を利用した胴、川を下る習性を利用したナラッパツケ、越冬期を狙ったウナギ搔き等様々なものがあります。また何れの漁法も各習性を組み合わせたものとなっています。しかし、ウナギもいつでも同じ量が漁獲できるとは限りません。川に昇る稚ウナギの数が少なければ、漁獲は減ります。また、下りウナギを対象としていればウナギが海まで下る短い期間が漁期となるわけです。その間に長雨が続き頻繁に大水が出たりすれば、漁は出来なくなるわけです。この様なウナギ自身の問題、気象の問題、漁業環境の変化等様々な問題の中で、漁業者の人達は生活の一部としてウナギをとらえ自然と共に技術を発展させ現在に至っています。

ウナギ漁は、昭和の中ばまで川漁の中でも生活を支えることができた重要な漁業でした。このため、専門的にウナギ漁業に従事している人も多くいました。ウナギは、ほとんどが生きたまま取引され、漁業者は現金収入を得る手段として重要視してきました。他の川漁は後払いのものがほとんどでした。漁獲したウナギは、生簀に入れて活かしておき、ある程度数がまとまると籠等にいれて業者が買い取っていました。運搬は船等を使用していました。買い取られたウナギは、各市町村のウナギ業者に買い取られ料理店へと流れていき、特に土用（夏）の丑の日には夏ばてを防ぐ意味からも蒲焼き等で食されていました。一年を通じてウナギにも旬があり、土用（夏）前のウナギは冬籠もりから覚めて脂肪を蓄えている最中であまり美味しくないと言われ、土用以後のウナギは脂がのり美味しいとされています。特に下りウナギは独特に脂がのり美味しいとされています。

ウナギを巡る習慣や伝説としては、ウナギを食べていけないというものが多そうです。これは、北上川流域の柳津にある虚空蔵尊（虚空像菩薩）に見られるようにウナギが神様の使いと言われ、これを信仰するものは禁忌としてウナギを食べることを禁じている例があります。また、東北地方特に宮城県で信仰されている、ウソナン神（虚空像菩薩と同一視される。また、水の神ともされる。）もウナギを食べることを禁じているようです。これに加え、丑寅の年に生まれた人も、守護しているのが虚空像菩薩と言われ使いをはたすウナギを食べてはいけないとされています。食べてはいけないという反面、その栄養価（ビタミンAが多い。）を考えて食べて効くという信仰もあります。仙台にある愛宕山山頂の虚空蔵堂では、ここに祈願してウナギを食べると鳥目が治るといふ伝えがあります。しかし、何れの場合も食べた後、ウナギの絵馬を奉納するという点は共通しているようです。

この他では沼の主として（洪水伝説に多く登場する）、物言うウナギ（坊主の転成として生まれる）、片目のウナギ（人生教訓を伝える）等様々な形で私達に係わってきました。

ウナギは、そのグロテスクな風貌と夜行性の性質からその生態が人目にふれることが少なく、人々から特別扱いされていたのかも知れません。そんな中で多くの伝説や物語りを残している反面、生活を支える貴重な収入源、栄養源としても河川で漁業を行う人達にとって重要視されてきました。しかし、現在はその数も減少し漁獲が少なくなったことと、養殖物や輸入物が消費の中心を占めてること等から、ウナギ漁を行い生計を立てている人は、ほとんどいなくなっています。

## 1 ウナギ胴（ウナギド）漁

（河北町）

ウナギ胴は、竹で作った胴に餌を入れて川底に仕掛け、この中に入り込んだウナギを漁獲する、せん漁業である。

漁具の構造は、延縄と胴からできている。延縄は幹糸に太糸綿糸を用い、長さ300尋とする。幹糸には、3尋間隔で100本の枝糸を取り付ける。枝糸は綿糸8号を用い、長さ1尋とし、この先に胴を取り付ける。胴は竹製のものを使用する。幹糸には、間隔をおき枝糸20本に1個の割合で石を取り付ける。浅い場所での操業のため、浮き標と重り石はなく、深さに応じて竹を刺し、これに幹糸を結び付ける。

ウナギ胴を作るには、初めに材料となるモウソウ竹やカラ竹を、竹林に入り自分で選定して買い入れることから始まる。材料がそろうと竹を2尺5寸に切りそろえ、これを幅3分に割っていく。割った1本1本は肉部をはぎ取り厚さを1分にそろえていく。次に規格をそろえた竹は、長さの2割ほどを残して3つ割りか4つ割にする。これでがわの部分を作る材料ができる。次に細いシュロ縄で胴の周りをスタレ状に編み、円筒形に結び合わせる。胴の内と外には、タガをはめて正円形に整える。最後にアバと呼ばれる漏斗状の返しを、入口部分とし中央付近に付けて胴は完成する。

胴は自分で作るが、1つ作るのに1日がかかりである。現在は、ウナギが少なくなりウナギ胴をやる人が減ったことと、一つ作るには手間暇が掛かり採算が合わないことから、胴はほとんど作っていない。

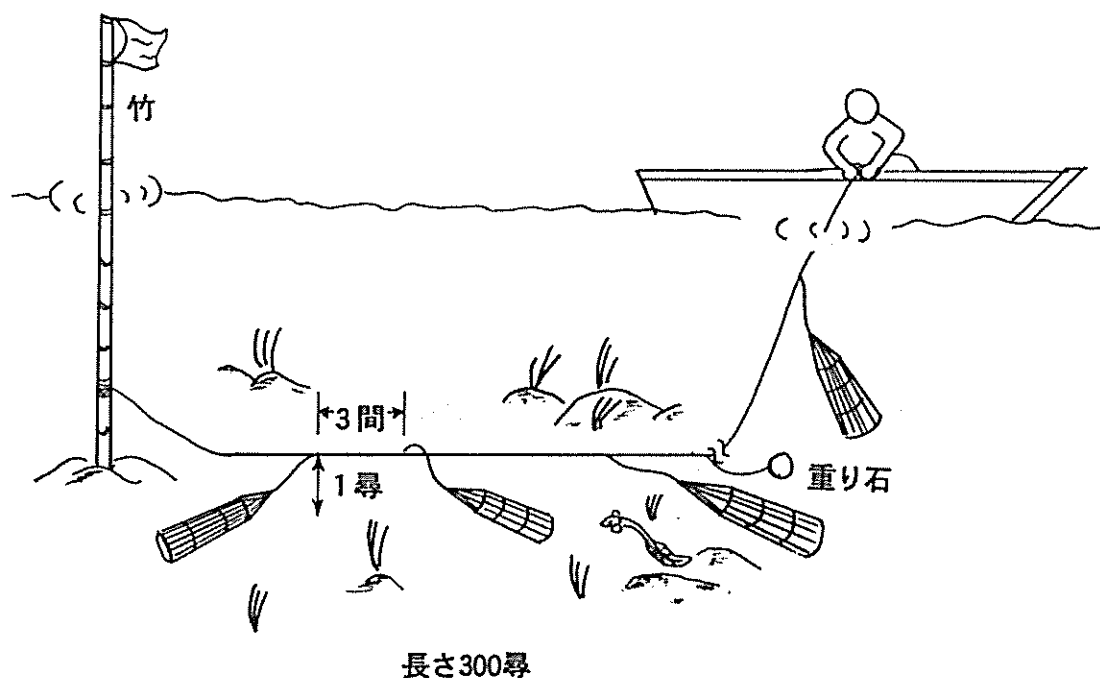
漁期は、5月（春先）～9月中。漁場は、地先河川の水深5m位までの場所である。

初めに、餌となるタニシやシラガイを用意する。夕方船に胴を積み込み出漁する。漁場に着くと、川の深みを探して船を止め、深さに応じた竹棹を刺す。これに幹糸を結び付け、船を進めながら胴を投入して行く。餌は、胴を投入する時に入れて行く。最後の胴が投入

し終わると、幹繩を竹に結び、この竹を川底に刺し目印とする。この状態で、翌朝まで置いておく。揚げ胴は、翌日の日が昇る前に行われる。夜中に行うこともある。まず、目印となる片側の竹を揚げ、幹繩を手操っていく。胴にウナギが入っている場合は、胴の後ろに付いているタガを外し、生篝籠にウナギを移す。漁をしていると、暗くても胴を持っただけでウナギが入っていれば大きいのか、数が多いのかがわかる。全部の胴を引き上げると、胴を船付場にもって行き、川に付けておく。胴は、水にいれておかないと壊れやすく、寿命が短くなるためである。また胴は、1週間使うとノロ（汚れ）が付きウナギが入らなくなるので、1週間に1回は洗うようにする。

漁獲は、水が増水し濁っている時がよく、海水が入り込んでいる時は悪い。

ウナギは多い時には、1つの胴に1貫目入っていたこともあった。大きいものでは、800匁のものが入ったこともあった。



ウナギ胴漁操業図



## 2 ウナギ刺洞漁

(河北町)

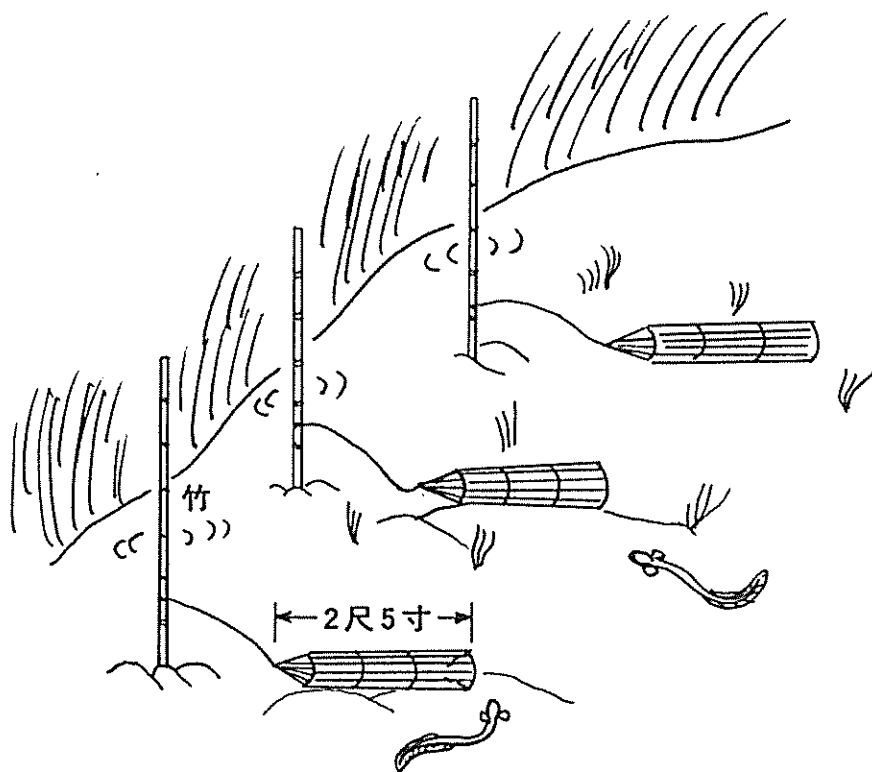
ウナギ刺洞とは、ウナギ洞と同じ漁具を使用するせん漁業である。

漁具の構造は、水深に応じた長さの竹の中央に、枝糸を結び付け、その先にウナギ洞を取り付けただけの単純なものである。

漁期は、春～秋。漁場は地先河川や湖沼の浅瀬の葦の間である。

日中、餌に使うミミズを土手やたんぼ、川岸等でとっておく。洞には、川岸や船上で餌を入れる。餌ミミズは、洞にそのまま入れると逃げてしまうので、竹に刺したり、挟んだりして入れる。現在は金網の籠があり、これに入れておくと、水に入れたままでも1週間は生きているので、餌を取る手間が省ける。

夕方漁船に乗り込み、出漁する。漁場に着くと、積み込んだ竹と洞を取り出し浅瀬の葦の間をゆっくりと船を進めながら、間隔をおいて竹を沼底に刺して行く。この状態で一晩置き、翌朝揚げに行く。ウナギが入っていれば洞を船に取り上げ、ウナギを生簞籠に移す。入っていない場合はそのまま設置する。洞は漁の状況を見ながらウナギが多く入る場所に移していく。



ウナギ刺漁具見取り図

### 3 竹筒（タガッポ）漁

（河北町）

タガッポは、川底に竹をくり抜いた筒を設置し、この中に入り込んだウナギを漁獲する、せん漁業である。

筒を使用するが餌は用いない。ウナギの物に入り込む習性だけを利用した、古くからある漁法である。また、使用する竹の太さと長さにより、入るウナギの大きさが決まってくるので、竹胴に比べて小型のウナギが漁獲の対象となる。

漁具は、幹繩に竹筒を取り付けただけの簡易なものである。竹筒を作るには、まず、直径1寸5分から2寸5分の竹を、長さ2尺5寸前後に切りそろえる。その後節を取り除き、筒状にする。竹はアクがあるので、水に付けてアクを取り除いてから使用する。アク抜きした竹筒は、2本をそろえて結び一つとして使用する。これを幹繩に9尺間隔で50個から100個取り付ける。

竹の長さや太さは、漁業者ごとの秘伝であり、竹の長さ等を変えることによりウナギの入り方が違うという。

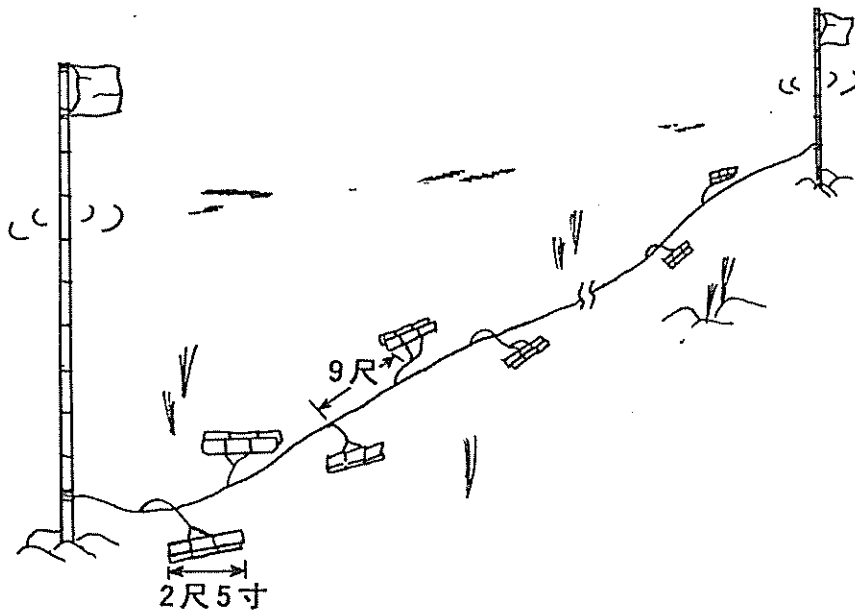
漁期は、6月～9月。漁場は、地先河川の浅場である。

夕方、木船に乗り込み漁場に向かう。漁場に着くと、まず竹竿を川底に刺し、これに幹繩の片端を結んで船を進めながら竹筒を下ろしていく。全部の投入が終わると船を止め、最後に竹竿を川底に刺し幹繩の端を結んで設置は終わる。竹竿は、幹繩の固定と共に設置場所を示す目印となる。この状態で一晩設置し、翌日日の昇る前に揚げ縄作業を行い、ウナギを漁獲して漁は終わる。

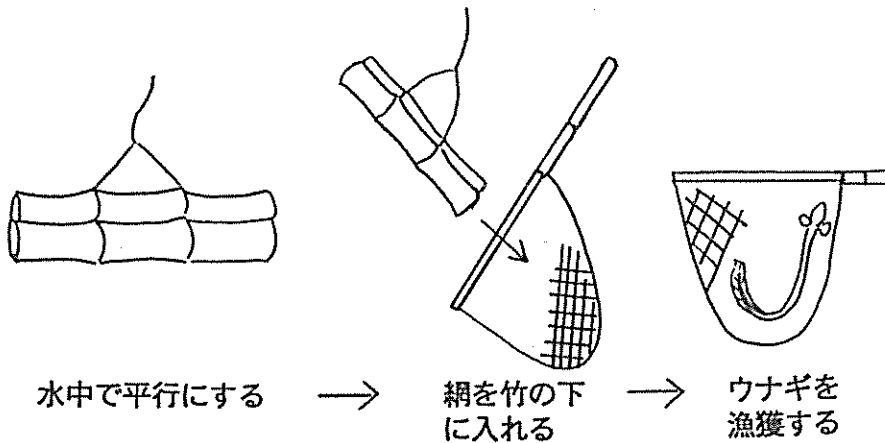
揚げる場合にはコツがあり、まず竹筒をゆっくりと水平に引き上げてくる。次ぎに水面近くにきた時点で、タモを筒の下に仕掛け、斜めにしながらウナギをタモの中に落として漁獲していく。竹には返しもフタも付いてないので、うまく扱わないと漁獲するまでに竹筒からウナギが逃げ出してしまい、せつかくの苦労も水の泡となってしまう。また朝日の昇る前に竹筒を揚げるのは、明るくなるとウナギが竹筒から逃げやすくなるためだという。

竹筒を使用した漁には、延縄式の他に、一本の竹竿に竹筒を取り付け漁を行う漁法もある。この場合は、漁場が葦等が生えている浅瀬であり、この葦の間に竹を刺し、これに竹筒を結んだものを間隔を開け、何カ所にも刺していくだけである。漁獲方法は、延縄式と同じである。

タガッポ漁は、ウナギ資源が少なくなり漁獲効率が悪いことから現在はほとんど行われず、今は漁獲効率のいい胴漁業や延縄漁業に入れ替わっている。



タガッポ漁具見取図



漁獲方法

#### 4 ウナギ延縄漁

(河北町)

この漁法は、ウナギを漁獲する目的で行われる、底延縄漁業である。

ウナギ延縄は、河川湖沼で行われるが、河川等の規模によりその漁法に若干の違いがある。

1 縄の作りは幹縄に綿糸40号を用い、長さを300尋とする。幹縄には3尋間隔で、100本の枝糸を取り付ける。枝糸は綿糸3号を用い、長さ2尺5寸とし、この先に針を結ぶ。針はイナズマ型5号又はキツネ型9号を使用する。幹縄には、間隔をおき3カ所に小型の石

を取り付け、両端には大型の重り石を1個ずつ取り付ける。浮き縄は、綿糸20号を用い、水深により長さを調整して使用する。浮きには木を使用する。

延縄は、材料を購入し自分で作る。1縄作るのに2時間半前後かかる。各糸（縄）には、昔は綿糸を使用していたが、綿糸は水に入れると腐るため、1シーズンでほとんどだめになっていた。現在はクレモナを使用している。針は道具屋で購入できる前は、針金を自分で細工し作っていた。

漁期は、5月中旬～10月下旬の6カ月間。漁場は地先河川全域。

この漁では、まず餌の確保が必要である。餌は季節によって違ってくる。春先にはその年生まれた小ザリガニを、小川やたんぼでエサ取り用タモ（ザリガニ取りタモ）を使ってすくい集め使用する。その後季節が移り、ザリガニが成長してくるとエサとしては大きくなり適さないため、夏から秋にはミミズに切り替えて使用する。

木船に1～2人乗り込み夕方出漁する。漁場に付くとまず用意した縄に、ザリガニやミミズの餌掛けを行う。餌が掛け終わると、船を操船しながら延縄を投入していく。その後数時間設置し夜中の2時以降に揚げ縄を開始する。

この作業を毎日繰り返し操業を行う。

縄は通常6鉢前後を、漁場と漁の様子を見ながら場所を変えて設置するが、作業の簡便化から6鉢つなげて1本とし投入する場合もある。

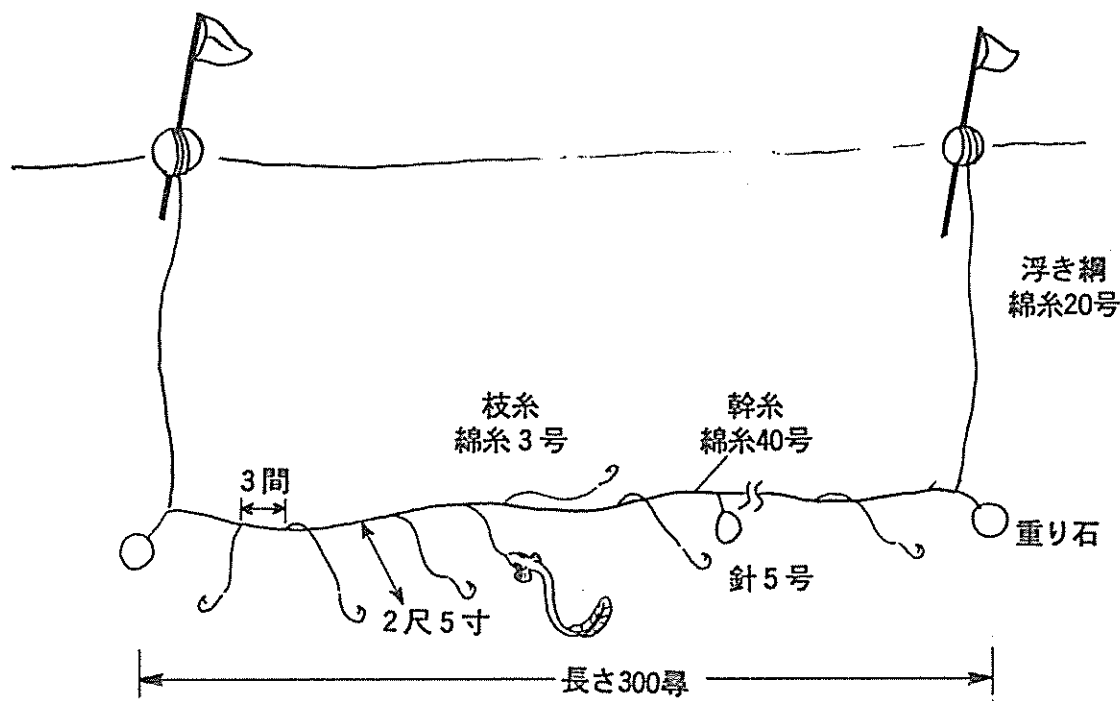
縄の設置は2種類の方法がある。一つは、川の流れに対して、真っすぐに入れるやり方で、この場合針は同じ深さに設置される。もう一つは川の流れを横断して設置する方法で、この場合は針の位置が浅い所から深い所まで補える。どちらの方法も、その時のウナギの分布状況を見て投入設置のやり方を変化させる。

ウナギ延縄漁は、水が温む5月から始まるが、この時期のウナギは越冬を終え泥の中に潜っていたものが動き出す時なので、深みの泥場の所に縄を設置するようにする。また、この時期のウナギは腹を空かせて癡猛なので、他の時期と比べ針にかかりやすい。その後、水が温かくなっていくにしたがい、浅瀬や障害物のある場所、砂地の所にも分布するようになる。秋を向かえ、下りウナギの時期になると大型のウナギが漁獲されるようになるが、それまでのウナギと違い下りウナギは針に掛かってもあまり暴れることがない。小型のウナギの方が、針に掛かってから暴れて針からはなかなか外しにくい。

漁獲される鰻は、春先から夏にかけては50匁前後であるが、秋の下りウナギになると50匁以上がほとんどとなる。今まで縄に掛かったもので、一番大きかったものは580匁のものである。

漁獲したウナギは、死んでしまうと商品価値がなくなるので生簀籠に入れて活かしてお

く。活かしておいたウナギは石巻の業者がほとんど買い取っていた。石巻までの運搬は、ある程度ウナギの数がそろうと行われる。まず、ウナギ用のザルを用意し、これを4枚重ねたものの一番上にふたをする。これを一つとし、この中にだいたい6貫目のウナギを入れて、船で運ぶ方法を取っていた。



ウナギ延縄漁具見取図

## 5 刺し針（サシコ）漁

（河北町）

サシコは、浅瀬に竹を立てそれに針と餌を付けたものを使って、ウナギを漁獲する固定式の釣り漁業である。

サシコは、刺し竹、枝糸、針から出来ている漁具である。重りは、使用しない。作り方は、初めに刺し竹として8尺前後の細竹を用意する。次に竹の下から2尺位の所に、枝糸として長さ4尺のナイロン3号糸を結び付ける。枝糸の先には、ウナギ針を取り付ける。最後に竹に枝糸を結んだ部分の上から4尺の所に、針掛け用の輪を糸で作って出来上がる。

刺し竹は、水深に応じて6尺～1帖2尺までのものを4通り用意する。

サシコは、漁の始まる前に自分で作る。用意する本数は、その年によっても違うがだいたい300本前後である。

漁期は、春の彼岸～秋の彼岸まで。漁場は、沼の岸沿い全域。水深は深いところで3 m、浅いところは1 m。

餌は季節によって違い、春はエビや子魚、秋にはミミズを使用する。

夕方、木船にサシコを積んで1人で出漁する。まず、場所を定めると船をゆっくりと進めながら、積んでおいたサシコに餌掛けをする。次ぎに船を止めサシコを取り出し、竹が泥の中に2尺前後刺さるように設置する。沼底は、泥場が多いので竹は刺しやすい。設置したサシコは、翌朝取り上げる。翌朝揚げ竹を行い、ウナギがかかっていたら生簀籠に移し、総てのサシコを回収して漁は終わる。

掛かったウナギを取り上げる場合、深い所はあまり問題はないが、浅い場所では障害物等のある場所に仕掛けることが多いため、ウナギが餌に掛かると逃げようとして障害物に絡み死ぬものがある。この場合糸を手操ってもウナギは上がってこないの、あらかじめ手鉤を用意しておきこれで引き上げるようにする。

揚げ竹してウナギが掛かった時は、ウナギを船に揚げても針を外さず、釣り元を切って回収する。これは針を外す等してウナギをいじり掛かったウナギを弱らせないためである。死んだウナギは商品価値がなくなる。

翌朝サシコは回収するが、船に積み込む時ウナギが掛かって糸を切ったものと掛からなかったものを分けて積み込むようにする。糸を切ったものは、あがり竹とよばれ、陸に帰った時糸と針を付け足す作業を行うためである。

1回の操業で、300本のサシコを刺すが、始まりから終わりまで3時間はかかる。また、300本刺すと、沼全体を1周出来るくらいである。

サシコの掛け方は、季節によっても違って来る。春先と秋の水温が冷たい時には深い所、水温が高い夏場には浅い所から深い所までの全体となる。設置する間隔は普通7～8間だが、多く捕れる所では近く、少ない所では間隔をおいて刺していく。また、横に平行に刺してだけでなく、岸に対して上下（深浅）にも刺していくこともある。

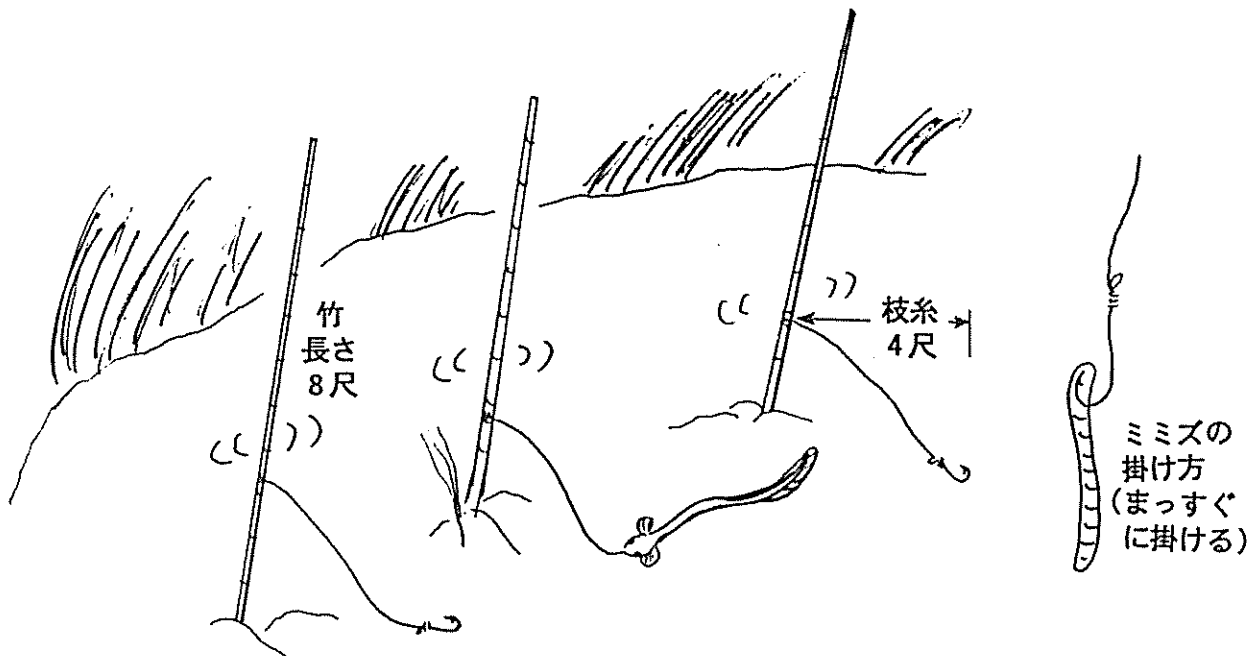
漁のしやすいのは、越冬から目覚めて春先に泥場からはい出す時で、この時は腹が減って食欲になっているので餌に食いつきやすい。また、秋の越冬前も長い冬を越すために体力を付ける時で、餌に対する行動は食欲である。

操業期間漁獲されるウナギのほとんどが沼の中に生息しているものだが、8・9月になると北上川から体色の違う大型のウナギが上って来て漁獲されるようになる。

昔はカジカ取りをしていると、10cm位の小型のウナギがよく見えていた。この小型のウナギが見えなくなってから漁獲量が少なくなったようである。

昭和の初めまでは、沼に500本のサシコを立て、3～4貫目のウナギを取っていた。ウ

ナギは他の魚と違い売り買いが現金取引だったので、生活していくのに重要な部分を占めていた。



刺し針漁具見取り図

## 6 穴釣り漁

(仙 台 市)

穴釣りは石垣や柵の中に入り込んでいるウナギを、竹竿の先に餌を取り付けた針を差し入れて釣り上げる、独特の釣り漁業である。

漁具は細竹、糸、縫い針からできている。穴釣りの仕掛けを作るのは簡単で、細い竹を用意し、この先に糸を付けた縫い糸（糸は針の中央に取り付ける。）を取り付けるだけである。縫い針は、竹の先に尖った部分を刺して使用する。

漁期は、6～8月。漁場は、河川湖沼の石垣や柵の隙間のある部分である。

餌は、ミミズ、ドジョウ、タニシ等を使用する。その他では、アユを使用する地域もある。アユは独特の香りがあり、この香りがウナギを誘うと言われ、他の餌に比べてアユを餌にした仕掛けに、ウナギは食いつきやすいと言う。

漁場は、ほとんど歩いて行ける場所である。漁には、穴釣りの道具と餌をもって出掛ける。漁場につくと、始めに石垣や柵等ウナギの潜んでいるような場所を見付ける。適当な

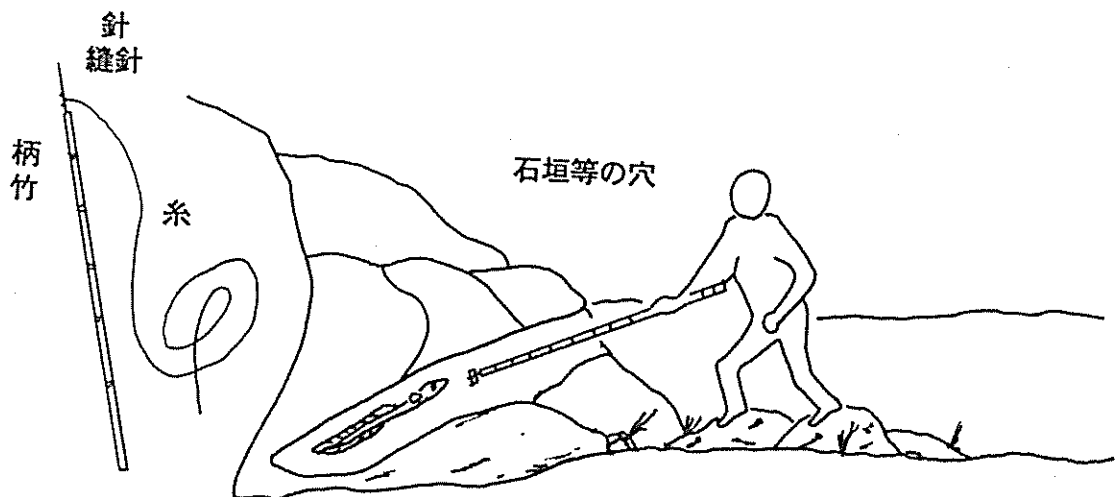
場所が見付かると、縫い針の胴の部分に餌を付けて、ウナギがいそうな穴に竹竿を刺し込んでやる。竿を差し込んでしばらくするとウナギが食いつくので、この時は、竿を引き抜き糸を手操って食いついたウナギを穴の外に一気に引き出し漁獲する。ウナギがすぐに掛からない場合は、竿だけを引き抜き餌を仕掛けた糸を石の上に残して、別の穴に仕掛けを差し込んでいく。しばらくして、置いていた糸が穴に引き込まれると、ウナギが掛かったしるしなので、この時も素早く、糸を手操ってウナギを漁獲する。この作業を繰り返して、漁を行う。

この漁では、ウナギの潜んでいる場所を見付け出すことが大事である。例えば、川底の石の間で漁を行う場合、川底の石の隙間を見てウナギがいるかどうか判断する。川底をのぞくと石の下には穴があり、この入口がきれいになっていればウナギが潜んでいる目印である。それは、ウナギがその入口から出入りするため、つねに穴はきれいな状態になっているからである。汚れた状態の穴には、ウナギはいない。

操業では、いくつかの技術が必要となる。一つは、隙間に竹を入れる時、中に潜んでいるウナギには絶対にふれてはいけないと言うことである。これは潜んでいるウナギが自分の体に何か当たると警戒して、餌を捕らなくなるためである。もう一つは食いついた時の漁獲方法である。ウナギが餌に食いつくと絶対にはなさない、それを利用して糸を一気に穴から引き出してくる。もし、途中で力を抜くとウナギは、石の間に絡み糸が切れるくらい引いても、絶対に穴から引き出すことはできないからである。

穴釣りでは他の魚も掛かるが、餌の食いつき方でウナギかどうか判断することができる。ウナギは一気に食い付き引くが、カニやギギは何度もコズクように引いてくる。

現在は、石垣のほとんどがコンクリートの堤になったことと、ウナギの数が減り漁獲効率が悪くなったこと等から、この漁はほとんど行われなくなっている。



穴釣り漁具見取り図および操業図



## 7 檜葉漬け（ナラッパツケ）漁

（河北町）

この漁法は、県内各地の河川や湖沼で行われる漬け漁業である。

檜葉漬けとは、檜の枝を束ねたものを川底に沈め、この束の中に入ったウナギを網を用いてすくい取る独特の漁法である。

この漁では、秋に産卵のため川から海に下っていく、下りウナギを対象としている。檜葉漬けで捕れる下りウナギは、他のウナギ漁で捕れるウナギより、大型であり味がよいとされる。

漁具は檜の枝を使用した、檜葉と呼ばれるものを使用する。

檜葉を作るには、まず8～9月始め山に入り、材料となる檜の枝を調達することから始まる。伐採した檜葉は、使用する前に天日干ししてから使用する。檜を、材料として使用するのには、落葉樹であるが葉が落ちにくいことと、水にいれても強く長持ちするためである。他の落葉樹ではくぬぎもあるが、くぬぎは油が多く材料としては適していないとされる。

作り方は、まず材料となる長さ3尺位の檜の枝を用意し、これを根元の部分で10本合わせたもの（いっばと呼ぶ）を作る。次にこれを3つ合わせて1つとする。これが1つの檜葉となる。檜葉は根元の他に、縄を使って中央辺りもしばっておく（帯び縄と呼ぶ）。こうすると水に入れてもばらばらにならず、操業中船に引き上げる時も楽である。

檜葉には材料として、この他にも古いものを使う場合がある。この場合は古い檜葉を束の中央に起き、回りを新しいもので包むようにする。こうすると、新しい枝だけ使用したものより、ウナギの入りが良くなる。また、現在は伐採等により檜の木も少なくなり、新しい枝が手に入りにくくなっていることも古い枝を使用する理由である。

また檜葉は、ずっと水にいれておくため、2週間位すると葉が落ちてくるので、この時は新しい枝をたして使用する。

漁期前には前もって操業に応じた数の檜葉を作っておく。

檜葉漁にはこの他に、網（ナラッパサデ）、すくい網（船の上でウナギをすくう小型の網）、生簀篋等を用いる。網は、網の部分と柄の部分から出来ている。網は、枠の部分で4尺前後の竹を用いて三角形とし、これに目合い2～3分の網を取り付ける。これに柄として、長さ6尺前後の竹または木を取り付ける。

この漁は、9～10月の2カ月間行われる。漁場は、地先河川の護岸から水深6～8尋までの間である。川底は泥場である。水温により漁場の水深が違い、温かい時には浅い2尋前後の所から始まり、水温が下がるにつれて深いところへ移動する。

漁は、檣葉を漁場に仕掛けることから始まる。まず、用意しておいた檣葉を船に積み込み漁場に向かう。漁場は護岸の杭等の障害物がある場所で、ここに着くと用意しておいた檣葉を船を進めながら順番に川底に沈めていく。沈める場合は、間隔をおきながら深さを調整していくことが必要である。これは深さを調整することにより、操業時にウナギがどこに多くいるかを確かめ次の操業の目安とするためである。檣葉の方端には、重りを付け、もう片方には浮きを付けて目印とする。檣葉は川底につき横になった状態にして設置する。この状態で、2日位おいてから操業が行われる。

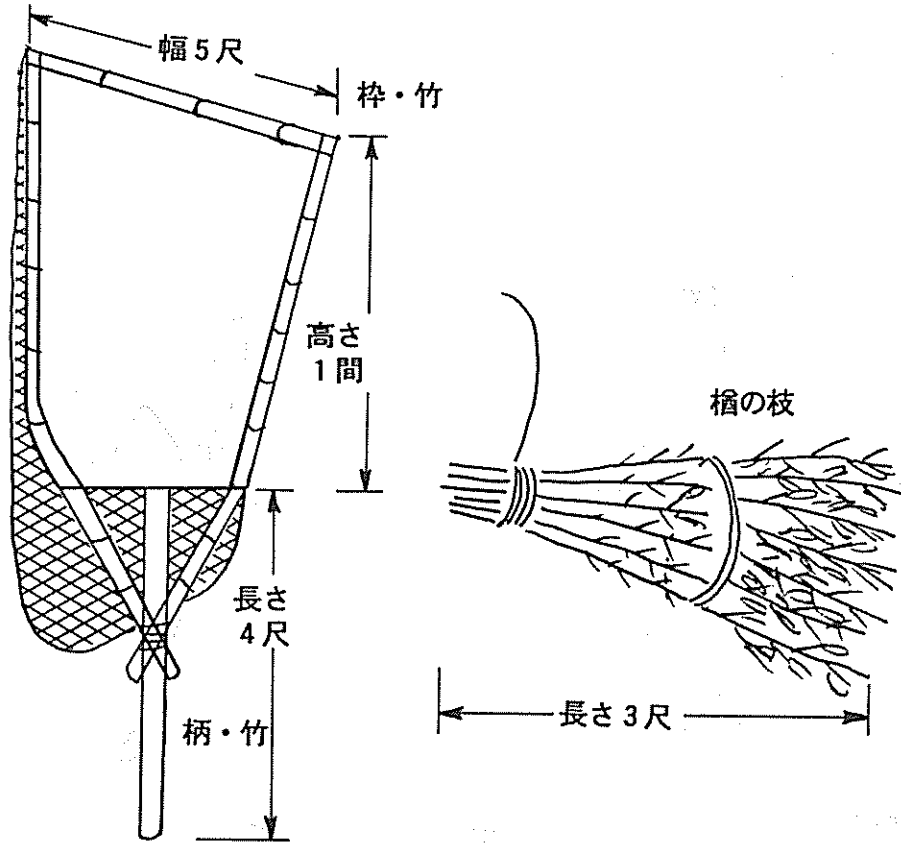
潮時を見て流れがとまっている日の早朝、木船に3人乗り込み漁に出掛ける。潮時を見るのは、流れが早いと操業するのに船が流れて作業効率が悪いためである。3人の分担は、1人は船を操り、1人は檣葉を揚げ、1人は網でウナギをすくう役である。漁場に付くと、まず船を目印の浮きに寄せ、1人がその浮きをつかみ船にゆっくりと揚げていく。網を揚げて、重りと檣葉が見えてくると、網（ナラッパサデ）を担当している者が檣葉を包み込むように網を入れ、檣葉を引き揚げてくる。檣葉と網が船べりにきた時点で、檣葉を担当しているものが帯び縄を持ち檣葉をゆすってウナギを網に払い落とす。その後、檣葉を船に引き揚げ、網にウナギが入っていれば、ウナギを生簀籠に移し活かしておく。最後に引き揚げた檣葉を元の位置に戻し作業は終了する。引き揚げ作業は、1つずつ行う。漁では、この作業を繰り返し行い。順に他へと移って行く。

操業は毎日ではなく、ウナギの入る間隔をみてほしい2日に1回の割合で行う。

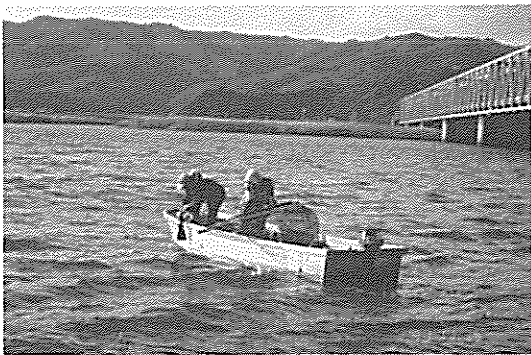
この漁では網を揚げる時の2人の呼吸が大切で、揚げてくる途中檣葉の中にウナギが見えても、巧くすくわないと船に揚げた檣葉からウナギが逃げて網に入っていないことがある。また、仕掛けた檣葉は新しい状態より少し汚れた時の方がウナギがよく入るといふ。

漁獲の多い時は、雨の後川水が増水して水が濁っている時である。しかし、10月20日以降に台風等により大水が出ると、この時を最後に下りウナギはほとんど捕れなくなる。この大水の出た時が、何らかの合図になりウナギは一斉に海に下っていくようである。この時無理をして漁に出ると、大漁になるという。

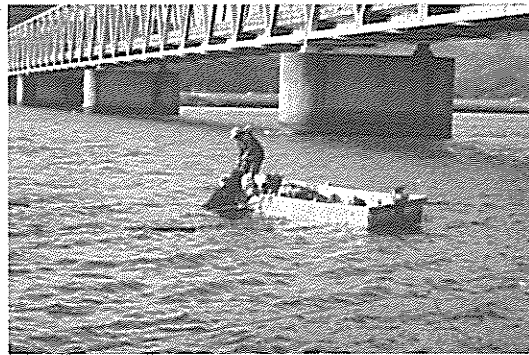
昔は、川岸全体で漁が行われ漁獲があったが、現在は川の状態も変わったこととウナギの数が減ったためか、限られた場所での操業しか行っていない。戦前は檣葉を1人50個仕掛けていた人もいて1日ばかりで揚げていた。多い時には、1つの檣葉に5本前後のウナギが入っていた。しかし、現在は1つの檣葉に3本程度が多いほうである。ウナギは、その年により豊漁不漁がある。



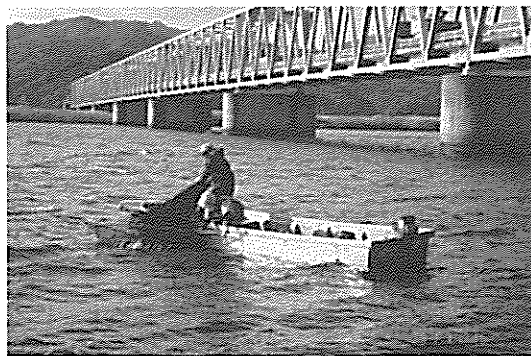
檣葉漬け漁具見取図



ナラッパのひきあげ



網の投入

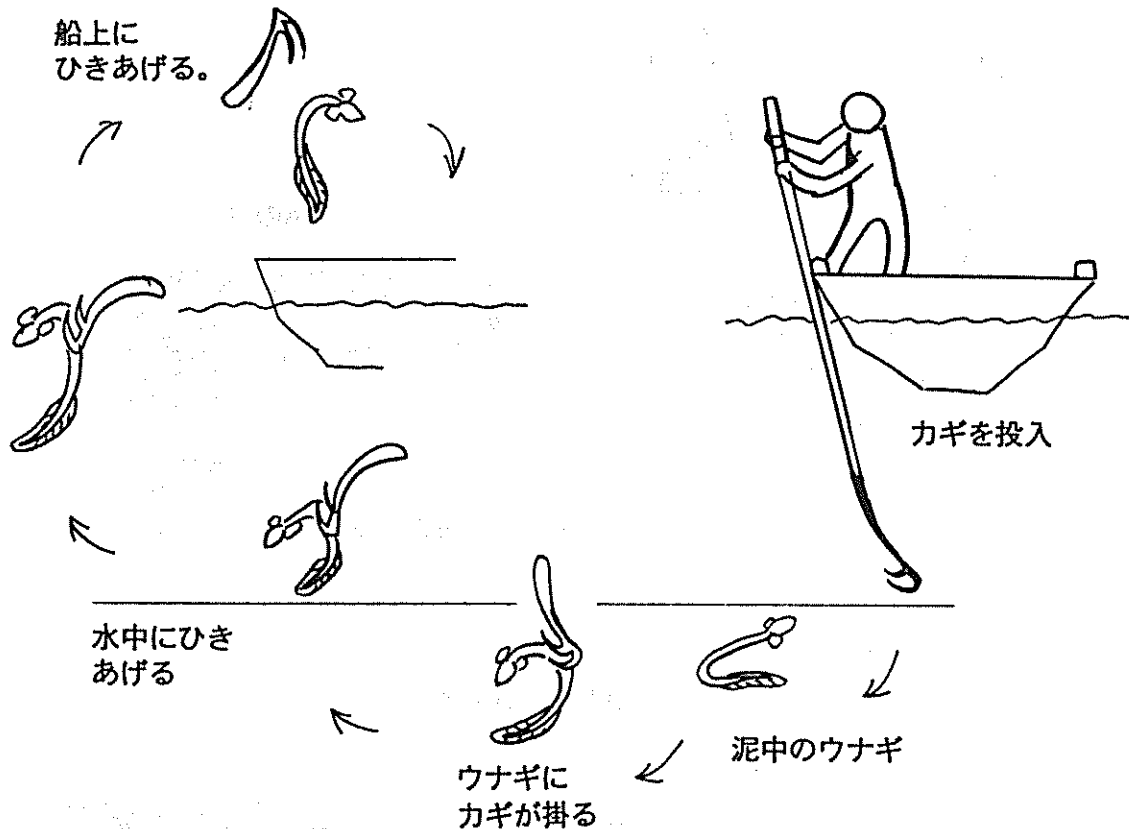


ナラッパの回収

ナラッパ漁の操業

## 8 ウナギ掻き漁

(仙 台 市)



ウナギ掻き操業図

ウナギ掻きは、鉄製の鉤を川底に差し込み、これに掛かったウナギを漁獲する、鉤引漁業である。

ウナギは、寒くなると冬を越す（越冬する）適当な泥場を見付け、その中でほとんど動かなくなる。この習性を利用して、漁は行われる。

漁具は、ウナギ掻きとよばれる独特の道具を使用する。

ウナギ掻きは鉤と柄の部分からなる。鉤は平鉄製の長刀状で、長さ2尺5寸～3尺である。鉤の腹の部分は、刃状となっており泥を掻きやすいようになっている。柄は竹または木を用い、長さ6尺～15尺となっている。鉤と柄は、船をてこにして掻きやすいように、反った形となっている。刃の材料には、日本刀が一番適しているという。

漁期は、10月～翌年3月の冬期間。漁場は、地先河川の底質が泥の場所。

日中の操業である。木船に1人乗り込み出漁する。漁場に着くと、船を風上に回し、流れを横切るように進めていく。次に船の中央よりウナギ鉤を川底に下ろしていく。ウナギ

鉤が川底につくと、泥の中から1尺～1尺5寸程度鉤を差し込み、この状態で船を進めていく。ウナギが鉤に掛かると感覚でわかるので、この時鉤を船べりをテコにして、泥を掻き揚げるように船上に一気に引き上げる。鉤には返しがないので、鉤が船上に来た時点でウナギは船の中に落ちる。この作業を繰り返し、漁を行う。

また、ウナギ掻きは浅い所で、船を使わず操業する場合もある。

この漁では、より多くのウナギの越冬している泥場を知っていることが、漁獲量を決める大きな要因となる。

現在、この漁を行う人はほとんどいない。

## 9 ウナギかけ（ウナギカギ）漁

（志津川町）

ウナギかけは、浅い河川で行われる鉤を使用してウナギを引っ掛け漁獲する、鉤引漁業である。

漁具は、鉤と柄から出来ている。鉤は、長さ1尺の細い鉄棒を利用し、返しのないように曲げて作る。棒には、長さ3尺の堅木を取り付ける。夜間の漁ということで、この他にはカーバイトランプも使用する。また、ウナギを入れるための竹籠も用意する。

漁期は、水が温みだしウナギが川を上りだす6月頃である。漁場は、川底の浅い小河川や沢である。

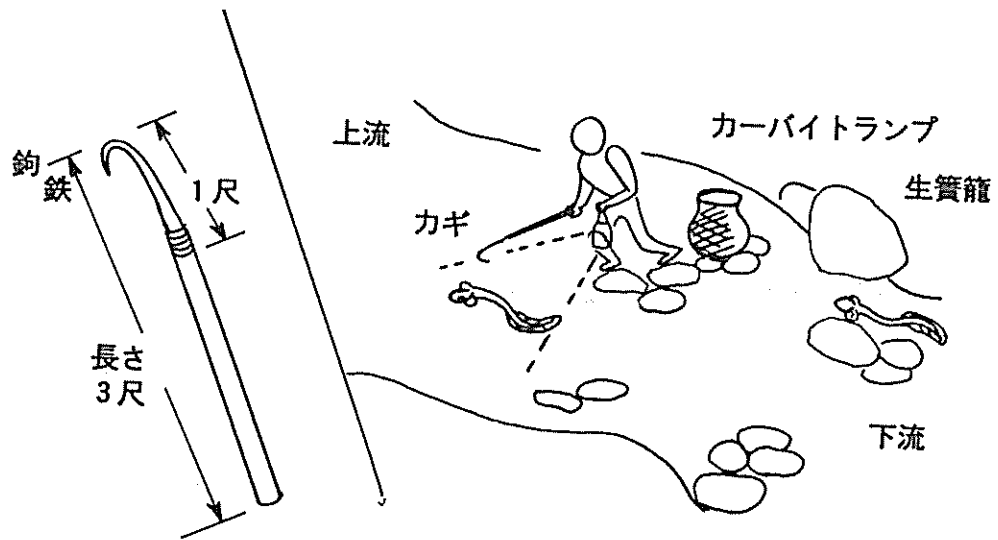
夕方、日が暮れると漁具を用意し近くの川に向かう。川につくとカーバイトランプを用意し、水面を照らしながら漁を行う。川の中でウナギを見付けると、片手に持った鉤を使用し、ウナギをひっかけ籠に入れる。この作業を川の中頃より上流に向かい、繰り返す。

ウナギかけで漁獲量を左右するのは、ウナギをかけて籠に収容する時の要領である。ウナギは、ひっかけたあと素早く籠に移すが、ぬるぬるしているので手際が悪いと籠に入らないで、川の中に逃がしてしまうことが多く、かけたわりにウナギが取れないことがある。このため、下手な人は名人の何倍か大きい籠を用意して、ウナギが逃げないように口を広くしていた。

現在はウナギの量が減りあまり捕れなくなったため、この漁は行われていない。ウナギかけの時に限らず、山道等を歩いているとウナギが陸を這っているのに会うことがある。この様なウナギを見た時は、たいがいその後大雨が降って、大水が出ると言う。

また、この地域では下りウナギを対象とした河口付近での地曳き網も行われる。下りウナギは、海に出でからも、しばらくは河口の周りの砂浜付近におり、ここを狙って地曳き網を行うと下りウナギが漁獲出来る。地曳き網は、他の魚を取るときよりも重りを多くし

て海底をするようにするのが、コツである。しかし、現在はウナギの数も減り、砂浜もなくなったためこの漁は行われていない。



ウナギかけ漁具見取図および操業図

## IV ア ユ

アユは、宮城県の各河川に分布する、キュウリウオ科の魚です。色は美しく、背中側が青みがかったオリーブ色で、腹側が銀白色をしています。

昔から県内の各河川で漁獲されてきましたが、現在では漁業というより遊魚の対象として広く釣り人に知られるようになっていきます。

ここでは、漁具漁法に入る前にアユの生態と漁業の係わりについて理解して欲しいと思います。

アユは、秋に河川で産卵し、その後孵化した仔魚は海に下ります。そして、仔稚魚期を海で過ごします。冬の間を海ですごしたアユは、春になると一斉に川に上り始めます。川に上り始めたころの稚アユは、体長が7～8センチ前後で、食性は水性昆虫や付着藻類等を食べる雑食性です。また、この頃の稚アユは、群れをなして川を上ります。川の下流から中流へと上って行くアユは、堰等の障害物にあたっても、それを乗り越えながら、力強く進んでいきます。

中流域までたどり着いたアユは、食性が藻食性となり付着藻類を盛んに食べ始めます。川の中の石についた付着藻類を歯（櫛状歯）を石にこすりつけながら摂餌します。摂餌した石にはあとが残り、これがよく言われるアユのはみあとなわげです。付着藻類を食べ始めると、アユは餌場を確保するため自分のなわばりを持つようになります。なわばりは、餌場の石を中心にだいたい1平方メートルで、夜間もこの場所にとどまっています。しかし、淵等に移動する場合があります。また、なわばりをもてないアユもいて、このアユは成長が悪いようです。なわばりは、アユにとって非常に大切で、他のアユが自分のなわばりに入って来ると体当たりをして、そのアユを追い払います。餌を盛んにとって成長したアユは、夏が終わり秋を迎える頃になると産卵の準備として、それまで美しかった体色が婚姻色にかわり、黒みがかった濃い緑色になります。そして、秋口に川の水が増水するとそれをきっかけに、下流の砂礫底の淵に移動します。この下って行くアユたちを、落ちアユと呼んでいます。産卵はおもに夜行われます。産卵は1尾の雌に数匹の雄がよりそう形で行なわれています。雌は産卵回数が1回で産卵したものは死んでしまいますが、雄は産卵に何度か参加し、ある程度の期間生き続けます。ほとんどのアユは、産卵が終えて1年で死んでしまいます。石等に産み落とされた卵は、水温が15℃前後で約2週間で孵化し、7ミリ前後の仔魚となります。孵化した仔魚は、川の流れにのって海に下っていきます。そして、海に出た稚魚は沿岸でプランクトンを食べて成長し、翌年の春川を上がります。

これがアユの一生です。

河川でのアユ漁は、この一生の中でアユが川を上り始めてから産卵をむかえるまでに行われる漁業です。

漁はおもに釣りを中心として行われ、アユがなわばりをもち相手を攻撃する習性を利用した友釣り、落ちアユを漁獲する築等独特の習性を利用した様々なものがあります。

昔から県内各河川のどこでも普通に見掛けられ、子供から大人まで漁を行っていました。しかし、一般的に釣りが普及してからは、漁業者の人達の他に遊漁者の人達も増え、資源管理の意味からも種苗を放流して資源を絶やささないような方法も行っています。

資源を絶やさないという意味では、古くは弘仁5年(814)にも、未成熟のアユの漁獲を禁止した話もあります。このことでも、アユは資源量が多く無尽蔵に捕れていたのではなく、資源の維持を考えた漁期や漁法の規制が昔から行われていたことがわかります。

アユという字は漢字で、鮎、年魚、香魚と書きます。鮎という字は一般的に使われますが、鮎とは昔から占いをこの漁を使って行ったために占うという字をあてたもの、年魚とは1年で寿命が尽きて死んでしまう魚の意味、香魚とは独特の香りをはなつ魚の意味として使われています。いずれにしても、アユは私たちとは古くから係わりをもった魚であるということが言えます。

## 1 梁（ヤナ）漁

(仙 台 市)

梁漁は、竹等を用いて川に堰(すのこ状のもの)を作り、川を上ってくるアユがこのうえにのったところを捕まえる。定置式の梁漁法である。

梁の構造は、川をせき止める堰の部分とすのこの部分からなる。堰の部分は、竹の棒を用いて、河川を横切るようにして両方の川岸を結ぶように設置していく。すのこの部分は、竹を用いて、川の流れに対して斜めになるように設置していく。設置場所と大きさは、川の長さや流れ等によって違って来る。梁は、流れと作業に耐えるように、太い木を使い支えまたは土台とする。

漁期は、8～9月。漁場は、地先河川。

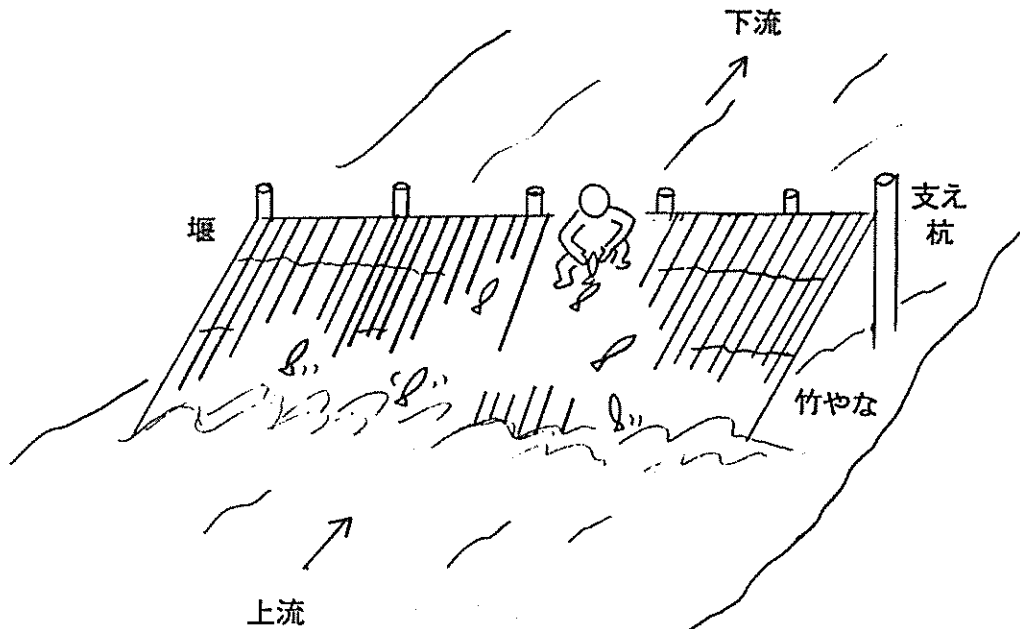
梁漁では、主にアユを対象として漁獲が行われるが、ウナギや他の魚も漁獲される。

アユは、7月下旬を過ぎると急速に成熟してくる。8～9月になると成熟が進み、雨が降って川が増水したのをきっかけに産卵のため、下流へと下って行く。この時、まえもって設置してある梁にのりあげ、漁獲される。アユは日により、多く取れる時と少ない時があるが、何れの場合も一定の量に達した時点で見回りを行い取り上げる。アユは水に上が



ると弱りやすいので、漁獲が多い時には梁について取り上げを行う。

この漁は、古くから全国各地で行われていた。しかし、産卵親魚を漁獲対象としているため、資源減少につながるおそれがあることから、しばしば禁漁期等を設けて規制が行われた漁業である。



ヤナ漁操業図

## 2 鶺鴒 縄 漁

(中新田町)

鶺鴒縄は、アユが水鳥を恐れることから、鳥の羽を使ってアユを驚かせ網に追い込んで漁獲する、追い込み網漁法である。

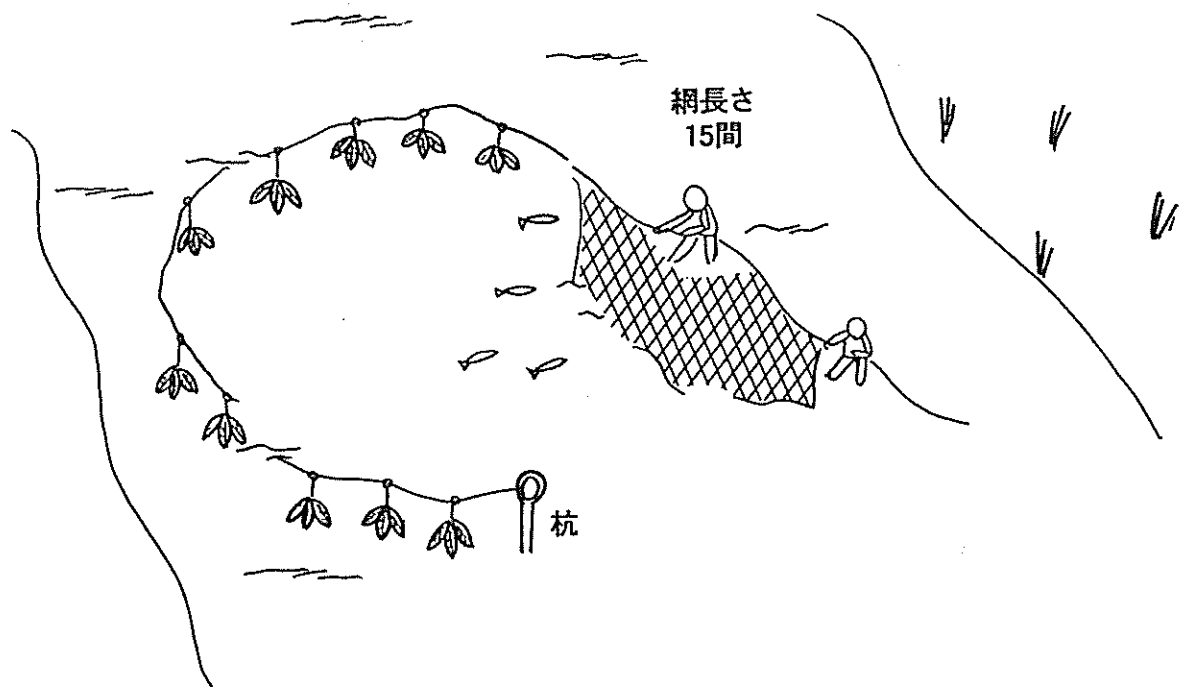
鶺鴒縄は、鶺鴒縄と呼ばれる縄の部分と、網の部分からなる。鶺鴒縄は、綿製の太さ1分5厘のものを使用し、長さ15間とする。縄は川の広さにより長さを調節して使用する。縄には、水鳥の羽を5～6枚を1組として結んだものを、1尺間隔で取り付けていく。網は綿糸を使用し、上部目合い6分とし下にいくにしたがい目合いを増やしながら細糸を使用していく。網の長さは浮子方で37尺、沈子方で42尺とする。網丈は3尺5寸とする。網の下部には、袋網も取り付ける。沈子は、鉛製のものを網下部に取り付けるがこれとは別に、網の両端に200匁位の円平型の沈子を取り付ける。沈子の全重量は2貫匁とする。

浮子は、桐製で長さ4寸、幅9寸、厚さ1分のものを使用する。

漁期は、7～9月。漁場は、地先小河川。

漁は、1～2名で行う。始め川岸を支点とし、この上流に向かって網を鉤型になるように張っていく。網が張り終わると、鵜縄を川岸の網を張り始めた下流から、川を横断するように流していく。鵜縄の片端は、川の中に打った杭に結び止めておく。鵜縄が、始めに仕掛けておいた網の端までつくると今度は魚を威嚇するように水を叩いたり、音を出しながら網の方に追い込んで行く。アユは非常に警戒心の強い魚であり特に水鳥等を恐れるため、羽音や水の中で羽が見えることにより、逃避行動が強まる。このため、下流から追われ上流に向かって逃げて行くので、網に刺さったり袋網にして入ったりして漁獲される。この漁法も、アユの習性をうまく利用した漁法である。

この漁では、アユの他にウグイやオイカワも漁獲される。



鵜縄漁操業図

### 3 さで鵜縄漁

(白石市)

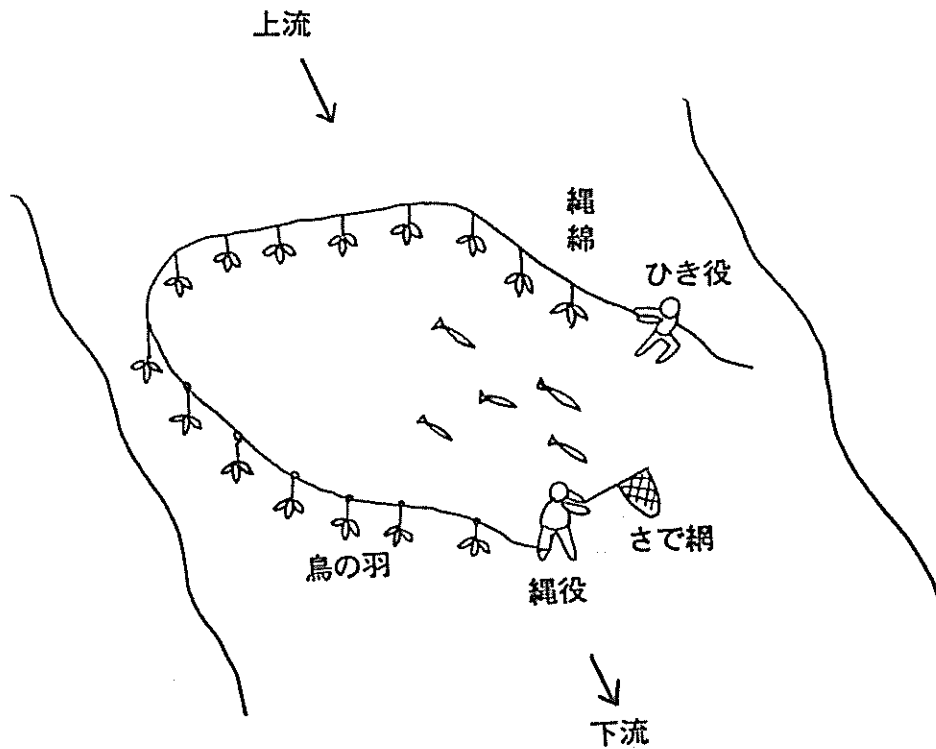
さで鵜縄は、さで網を用いて行う追い込み漁である。

鵜縄は、鵜縄漁で使うものと同じものを使用する。さで網は、竹製で枠の直径は2～3尺の楕円形とする。網は綿糸を使用し、目合いを上部1寸、中を7分、下を5分とする。網の長さは、2尺7寸。柄は堅木を使用する。

漁期は、7～9月。漁場は、地先小河川。

漁は2名1組となっていて行われる。始めに鵜縄と網を用意し、川に向かう。川では、アユのいそうな瀬を見つけて1人が網係、1人が縄係りとして役決めを行う。漁の準備が出来ると網係りのものは網を持ち、片足に鵜縄の片端を結んで川に入る。縄係りのものは川下より上流に向かって大きく円を描くようにまわり、網係りの側まで行く。定まった場所まで来ると鵜縄を引き寄せ始め、魚が縄の切れ目から逃げ出す所を、網係りのものがすくいあげる。網に魚が入ると、網係りのものに合図して、縄を一度ゆるめてもらう。その後、網に入った魚を取り上げ漁を続ける。縄を一旦ゆるめるのは、縄をしぼることによりアユが驚き縄の切れ目から逃げ出そうとするが、さで網ですくうには限度があり、しぼったりゆるめたりすることで、逃げ出して来る魚の量を調整し効率的な漁獲を行うためである。

一度鵜縄を巻き終わると同じ場所では続けず、場所を変えて次ぎの漁場に向かう。



さで鵜縄漁操業図

## 4 アユさで網漁

(志津川町)

アユさで網は、夜間に行われる、すくい網漁である。

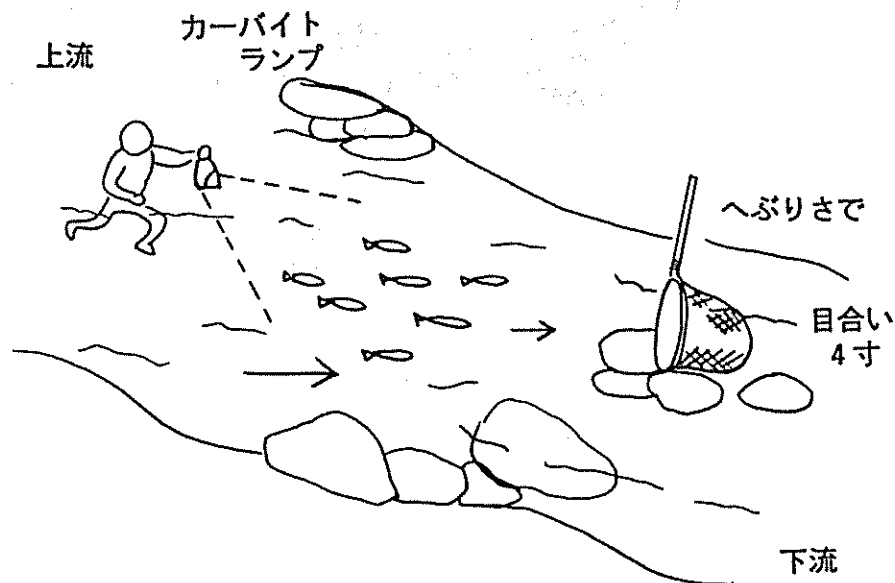
網は、へぶりさでと呼ばれるものを使用する。網の作り方は、網、枠、柄の部分からなる。網は絹糸を使用し、目合い4寸、長さ2～3寸とする。枠は竹を使用し、直径2寸5分とする。柄は堅木を使用し、長さ3寸とする。網は、魚に見えないように黒く染めて使用する。

漁期は、7～8月。漁場は、小河川の中～上流部。

漁は、夜間に行われる。夜になるとカーバイトランプを持って、川に向かう。アユは、夜になると流れのゆるやかな場所や、柳の木の下に集まっている。まず、適当な場所が見付かると、へぶりさでをアユのいる下流部に設置する。次に、アユの潜んでいそうな場所をカーバイトランプで照らす。ランプで照らされると、アユは集団で光を避けるようにゆっくりと移動するので、そのまま網のある方に誘導して、網に入った所を漁獲する。網は黒く塗ってあるのでアユは網のあることがわからないで入る。

この漁では、近くにいるアユがほとんど漁獲される。このため、アユは網に満杯になるくらい漁獲できるが資源の減少を考えて漁は行われなくなった。

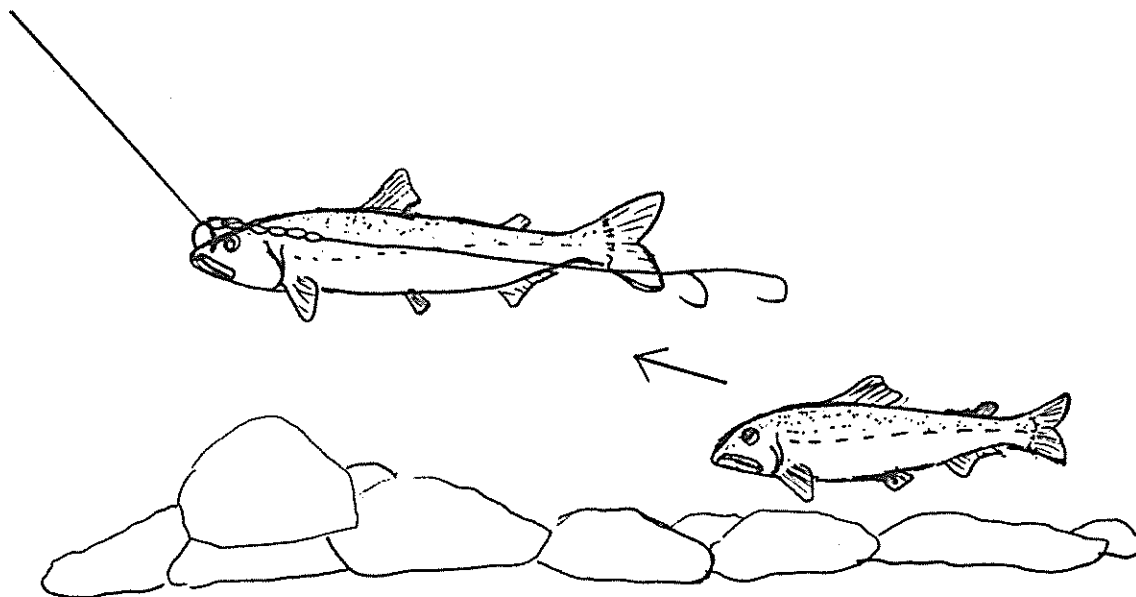
また、現在はアユの資源が減少し、昔のように獲れなくなったことも漁が再開されない理由である。



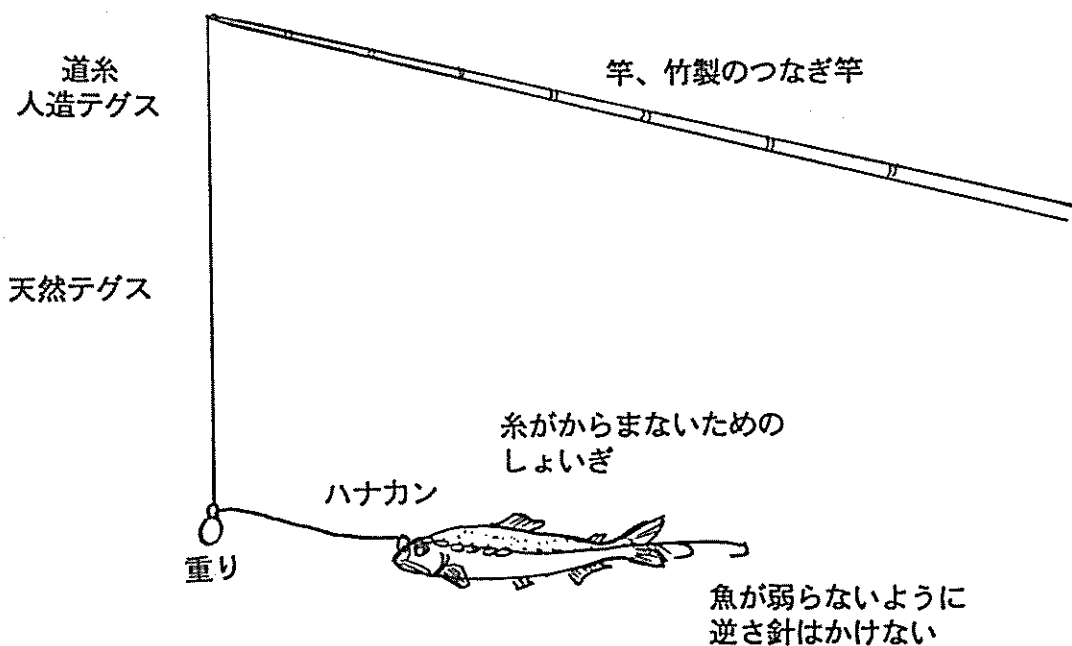
アユさで網漁操業図

# 5 友釣り漁

(仙台市)



なわばりに入り込んだおとりを  
おいはらおうとする地鮎



友釣り漁具見取り図

友釣りは、アユが縄張りを持つ習性を利用して行われる、独特の釣り漁法である。竿は竹製のつなぎ竿、長さ4間半前後のものを使用する。道糸は2種類使用し、1本は

人造テグス太さ3厘のもの、竿から12～15尺の長さに取り付ける。もう1本は、天然テグス太さ2厘のもの、3尺の長さで人造テグスの下に取付ける。重りは鉛製で、重さ3匁のものを使用する。幹糸は、人造テグスを使用し、幹糸の終端部には、罎アユを止めるハナカンと呼ばれる金属製の輪を取り付ける。ハナカンを取り付けた後方には間隔を置きながら、漁獲目的のアユを掛けるため数本の針を取り付ける。ハナカン以降の仕掛けには、1本目の針までの糸をよったものを使用し、糸や針が絡まないようにする。これをしよいぎと呼んでいる。現在使われているような罎アユに刺す逆さ針は、魚を傷めるので使用しない。この他にアユ釣りの道具としては、釣ったアユを活かしておくオトリカンや、タモ網等がある。

漁期は、7～8月半ば。漁場は、アユが縄張りを持つ瀬等。

春から河川を遡上したアユも初夏の頃になると歯の形が変わり、岩に付いた藻類を食べるようになる。このころになると餌（藻類）の多く付いた場所を自分達の縄張りとして持つようになる。アユは縄張り意識が強く、自分の場所を守るために、外部から来る侵入者に対しては、体当りの攻撃を行いおい払おうとする。この習性を利用して、友釣りが行われる。

友釣りをを行うためには、始め罎となるアユが必要となる。ほとんどは、毛針釣り投網等で漁獲し、自分で用意しておく。罎アユを用意する場合の注意は出来るだけ傷が少なく、背掛かりして弱っていないものを使用する。漁場では、まずアユのいそうな瀬を見つけることから始まる。アユ釣りでは場所の選定が大切で、川にはいる前から慎重に観察を行い、漁に適した場所を選んでから川にはいるようにする。場所が決まると、静かに川に入り漁を始める。アユは警戒心が強いのでできるだけ静かに漁を行い、アユを驚かせないこともこの釣りのコツである。

まず、罎アユにハナカンを取り付ける。この時は、アユを水に入れたまま取り付けを行う。これはアユの体温が水温と同じくらいであり、水からあげたり手でつかむことによって温度差がでる等して暴れ出し、せつかくの罎アユを弱らせる結果となるためである。また暴れない方法としてはアユを握る時両目を隠すようにすることもコツである。ハナカンを取り付けたアユは、川の上流方向に向けてそっと送り出す。その後、アユを泳がせながら竿を操作して、大きな石のある場所に誘導していく。野アユがいる場合は、罎アユの動きが変わるのでわかる。野アユは罎アユに対し縄張りを守るため、ぶつかってくる。その時、針に掛かる。アユが針に掛かった場合は、竿を立てて下流にくだりながら流れの緩やかな岸沿いの浅瀬に寄せて取り込みを行う。取り込みは川の中で行うが、この時罎アユの取り替えも行うようにする。上手な人では魚を弱らせないため1匹の罎アユで3～4匹を

釣り上げるが、現在は1匹の罎アユで1匹を釣り上げるのが普通である。また野アユも掛かった場所ではずれることがあり、一番はずれやすいのは頭掛かりの時である。漁獲は、多い時で30~40匹である。

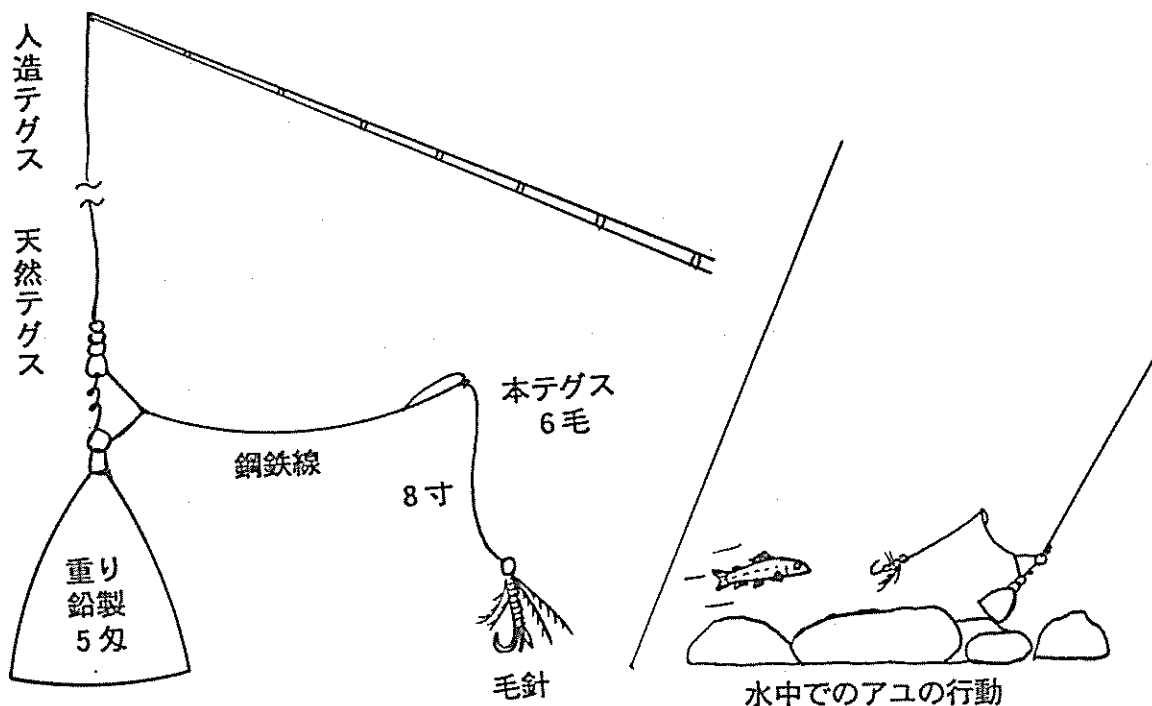
アユも7~8月なかばにかけては成熟が進み片腹が入ると言われ、縄張り意識が薄れるためか、罎アユを追わなくなって来る。また、8月半ばになると、形態的に雄雌の判断がつけやすくなる。雄は、胸びれや背びれがのびて尻びれが高く短くなる。雌は、尻びれが低くて長い。

現在は、各河川において資源維持等の目的により種苗放流も行われている。

放流種苗が琵琶湖産の場合は、地元産のアユとくらべていくつかの相違点がある。性質は琵琶湖産のアユの方が縄張り意識と攻撃性が強く、地元のものより友釣りに掛かりやすい。また、現在普及し始めているおとりルアー釣りにも掛かりやすいのが特長である。形態的には、琵琶湖産のアユは小型で背びれがあまり大きくなく、体型がスマートである。地元産は、背びれが大きく、頭かっこうがズングリして肩がもりあがっている。釣りには、掛かりにくい。

## 6 どぶ釣り漁（毛針釣り）

（仙 台 市）



どぶ釣り漁具見取図

どぶ釣りは、河川にいる水性昆虫（カゲロウ等）をアユが捕食するため、この虫に似せた疑似針（毛針）を作り、この疑似針を用いてアユを釣り上げる、釣り漁法である。

この釣りは、毛針の産地が金沢であることから、金沢釣りとも言う。

竿は竹製で、長さ3間半～7間の7本つなぎのものを使用する。道糸は2種類使用し、竿先から長さ3尺の所までは人造テグス、その下から重りの所までは太さ1厘の天然テグスを6尺の長さで取り付ける。重りと道糸のつなぎの部分には、鋼鉄製の太さ0.3ミリの片天秤を取り付ける。幹糸は本テグス太さ6毛のもの、8寸の長さで取り付ける。重りは、重さ3～5匁のものを使用する。針は毛針を使用する。

この漁では、毛針が重要であり、場所や天候その時の食い付き具合によって変えて使用する。例としては、赤系統はオソメと呼ばれ、下流で使用する。黒系統はヤミガラスと呼ばれ、上中流域で使用する。青系統はイリフネと呼ばれ、上流域で使用等様々な毛針を使用する。また、この毛針は自分では作れないため、専門の業者から購入する。

漁期は、7月中旬。漁場は、河川の上流や淵等の水深のある場所。

漁は、朝夕を中心に行われる。まず、漁場につくとアユの集まりそうな水深があり流れが穏やかで、川底に石があって餌があるような場所を選び出す。次に、天候、水の色、川の流れ等を考え、その場所に合った毛針を用意する。釣りの準備ができると、仕掛けをアユのいる場所に投入する。重りが底につくと3秒位待って、そのまま垂直に上げて行くか、下流に流しながら引き上げるようにする。水面に上げるまでは、3回位糸をゆるめるようにする。これは、アユが餌を見付けるとおって来るものの、いきなりとびつくのではなく、くわえる機会を狙いながらおって来て、餌の動きが変化したときにくわえるためである。釣糸をゆるめないでまっすぐに引いて来ると、餌をある場所まではおってくるがくわえる機会をのがして又元の場所に戻ってしまう。アユがかかった場合は引く感覚でわかるので、このときはごぼう抜きにせず、糸を張った状態でゆっくりと引き上げてくる。大型のものが掛かった場合は、糸を張った状態でしばらくおくとアユが弱ってくるので、その後引き上げるようにする。取り込みは竿を手元の部分から抜いていき道糸と同じ長さになったところで、魚を手元に寄せて、タモですくって取り上げる。

この釣りでは、ハヤやオイカワも釣れる。掛かった時の見分け方は、アユは回って引くが、ハヤはたてに引くのでわかる。また、釣り上げるまで、魚の大きさがわからないようでは、腕の良い釣り人とはいえない。

漁が良いときは、晴れて、暖かく、水がすんでいる時である。逆に、あまり天気が良くカンカン照りは良くない。

上流下流では、釣り上げる魚の量が違う。下流では赤系統の毛針を使い、小型のもの



(15センチ前後)が、多く釣れる。多い時には、100本前後。中上流では黒系統、上流では青系統の毛針を使うが、上流に行けば行くほど、魚の数は少なくなり、魚体は大きくなる。上流での漁獲量は、20～30本位である。

現在は、河川に堰や堤防ができて、よどみや淵もなくなってきている。

## 7 てんば（カラ掛け）漁

（仙 台 市）

てんば（カラ掛け）は、餌は使用せず針を使ってアユを引っ掛け漁獲する、釣り漁法である。

竿は竹製で、長さ11～15尺のものを使用する。道糸は、ナイロン及び、人造テグスを用い、太さ1厘～2厘5毛のものを竿の長さにより調整して取り付ける。幹糸は、本テグス及びナイロン、太さ8毛～2厘5毛のものを使用する。幹糸は長さ4尋とし、これに蝶針（ふたまた針）または3本イカリ針を4本取り付ける。重りには鉛を用い、流れによって重さをかえて使用する。

漁期は、7～10月。漁場は、河川の瀬等。

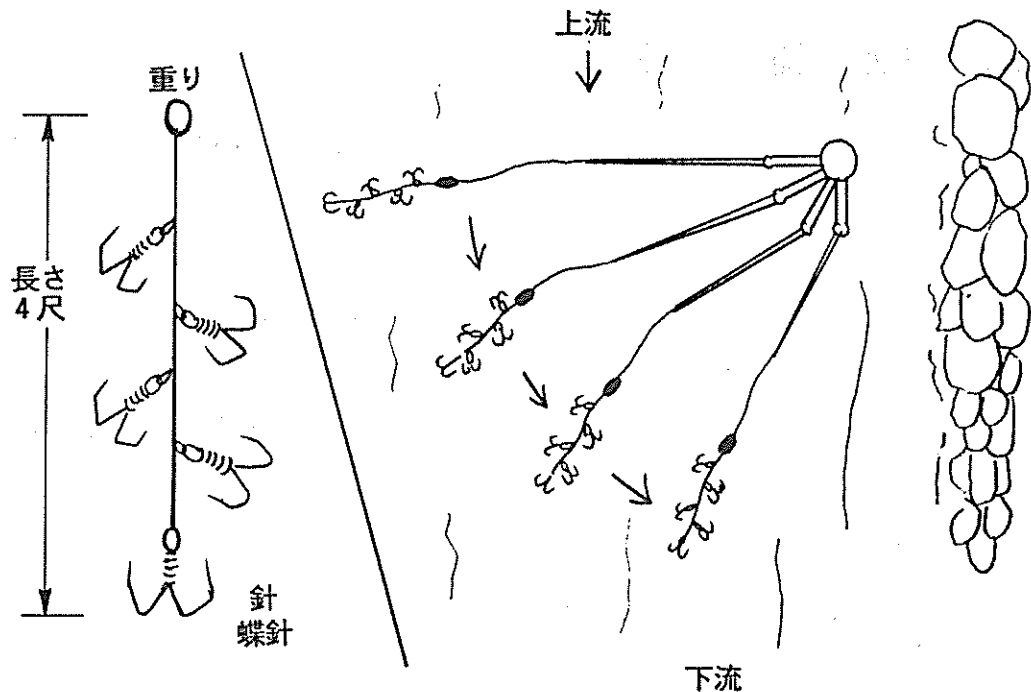
まず、アユのいそうな瀬を見付ける。次に適当な瀬が見付かると、石についているはみあとをさがす。はみあとからはアユの大きさと生息が判断でき、はみあとが大きく、幅広い時は大型のもの、はみあとが小さい場合は移動途中の場合である。しかし、何れを見分けるにしても長年の経験が必要で、その判断には個人差がある。はみあとからアユの分布を判断すると、漁師は川の中に入り狙った場所に仕掛けを静かに投入していく。重りが底につくと、竿を操作しながら、竿を何度か引くようにして、ゆっくりと下流にもって行く。この引き方で大事なことは、常に重りを底についた状態にしておくことである。この方法を何度か行い、アユが掛からない場合は次ぎの場所に移動する。アユが掛かった場合は、竿を立てながら流れの穏やかな場所に魚を誘導し、取り込みを行う。

この漁では、川の流れに沿って行う縦引きと、川の流れを横断して行う横引きがある。また、流れに逆らって上流に引く逆さてんばもある。引き方の点からすると、底がへいたんな場所で横引きもいいが、大きな石等があり底が凸凹している場所では横引きを行うと根掛かりする率が高いので縦引きの方が適している。

場所的には、流れの強い所の方が、大きくて良いアユが漁獲できる。また、産卵期になると、4～5キロもの漁獲ができる。昔は、多い時で背負い籠に1つ、約10キロ以上の漁獲をしたこともあった。

アユは成長過程で瀬にいて縄張りをもつものは別として、産卵するために瀬付きとなっ

ている時は、少々の濁り水や刺激等は気にかけないほどで、石等を投げて驚かない。このため、てんばを行うことにより、かなりの漁獲が上がる。これは逆にいえば産卵期の親魚を大量に漁獲するということで、資源管理の意味から、現在は産卵期の漁獲は行わないようになっている。



てんば漁具見取り図及び操業図

## 8 宙曳（ちゅうびき）漁

（仙 台 市）

ちゅうびきは、水深の深い場所にいるアユを針で引っ掛け漁獲する、釣り漁法である。

この漁の対象となるアユは、瀬付きアユではなく、休息のため深い淵に群衆している時のものや土用隠れで深い淵にひそんでいる時のものである。

アユは7月末（土用）を過ぎると土用隠れと呼ばれ、淵等の深みに集まると言われる。深みに集まる理由ははっきりしていないが、次のようなことがあげられる。1つは7月下旬を過ぎる頃になるとアユは成熟が急速に進み始める。この時のアユは縄張り意識が弱まるとともに警戒心が強くなり、瀬よりも淵への依存度が高まる傾向にある。つぎに、夏の土用頃は晴天が続くことが多く、川の水量が少なくなるため、水温が上がり珪藻が腐ったり、生理的に水温が低い場所に移動する等、淵を利用する機会が増える。また、釣りによ

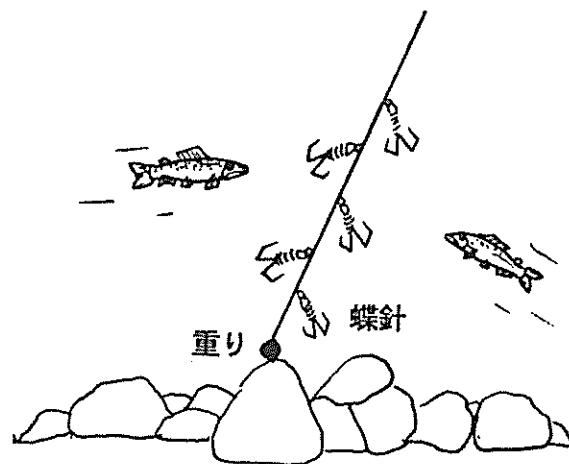
り、何ヶ月も追い回されたため瀬から安全性の高い淵へ逃げ込む率が高まるためだとも言われる。

ちゅうびきを行うのは、土用隠れを行っている7月下旬～8月にかけてである。この時は、アユが淵に入り込み集団でいることが多い。特に淵に集まる時期が多いのは、8月に入ってからと産卵のため川を下る前で、この時は集団になっている。

竿は竹製で、3～4間のつなぎ竿を使用する。道糸はナイロン製で、太さ1厘のものを竿の長さにより取り付ける。道糸の先端部には、鈍製の重りを取り付ける。針は、二またの蝶針を重りから5～6寸おきに、5～6個取り付ける。

漁を行うときは、まずポイントとなる淵のはみあとを見付ける。そこでアユのいることを判断する。次に、仕掛けを静かに川の中に下ろす。重りが底につくと少し待って、竿を操作し仕掛けをしゃくりながら強く引き上げる。この時、アユが掛かっていれば、手元に引き寄せ漁獲する。この操作を繰り返す。

この漁では、縦に仕掛けをあげるため、針がアユの腹に掛かることが多い。このためかかったアユは友釣り用の囿アユとしてはてきさない。



ちゅうびき漁具見取図

## 9 アユ釣り漁

(仙台市)

アユ釣りは、水が温みアユが海から河川に遡上する時を狙って行う、浮釣り漁である。

漁具は、道糸にテグス0.4号を用いる。針は3～4号のかえしのあるものを用いる。浮きには、小型の木製のものを用いる。

漁期は、4～5月。漁場は河川下流域。

アユは、水が温む春先になると、大群で河川を遡上してくる。このころのアユはまだ小型であり、遡上時は流れが急な所をさけ、岸よりの流れがゆるやかな所を上っていく。食性は雑食性であり水性昆虫等様々なものを貪欲に捕食する。

漁はこの時期の小型のアユを狙って、朝夕に行われる。始めに釣りの用意をして、河川の下流域に向かう。場所（瀬）が決まると、針に餌を付けて仕掛けを川の中に投げ入れる。川の中に入った針は、川底から15～20センチはなすように調整する。このころのアユは、動く餌に対する反応が強いのと、貪欲なためすぐに釣ることができる。アユが針にかかる時、浮きの沈み具合でわかるので、その時は素早く竿をあげ鮎を回収する。この作業を繰り返す。

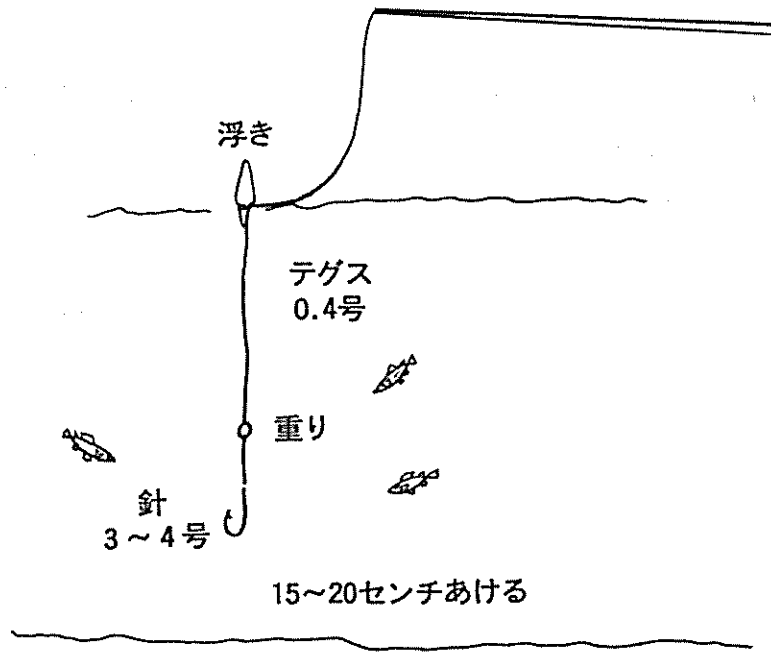
餌には、赤虫やサンを使用する。また、この地域では白魚を餌として使用する。白魚を針に掛ける時は、白魚を口に運び頭を切って針に掛け、体の部分は口の中で細かく噛んで川の中に吐き出し、撒き餌とする方法をとる。この時期に、白魚の頭で釣れるのは、アユだけである。

だいたい、1回の漁で20～30匹釣り上げると、資源が減少しないように漁をきりあげる。

また、この期間のアユを狙った漁では、カゴ釣りも行われる。

この釣りは、浮きを使わず行う。道糸の最後には、撒き餌を入れるカゴを取り付ける。針は、数本単位で取り付ける。

この釣りは、浮釣りとは違って瀬ではなく、淵で行われる。撒き餌を使用して行うため、近くにいるアユがほとんど釣り上げられるので、資源管理の意味からもこの釣りは、禁止されている。



アユ釣り漁具見取り図

# V コ イ

コイは、県内の河川や沼等に普通に見られる魚です。口の近くには2対のヒゲがあり、いかにも偉いというイメージと長命ということで、池や沼の主等と昔から呼ばれています。また、昔は祝い事という、タイよりもコイが主に用いられたことをみても、めでたい魚の代表として扱われていたこともわかります。また、コイは、生命力が強く水からしばらく出しても生きていることから、取り扱いが楽で他の魚より重宝がられた点もあったと考えられます。コイはこの他に、神に捧げる魚として、出世魚として、様々な呼び方や習慣がある魚です。食用としてはその栄養面から、古くは食べる事によって乳の出る魚として、また各種病気に効く魚として扱われています。料理は洗い、生き造り、コイこく等が上げられます。ただ、調理する場合は生きたものを使うのが鉄則です。それは死ぬと全身に生臭さが回るためだといわれるためです。何にしても、川漁の中にあっては、一般の人達にもっとも親しまれた魚の一つであるということが出来ます。ちなみに、祝い事には欠かせない魚として扱われてきたコイですが、婚礼の席だけには、用いなかったようです。これは、コイの腹ビレがコトドメのヒレと呼ばれ、子をとどめる。つまり子供が生まれないうとして縁起をかついで扱われてきたためのようです。

コイの生活場所は、河川や沼等の淡水域から河川下流の汽水域までの広い範囲におよんでいます。普段は流れの緩やかな少し深みのあるような場所の底の方にいます。底質は、砂泥底を好みます。深みの場所でも、杭等の障害物のある場所に多くいます。食性は、雑食性で貝類や水性昆虫、ミミズ、水草等を食べます。餌を捕る時は、口を泥砂の中に入れて餌を泥ごと口の中に吸い込むという方法で行います。その後、口内で餌と泥を分けて食べます。この様な摂取を吸引摂取と呼びます。産卵期は、春から夏にかけてです。産卵は、雌が生んだ卵に雄が精子をかけるような形で行われます。産卵回数は、一産卵期で2～3回です。卵は粘着卵で、受精後4～6日位で孵化します。成熟は、雄で2年、雌で3年位です。1年の摂取行動を見ると、春から初夏にかけては盛んに摂取を行います。夏には産卵後ということもあって摂餌が鈍ります。その後秋から水温の低くなる冬前までは活発な摂餌行動を行い成長しますが、水温が低くなる冬場には底が泥場の深みに入り餌をとらずじっとして越冬を行います。

食用にする場合は、冬場が中心で、この期間のコイは油がのり独特の臭みがないとして漁獲の対象とされます。このため、この時期を狙った、投網、刺網、ヤス、釣り等が行われます。しかし、冬だけでなく春と秋にも漁は行われます。

河川や沼の漁業以外では、養殖も盛んに行われています。食用の他では、観賞用としての飼育も行われ、ニシキゴイ等が知られています。また河川等への放流も盛んに行われている魚種の一つです。

## 1 コイ刺網漁

(河北町)

コイ刺網は、冬期間行われる、底刺網漁業である。

網は綿糸を使用し、目合い4寸100掛け、長さ50間、高さ2尋とする。浮きは桐材を使用し、1間に1個の割合で取り付ける。重りは鉛製で、沈子網に取り付ける。浮網は水深により、長さを調整して使用する。

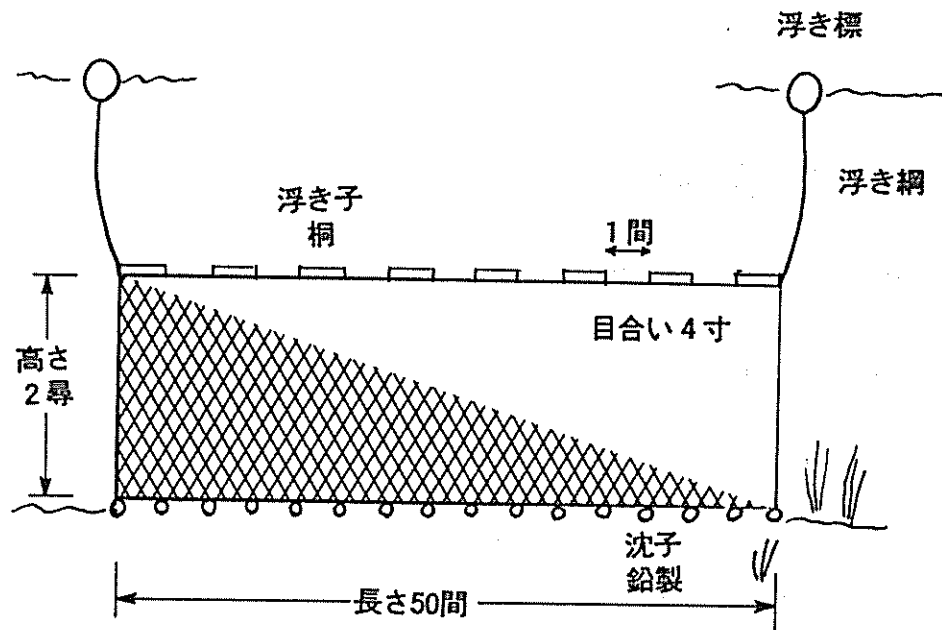
漁期は、10～3月。漁場は、地先河川や沼。

木船に1人乗り込み夕方出漁する。漁場に着くと、まず網を結び付ける竹を沼底に差し込む。次ぎに、浮網の片方を竹に結び付け、船を進めながら網を投入していく。網の投入が終わると、最後に竹を沼底に立てて浮網の方端を結んで、網の設置が終わる。網は、この状態で翌朝まで置き、日の昇る前に上げ網を行う。上げ網には、浮きの沈み具合からかかった魚の大きさを判断することが大切である。それは大型のコイの場合、網に刺さっているのではなく絡んでいる状態なので、ただ網を上げようとするとなかなかの大ゴイも網から外れ逃げられてしまうためである。網を上げる時は、まず浮きの沈み具合をみて、大物がかかっているサデ網を用意してから、上げ網に取り掛かる。網は浮き側と沈子側を同時に上げ、魚を包みこむように船上にもってくる。魚が見えた場合は、すかさずサデ網を用意しすくうようにする。

1回の漁では、多い時には60センチ前後のものが5～6本漁獲できる。今まで漁獲したもので一番大きかったものは、2貫500目あり、沼の主のようなコイだった。漁獲したコイは、活かしておき、販売したり自家用としたりする。

漁獲されるコイには2種類ある。野ゴイ（地ゴイ）は体が細く、放流したものは体が太くて短い。この他にはフナが漁獲されるが、現在はライギョ（カムルチー）、ブラックバス（オオクチバス）が多くなっている。ライギョが沼で漁獲され出したのは20年位前でその割には数が増えていないものの、ブラックバスは数が増えてきている。

食用面では、コイは刺身、デンガイ（田楽）、味噌汁等にして食べる。フナは卵を持ったものをすり身にしたり、甘露煮にしたりする。ライギョは刺身にするとおいしいが、ほとんど食べる人はいない。



コイ刺網漁具見取図

## 2 コイ釣り漁

(河北町)

コイ釣りは浮きを使った、浮き釣り漁法である。

竿は竹製で、長さ3～3間半のものを使用する。道糸は生糸を使い、長さを調節して使用する。枝糸はナイロン1～2厘のものを使用する。針はかえしのついた、2分半～6分のものを使用する。

漁期は、春彼岸頃～6月、9～10月の2期。漁場は、沼や河川でも流れの緩やかな所。

コイ釣りは、岸から1人で行う漁である。漁場は、淵やよどみで杭等の障害物があり、流れのゆるい深みの所がよい。まず漁場に着くと、針に餌を掛けて仕掛けを投入する。餌は馬鈴薯や飯粒を少し練ったものとする。仕掛けが底につくと、浮きが立つ位に糸を調整する。藻がある場所では、餌が藻の上にくるようにする。これは餌が藻の中に入り込むと、コイが餌を見付けられないためである。この状態でしばらくおき、あたりを待つ。コイは釣り餌に対して警戒心が強く、すぐに飲み込まないので、はじめのあたりが来てもすぐに合わせず、強く引いてから合わせるようにする。魚がかかれば岸に引き寄せタモ網を使って取り上げる。漁獲したコイは、生簀籠にに入れて活かしておく。

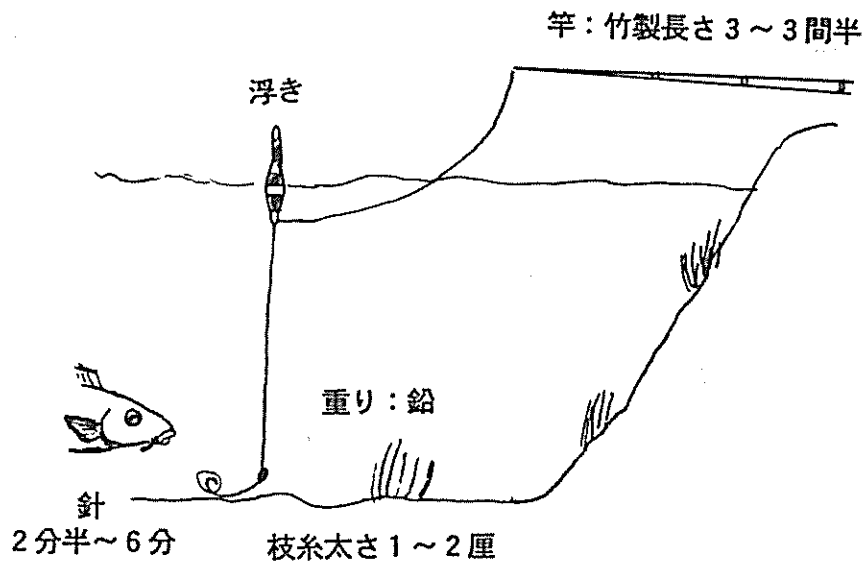
よく釣れるのは、朝夕である。また、気候的には天気が崩れる前や大水が出て川が濁っ



た後などが良い。

大型の老ゴイは特に警戒心が強いので、釣り場にはまえもって撒き餌をして、寄せておいたり餌にならしておくことも大事である。

現在は、仕掛けや餌等多用なものが販売されており、コイ釣りは漁業というより遊魚の対象となっている。



コイ釣り漁具見取図

### 3 コイ置針漁

(河北町)

置針漁は、竿や杭等に釣糸を結び放置し、これに掛かった魚を漁獲する、固定式の釣り漁法である。

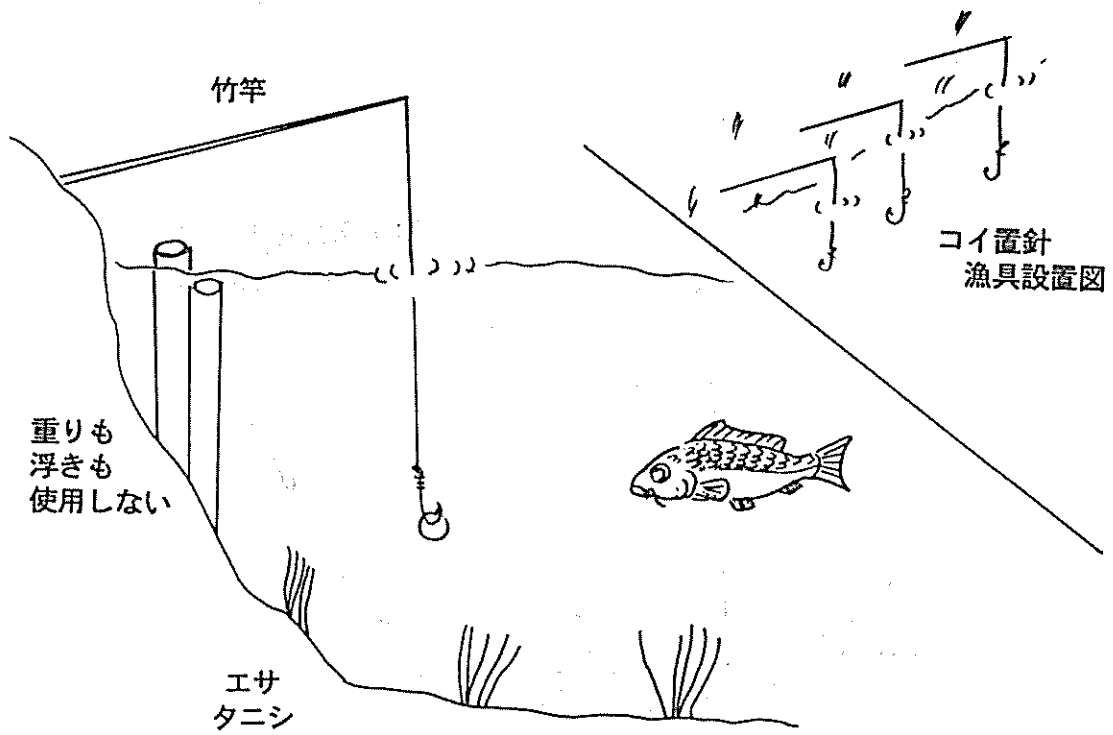
仕掛けには、浮きも重りも使わず、道糸と枝糸それに針のみである。糸は、浮き釣りとはほぼ同じである。

漁期は、春彼岸頃～6月、9～10月の2期。漁場は、河川や沼の岸よりで、障害物のある所。

初めに、杭等の障害物があるコイの潜んでいるような場所を選び出す。場所が決まると、用意しておいた竿に餌を付けて水中に投入する。餌は、浮き釣り等と違い長い時間置くために、タニシを使用する。竿を立てながら、仕掛けを水面スレスレに来るように設置し、

この状態で放置しておく。その後時間を見計らって、竿の立ててある場所に戻りコイが掛かっていたら引き上げ漁獲する。竿は何カ所にも立てておく。

現在、この漁法はほとんど見掛けられない。



コイ置針漁具見取り図

# VI フ ナ

子供の頃、川釣りといえばフナが一番釣りやすく親しみやすい魚でした。目の前の川で釣れ、子供達にも身近な魚でした。そればかりでなくフナは、古くから食用とされたり、神様への捧げ物として私達に深くかかわってきました。ここではそんなフナについて、少し理解して欲しいと思います。

宮城県で漁業の対象として漁獲されるフナは、ギンブナとよばれる種類です。宮城では、マブナと呼ばれています。

ギンブナは、河川の下流や沼に生息し、淀みや淵等の流れが緩やかで水が少し濁った場所をこのみます。普段は水中の中、下層を泳ぎ回っています。しかし、物音には非常に敏感で、驚くと水草等の障害物の中にすぐに逃げ込みます。食性は雑食性で、藻類や底生動物等を食べています。産卵期は4～6月で、増水した後等岸辺の水草に卵を生み付けます。卵は粘着卵です。卵は5～10日で孵化し、その後成長して一生を淡水域ですごします。一年の行動の中では、水温が低下する冬期間はにがとみえて、深みに入って水温が上がりだす春先までじっと（越冬）しています。

漁は、釣りや延縄があります。この他には、刺網、地曳、簀建等で他の魚と一緒に漁獲されます。

味は秋から冬期間がよく、この時期は油がのり臭みがないとして食べられます。調理方法は、甘露煮やすりみ、でんがく等があります。

現在、フナという釣りのイメージが浮かびます。この釣りの対象となっているフナはヘラブナで、食用としてではなく遊漁の目的として親しまれています。また、マブナも釣りの対象として扱われています。

## 1 フナ釣り漁

(河 北 町)

フナ釣り漁は、浮きを用いて行い、釣り漁業である。

竿は、竹製の長さ2～3間ものを使用する。道糸は、細めの生糸を使用する。枝糸は本テグス、太さ1厘～6毛のものを使用する。針は、かえしのある、1分～5厘のものを、魚の大きさにより変えて使用する。浮きは、小型の立ち浮きを使用する。

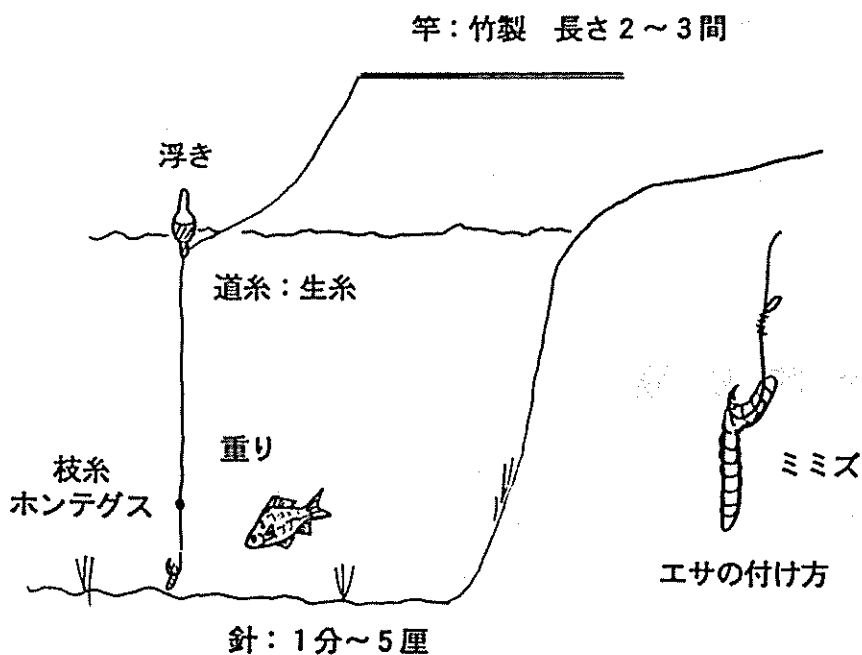
漁期は、周年。漁場は、地先河川や沼等。

フナは、1年の中でも釣れ方には変化がある。フナは、水温が低くなる冬場は深みに入

りほとんど動かなくなる。この時期は越冬期間で餌をほとんどとらなくなるため、あまり釣れない。春先になり水がぬるむと動きだし、このころのフナは巣離れするといわれ、今までの体力を回復するために餌を活発に取り出す。水がぬるんで動き出しても、山から雪解けの冷たい水が流れて来ると、それを避けるために小さい小川に逃げ込んでいく。また水温の上昇とともに小川へとしだいに入り込んでいく。この時のフナをのっこみブナと呼び、浅場に多く集まっているために、一年の中でもよく釣れる時期である。産卵を終えて夏になると、広い範囲に分散しあまり多く釣れなくなる。秋も深まってくると、越冬のために餌を多く取り深場に集まってくる。この時期のフナを落ちブナといい、春先と共によく釣れる。フナは、このように1年の中では、2季よく釣れる時があり、主にこの期間が釣りの盛期となる。

まず、フナの潜んでいそうな場所探しから始まる。時間的には、朝か夕が良く、曇っていれば、日中でもよい。餌はミミズを使用する。場所が決まると仕掛けを水中に落としてやる。フナは、警戒心の強い魚なので、静かに釣ることが必要である。仕掛けが底につくと、その日のタナを探し出し、仕掛けの位置を調節する。仕掛けを投入してしばらくするとあたりがあるが、すぐに合わせると釣り逃がすので、強く引いてから合わせるようにする。この方法を繰り返し、つれない場合は、場所を変えながら移動する。

釣れたフナは家にもち帰り自家用とする。



フナ釣り漁具見取図

## 2 フナ延縄漁

(河北町)

フナ延縄漁は、小ブナを漁獲対象として行う、底延縄漁である。

幹縄は綿糸5～6号を使用し、長さ100尋とする。枝糸は綿糸2号を使用し長さ1尺5寸とする。幹縄には、枝糸を1尋間隔で取り付ける。幹縄の両端には、重り石を取り付ける。浮き縄には蘘縄を使用し、水深により深さを調節して使用する。浮きには、桐材を使用する。針はしんちゅう製で、自分で作ったものを使用する。

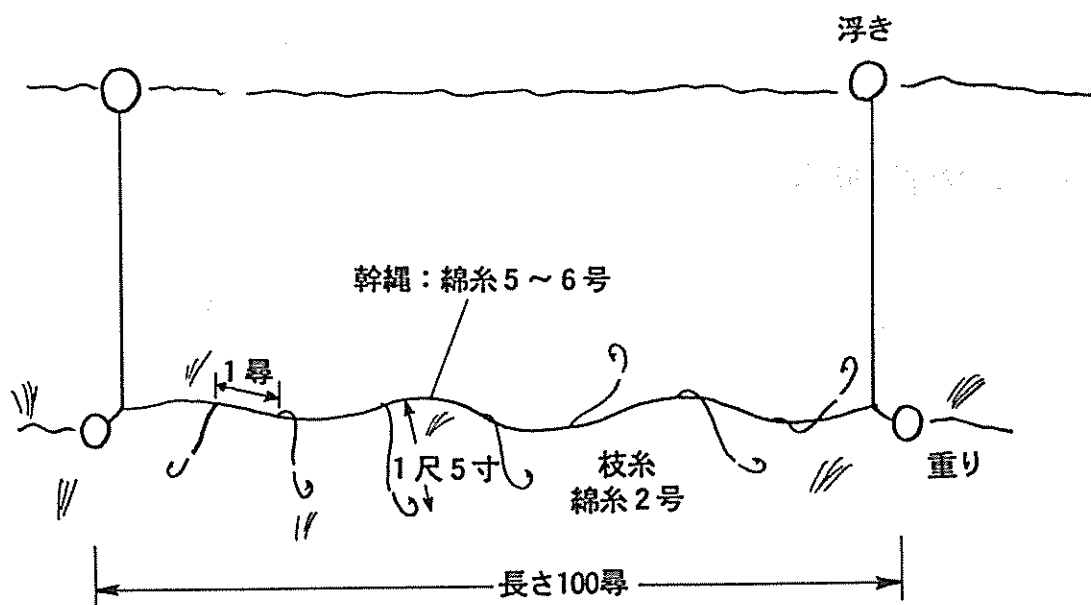
漁期は、秋～春。漁場は、地先沼等。

夕方、2人で木船に乗り込み出漁する。餌は、小エビを使用するが、出漁前に陸上で針に掛けておく。漁場につくと、船を進めながら延縄を投入していく。投入場所は、底の状態、魚の分布量等によって変えていく。投入が終わると、設置した状態で一晚置き、翌朝上げ縄を行う。1回の操業で、5縄の投入を行う。上げ縄は、船を浮きの側まで近付け、浮き縄から上げて行く。魚が掛かっていれば、はずしながら上げるようにする。縄を全部上げ終わると、全部船に回収し陸に戻って夕方の準備をする。

小型のフナは、寒い時期にも漁獲できる。

1回の漁で、2斗ます位の漁獲がある。

漁獲したフナは、涌谷方面から専門の業者が来て購入していく。業者に販売するフナは、小型のフナでほとんどがお正月の甘露煮等に用いられる。



フナ延縄漁具見取り図

## VII イワナ

イワナは山間の渓流域に生息する魚です。水が冷たくて澄んでいる場所を好みます。このため河川の中でももっとも上流部に分布しています。溪流の中でも流れが強い場所よりは流れの緩い所を好み、樹木や岩蔭の下等に隠れて、流れてくる餌を待ち受けて捕食します。待つて捕食するのは、警戒心が強いわりには、動きが遅い面があり自分から餌を探すというよりは、待ち伏せて流れてくるものを捕まえたほうが、自分にあっているためです。餌は水性昆虫、ミミズ、小魚ですが、水面に落ちてくるクモやチョウ等も食べます。また、貪欲な面がありヘビ等も食べると言われます。産卵は秋におこなわれます。産卵場所は、溪流の中でも支流等の狭い所で、流れの緩やかな起伏のある浅瀬を好みます。卵は沈静卵で、底が砂礫の所に産み落とされます。産み落とされた卵は、冬に孵化しますが仔魚はそのまま川底にとどまり、水がぬるみ始めると動きだします。その後成長し、秋に産卵、冬になり水温が下がり始めるとじっと（越冬）して春が来るのを待ち続けます。また、こんな話もあります。イワナは、大雨が降り川が増水して流れが早くなると、ながされないように石を飲んで体重くするそうです。これも魚の知恵の一つです。

イワナ漁は、水温が上がる春先から水温の低下する、秋まで行われます。漁は、釣り、置き針、ヤス等があります。漁獲されたものは、山間部で生活をする人達にとっては、重要な食料であり、収入源でした。しかし、現在は釣りを主体とした遊魚が多くなり、漁業としての影は薄れてきています。また、資源量も減って来ています。

### 1 イワナ釣り漁

(蔵王町)

イワナ釣りには、餌を使ったものと、虫に似せた毛針（疑似針）をつかったものがある。昔は、毛針を使った釣り方が主流となっていた。

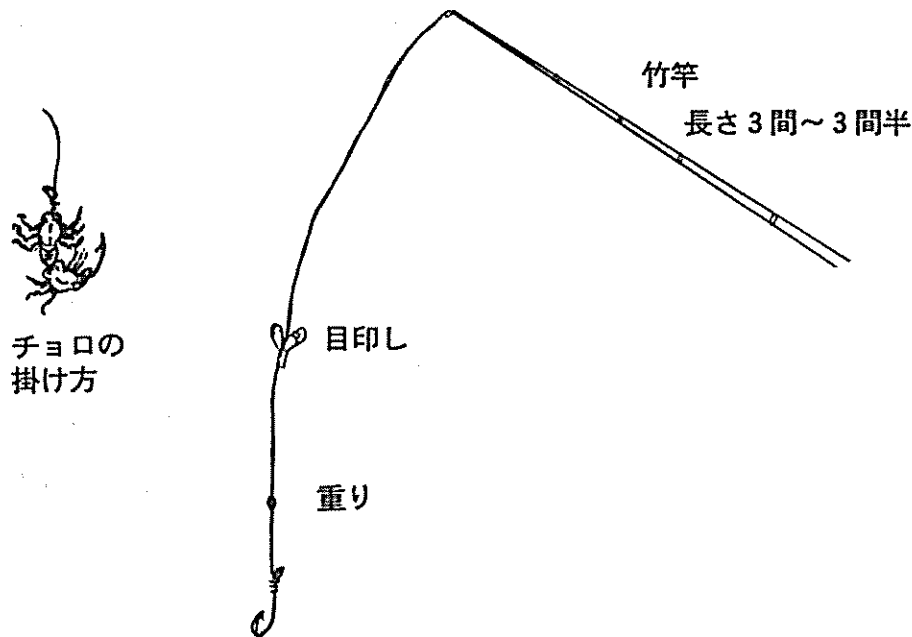
釣り竿は、竿の部分と柄の部分からなる。竿の材料にはしの竹を使用し、長さ3間～3間半とする。竹は胴の堅い先調子のものが良い。この竹は風当たりの強い西斜面にあり、新竹の中から選ぶようにする。竹を取る時期は11月で、この頃の竹は身が入って丈夫になっている。切ってきた竹は、乾燥させ、節を削り、火を使って真っ直ぐにしていける。柄には、4尺位の桐を使用する。釣り竿は、自分で作る。竿は、1年使うと新しいものと取り替えるようにする。糸は馬のしっぽの毛をよったものを使用する。この他の道具としては、餌釣り用の虫入れ、魚籠（ビク）も使用する。

漁期は、春～秋。漁場は地先河川。

漁は、1人で行う。釣りをを行う前には、準備として餌取りから始められる。たいがいその川に多い虫が適しているが、餌として用いるのはチョロ（カゲロウの幼虫）が多い。この、チョロを前もって川で捕まえ、虫入れに活かしておき漁にむかう。

イワナは、非常に警戒心が強い魚なので、釣りをを行う場合には人影や、もの音をたてないことが重要である。まず、静かに狙い場所に近付く。次に餌を掛けた仕掛けを川に静かにおろしていく。水が岩等にぶつかって波立っているところでは、魚がいるとすぐにとびついてくるが、流れの穏やかなところでは餌が沈んでから食いついて来る。食いつきは、始め浅くくわえ、次に深く飲み込むことが多いが、できるだけばらさないように深く飲み込んだ時にあわせることが大切である。また、釣り逃してとしてもしばらくすると同じ場所に戻り、釣れる魚なのでじっと待つことも必要である。食いつきの悪い時には、上流から魚の鼻先に餌がくるように流し、これを何度か繰り返す、それでもだめな時は場所を変えるようにする。

1日の漁では、数十匹単位のイワナが釣れたが、現在は魚の数も減り、昔のような漁獲は望めない。また、釣り逃がした魚は、しばらくすると釣れたものだが、今は釣り人が多くなり川が荒らされているため、一度逃げられた魚はなかなかつれなくなっている。



イワナ釣り漁具見取り図

## 2 イワナ毛針釣り漁

(蔵王町)

毛針釣りは、虫に似せた疑似針（毛針と呼ぶ）を使ってイワナを釣り上げる、釣り漁法である。

竿は、餌釣りと同じである。この漁で重要なのは、毛針と呼ばれる疑似針である。作り方は、まず羽の芯の表面の皮をむく。次に、羽の部分を針に巻き付け、羽をむしった時についてくる皮の部分を疑似毛とする。羽は、胴としてまかれ、これを三重に巻き付けて疑似針とする。巻き付け用の糸は、絹糸を使用する。疑似針作製作業は、自分で行うが、機械を使わずに、手、足、口で作って行く。見た目は、現在市販されている疑似針よりも悪いものの、地元の漁師が工夫しあみだした疑似針であり、疑似針としては最高のものである。

この針の特徴は、羽を使った疑似針に比べ水を含みにくく、耐久性があることと、漁師と魚にとって水中での光り具合がちょうどよく、魚にとって餌としての確認がしやすい点である。

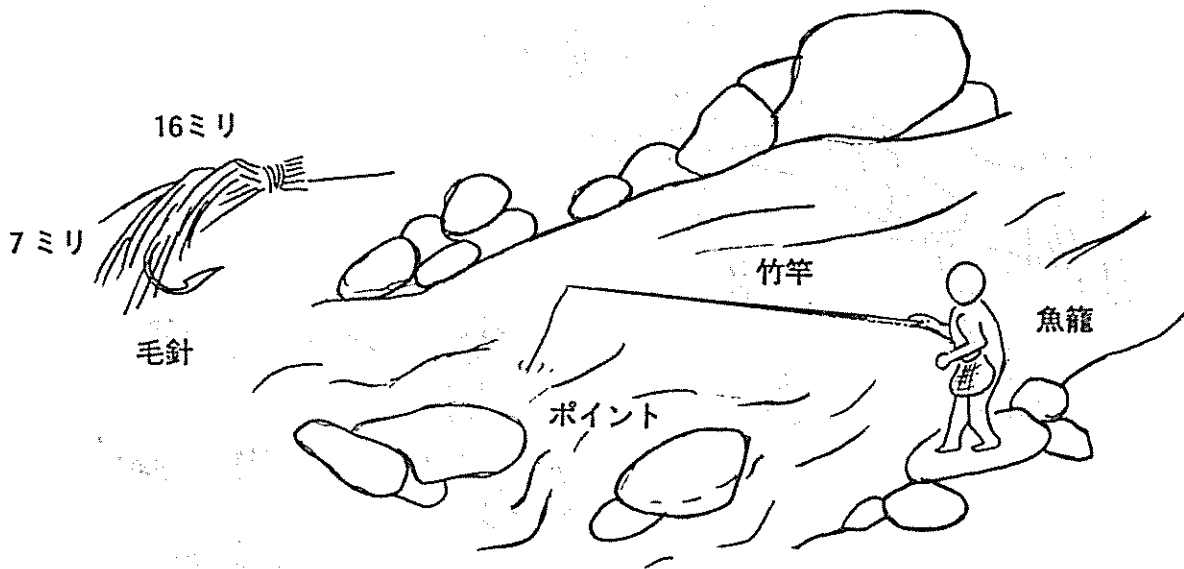
漁期は、夏～秋。漁場は地先河川（溪流）。

漁では、川にはいるとまず川虫の確認をおこなう。これは、その川に生息するイワナの餌を知るためである。次に、川虫にあった疑似針を選び出し、漁を始める。釣りでは、この他に水のすみ具合等を判断して漁をおこなう。イワナは、夏場になると水面に落ちて来る、蛾や蜘蛛等も食べるようになる。この頃から、疑似針漁は、最盛期をむかえる。まず、狙い場が決まると、静かに近付き漁を始める。仕掛けは、狙った場所の向こう側におとし、その後竿を操りに魚の目の前を横切るように引いて来る。するとイワナは目の前に餌が近付いたと思い食いついて来る。この時、合わせて釣り上げる。イワナは、食いついた後、疑似針だとわかると吐き出してしまうため、確実に合わせる必要がある。

疑似針釣りは、餌に似せて疑似針を作るだけでなく、釣りをを行う場合はその餌の動きをまね、できるだけ本物の餌に近付けるかどうか釣りを左右する大きな点である。

現在はイワナ釣りも遊魚の対象となり、餌釣りや疑似針釣りが盛んに行われるようになっている。このため、昔のような漁獲を望めなくなっている。しかし、内水面では種苗放流等を行い、資源が枯渇しないような方法もとっている。





イワナ毛針釣り操業図

### 3 置き針漁

(蔵王町)

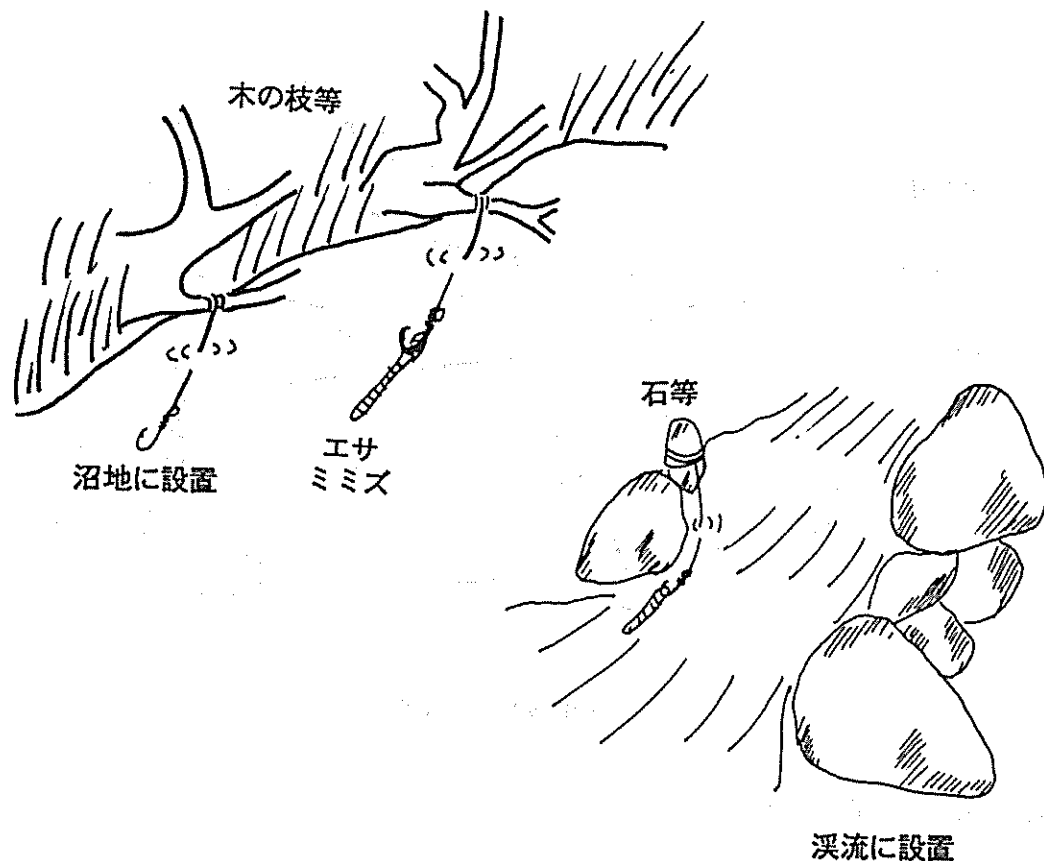
置き針漁は、餌を付けた針を川沿いに仕掛けイワナを漁獲する、固定式の釣り漁法である。この漁は、溪流に生息する魚の中ではイワナのみ用いられる。

仕掛けは簡単なもので、道糸に針を取付け、これに餌を取り付けただけのものである。漁期は、春～秋。漁場は、地先河川。

漁は、1人で行われる。まず、餌を確保する。餌は、ミミズ等を用意する。まず、漁場となる川を歩き、針に餌を掛けながら川に設置していく。仕掛けは、木の枝や岩等に取り付ける。針は、1カ所に1本ずつ仕掛けるようにする。このやり方で、だいたい1人で、100本前後設置していく。100本の針を掛け終わると始めの針に戻り取り上げを開始する。始めの場所に戻る頃には魚がかかっているため、この時は陸に引き上げ漁獲する。秋の産卵期等は、溪流でも支流に入ったり、浅い沼地等にも入り込み、こんな場所でもと思われる所でも漁獲できる。

この漁のコツは、仕掛け（餌）の掛け方にある。イワナは、流れて来る餌を狙うため、餌が底について動かない状態では食いつきが悪く、このため流れに沿って餌が常に動く状態に設置することが必要である。

漁は、昭和の始めまでは100本の針で80尾前後の漁獲があり、販売を目的に行われていた。魚が少なくなるにつれ、この漁は行われなくなった。



置き針漁具見取り図

#### 4 イワナ突き漁

(蔵王町)

イワナ突き漁は、夜間に行われる、刺突漁業である。

漁ではヤスと、ランプを使用する。ヤスは、歯に鉄製の四つ手等を使用する。柄には、堅木を使用する。火は、始め松等を籠に入れて火をつけたものを使用していたが、その後カーバイドランプを使用するようになった。

漁期は、夏場。漁場は地先河川（溪流）。

イワナ突きは、夜間行われる。夏場、川の水が濁水してくると、イワナは警戒心が強くなり物陰に隠れることが多くなる。この時期、日中はあまり動かなくなるため釣り漁は難しくなる。このためヤス漁に切り替わる。イワナは、夜になると流れの緩やかな浅瀬で休んでいるのでここを狙って漁は行われる。夜間行うため、火を灯しながら漁を行う。まず、水面を照らしながら静かにイワナを探していく。次に、イワナが見付かると、素早く突いて漁獲する。

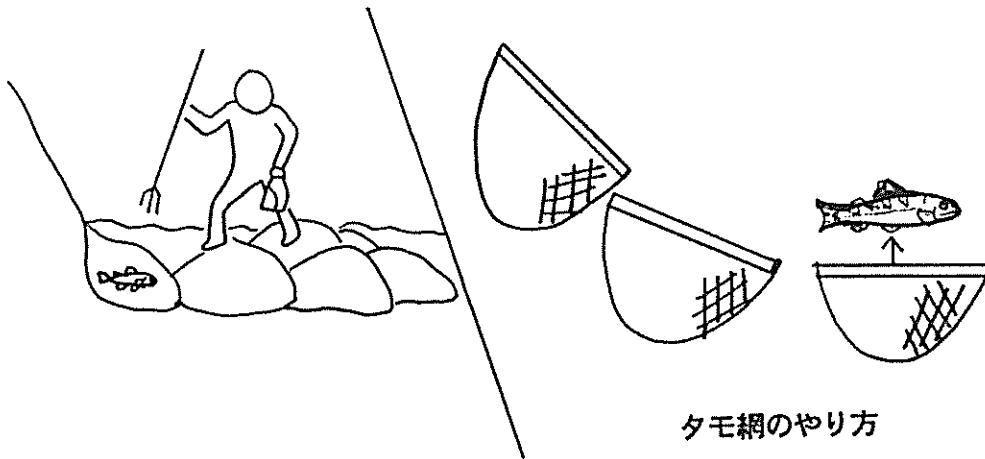
この作業を繰り返し、漁を行う。

この漁ではヤスを使うため、イワナを傷付けることが多く、商品価値が下がる。このため商品価値を付ける目的からイワナを傷つけず漁獲できるタモ網漁を行っていた人もいた。

タモ漁は、ヤス漁より難しく限られた人だけが行っていた。網は、丸いタモ網を使用する。夜間の漁である。火を灯しながらイワナを探す。イワナが見付かると、タモ網ですくうがこの時にはコツがいる。イワナは体に網が当たると逃げ出してしまうため絶対に触れないこと。次にイワナの下に網を静かに入れること。そうすると、イワナは網の上に浮き上がるのでここをすかさずすくいあげる。この2点である。

網ですくったイワナは、傷がなく商品価値が高かった。

漁獲したイワナは、自家用としたり販売用とした。



タモ網のやり方

イワナ突き漁操業図

## VIII カ ジ カ

宮城県に生息するカジカは、河川の上流にいて大型の卵を産み一生を河川で過ごすもの（河川陸封型）と、河川の中下流にいて小型の卵を産み河川と海を生活場所に持つ（両側回遊型）ものの2種類です。体長は、15センチ前後で、あまり大きくなりませんが、色が黒っぽく口が大きくて、どことなくあいきょうのある魚です。食性は、肉食性で水性昆虫等を主に食べています。生息場所は、水のきれいな大きめの石の多くあるような所で、流れが比較的強い場所を好みます。産卵は、春に行われ、大きな石の下にある隙間に卵を産みつけます。雄は、産卵場所を確保して雌を誘います。また、産卵形態は1夫多妻のようです。卵が産み落とされると雄は、孵化するまでこの卵を守ります。孵化した仔魚は形態が違い、小型のものは小さい卵黄を持ち生まれると浮上し川の流れに流されて海に下ります。大型のものは、大きな卵黄を持ち形態的にも小型のものより進んだ状態で生まれ、その後生まれた付近にとどまって底性生活を送りながら成長します。成熟年齢は、2～3年です。

昔から、県内のどの河川でも多く生息し、子供達が川遊びの時に捕まえたり、味が良いことからゴリ押し等の漁業も行われてきました。しかし、今は資源量も少なくなり、希少価値の高い魚として扱われています。金沢で有名なゴリ料理もカジカを使ったもので、首都圏の料亭等では高級魚として扱われています。現在は、宮城県においても内水面漁業の振興を目的に、カジカの種苗生産技術の開発が内水面試験場で行われています。

### 1 ゴリ押し漁

(中新田町)

ゴリ押し漁とは、河川の川底に潜むカジカを、石をどける等して追い出し網を使って漁獲する、追い込み網漁法である。

ゴリとは、方言でカジカのことである。

ゴリ押しには、カジカをすくいあげる網と石を押し板材を使用する。網の材質は麻糸を用いる。三日月型か四手型とする。枠は、竹製で網口が底について、平になるような型とする。また、枠には、漁をした時に支えがきくように柄を付けたり、高さを



ゴリ押し操業風景  
(内水面試験場調査風景)

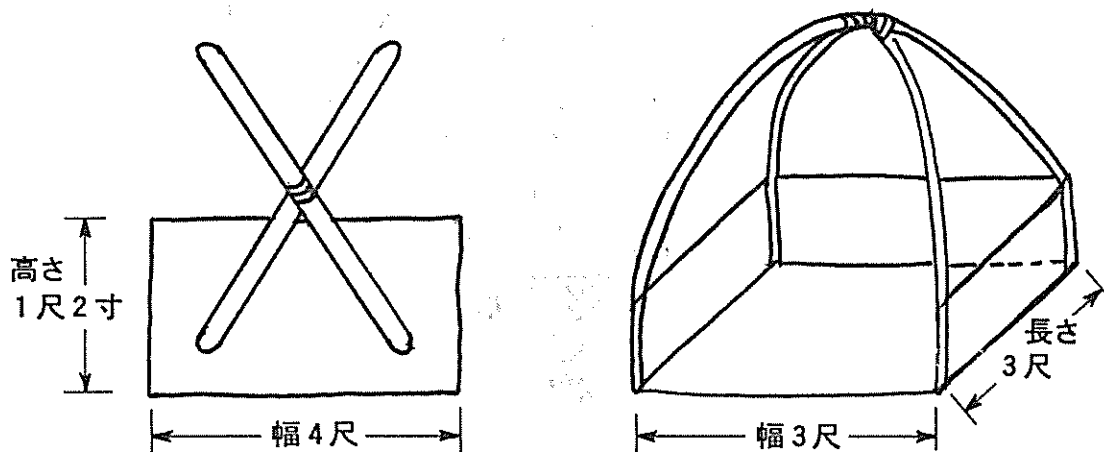
もたせたりする。板材は、幅4尺、高さ1尺2寸の板に、堅木の棒を交差するように取り付けたものを使用する。

漁期は、周年。漁場は、地先河川。

漁は、2人1組で行われる。まず、川に着くとカジカの潜んでいそうな、適当な浮石のある場所を選び出す。場所が決まると、1人は網を川底に設置し、1人は板木を使ってカジカを網に追い込むように石を動かしていく。板を使って石を動かすと、石の下に潜んでいたカジカは驚き逃げ出す。この時網にはいるので、網をひきあげ漁獲する。この作業を繰り返し漁を行う。

カジカ漁には、この他に川の支流を堰止めて水が流れない状態を作り、石をひっくりかえしながらカジカをつかまえる方法等もある。

また、川の水が濁った時には、カジカが岸によるので、ここをねらってタモ網ですくってつかまえる方法もある。



ゴリ押し漁具見取り図

## 2 チェーン押し漁

(仙台市)

チェーン押し漁は、川の中にいる魚をチェーンを使って脅かし、網に誘い込んで漁獲する、追い込み式のすくい網漁である。

漁では、網とチェーンを使用する。網は、ガクダレ漁に使用するものと同じである。チェーンは鉄製で、川の広さや魚の状況に応じて長さを変えて使用する。

漁期は、春先。漁場は地先河川。

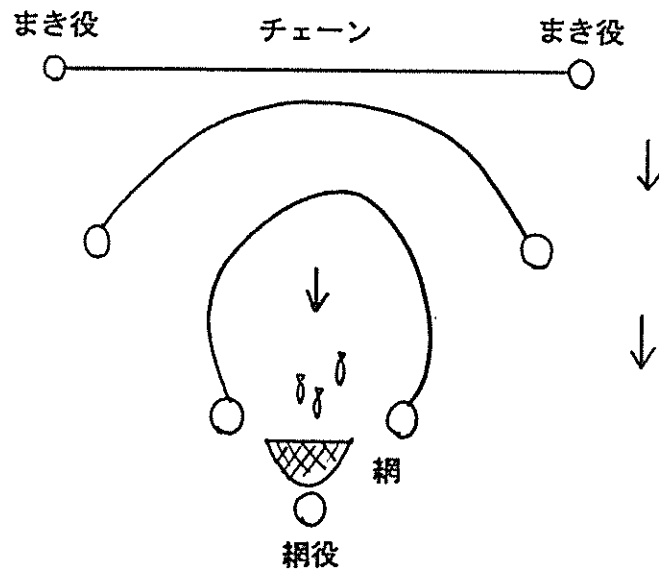
この漁は、春先に川を上ってくるヨシノボリ（方言カジカ）の、小型のものを対象として行われる。ヨシノボリが川を上る時は岸沿いを上り、かなのり群が遡上してくる。

漁は、3人1組で行われる。川に入りヨシノボリを見付けると、1人が網を下流で構え、2人が上流から横に広がりチェーンを使って、魚を脅かしながら網に追い込んで行く。チェーンは始め広くして、次第に円をえがくように網に向かってせばめていく。魚が追われて網に入ったところを、網係の1名が確認し、網をあげて漁獲する。

1回の操業で、だいたい100尾前後の漁獲がある。操業は、1日に20回前後行う。

春先に川を上って来るヨシノボリは、メダカなみの大きさであり、食用にする時はテンブラにして食べる。

（ヨシノボリはカジカと別の魚であるが、ここに記述した。）



ガクダレ漁操業図

### 3 ガクダレ漁

（仙 台 市）

ガクダレ漁とは、川底の石を棒等で動かし、驚いて出てきたカジカを網ですくいあげ漁獲する、追い込み式のすくい網漁法である。

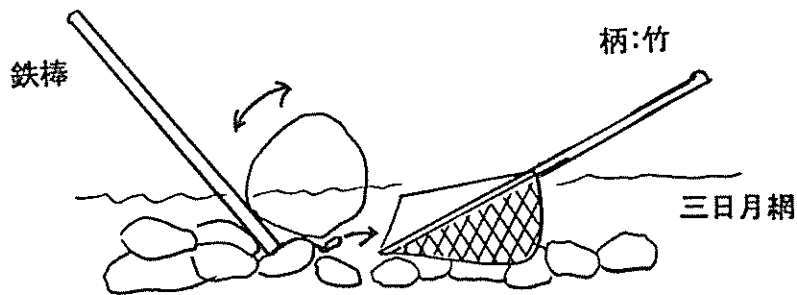
漁具は、すくだ網と呼ばれるものと、鉄の棒を使用する。網は、何種類かあるがたいがいは三日月型の竹の枠が付いたもので、ゴリ押しで使用するものとほぼ同じである。棒は、鉄製のものを使用する。

漁期は、周年。漁場は、地先河川。

2人1組で漁を行う、まず川に入り、カジカのいそうな石を見つける。次に、1人が網をこれから動かす川底の石の側に設置する。もう1人は、鉄の棒を石の下に差し込み、石を何度も動かす。石を動かされたカジカは驚いて石から飛び出し、設置しておいた網に入る。この時網をあげて漁獲を行う。この作業を繰り返す。

カジカがいるかどうかは、川底の石をみて判断する。石を観察し、石と川底の隙間の砂利が白くなっている場合はカジカが中にある。また、カジカは石を動かしても、一定方向から逃げ出すのではなく、自分が石の間に入り込んだ所から逃げ出すので、その石にいるものが全部漁獲できるわけではない。春先には、石に卵を生み付けている。

1日の操業で、15センチ前後のものが、多いときで400尾前後漁獲できる。



ガクダレ漁具見取図

# IX シラウオ

シラウオは、体が透明で美しい魚です。よく、細く美しい麗人の指などに例えられるくらい、清楚で美しいというイメージがある魚です。

また、清楚で弱いイメージのあるシラウオの寿命は1年で、姿形とはかない命からか、昔から俳句や詩等の題材としても用いられて来ました。

生態は次のとおりです。シラウオの産卵は、春になると行われます。それまで海で生活していたシラウオも、春になり水がぬるむと川を上り始めます。川に入ったシラウオは、底質が砂の場所を選んで産卵を行います。産み出された卵は粘着卵であり、砂粒等の付着基質にくっついて孵化を待ちます。だいたい、水温が10～15℃で10～20日前後で孵化します。その後海に下り、翌年産卵の時期をむかえるまで、プランクトン等を食べながら成長します。

漁は、産卵のために川に入り込む時期をねらったもので、シラウオ網や、夜トボシ等があります。

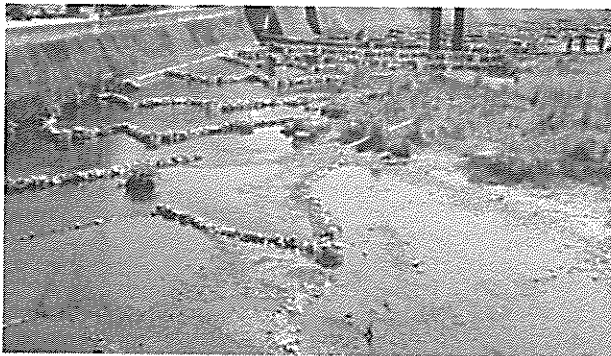
この魚は味も淡泊で、生食や汁もの卵とじ等で食べられます。しかし、現在は漁獲量も少なく、値段的には高級魚として扱われています。

## 1 シラウオ網漁

(歌津町)

シラウオ網漁は、河川に網を敷設しこれに入り込んだシラウオを漁獲する、定置式の網漁法である。

網は折網を使用し、長方形の型とする。網の大きさは、長さが6尺、幅2尺、高さ5～6寸とする。網のほかには、堰を設置する。堰は、網を使用する場合と石を積んで行う場



シラウオ網設置風景

合の2種類がある。

漁期は4～6月。漁場は地先小河川。

漁期が近づくと、川に網の設置を行っていく。まず、川の適当な場所を選んで堰を作っていく。堰は、石を用いて川の岸沿いにハの字型に積み上げていく。漁は何か所でも行うので、この方式で川の各所に堰を設置していく。川の中央部分



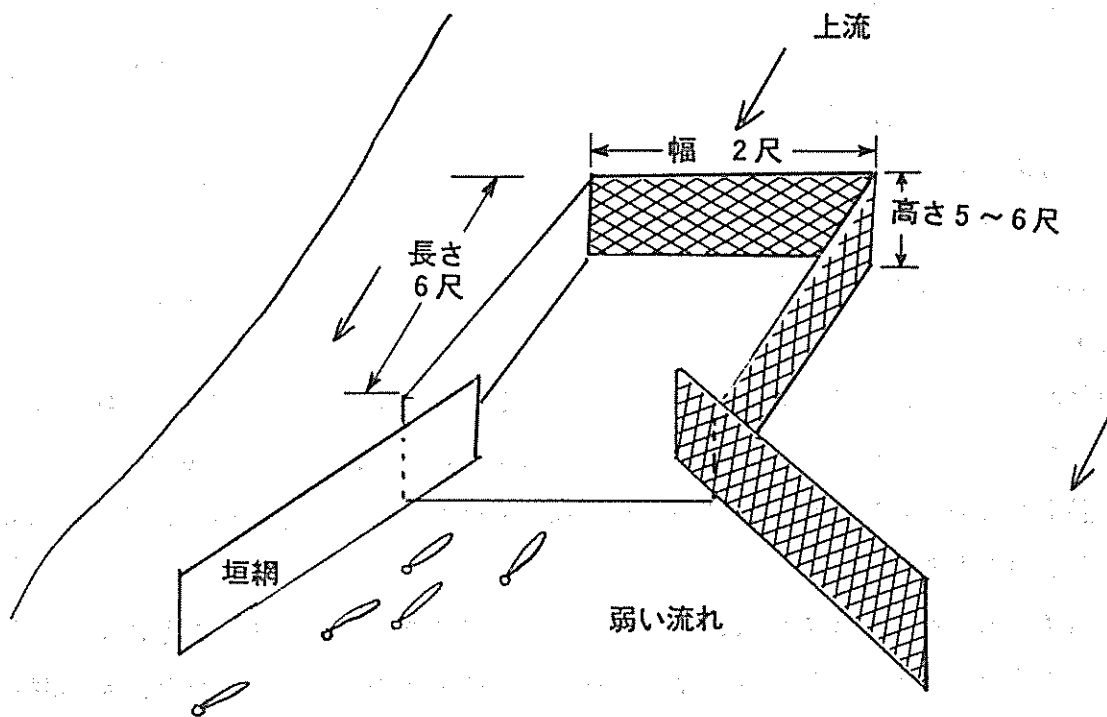
は、流れを強めるために堰を設けないようにしておく。堰の終端部には網を設置する。網は取り外しのきくようにしておく。

時期が来て、シラウオが川を上り始めると漁が開始される。川に上り始めたシラウオは、上流に進もうとして川を上る。川の中でも流れの緩やかな、岸沿いの所を上ろうとするので、前持って仕掛けておいた堰にぶつかる。

堰にあたると、堰沿いに前に進み網の中に入り込む。漁獲は、定期的に設置していた網を見回り、魚が入っていれば網ごと取り上げ回収するという方法をとる。

この漁で大切なことは、シラウオが流れの緩やかな場所をとおるということである。このため、川の中央部を開けて流れを速め、逆に漁獲する場所には網を設置することで流れを緩めて、シラウオが入りやすいようにしている。

現在は、網の代わりにプラスチック製の籠等を利用して、漁獲方法が簡易なものとなっている。



シラウオ網漁具見取図

# X 雑 漁

## 1 手づかみ漁とツッカゴ漁

(河 南 町)

手づかみ漁は、もともと原始的な漁法であり、川や沼に入り手づかみで魚を捕まえるという単純な方法である。

漁具は使用しない。

漁期は、周年。漁場は地先河川や沼。

漁を川や沼で行う場合は、葦の間等に隠れているコイやフナに静かに近付き、素早く素手で押えたり、状況によりゆっくりと包むように漁獲する。漁獲時期と時間帯は、水温が下がった時や日が昇る前の暗い時期である。この頃が捕まえやすい。また、湯水して水が少なくなっている時も捕まえやすい。小さい川では、湯水の時期があり、川に水が少なくなり枯れたりすると、アユ等は大きい石の下等に留まっているごくわずかな水たまりの中に潜んでいる。この状態の時、石の下に手を入れてやり、手でつかんで漁獲する。河川で行われるもう一つの方法としては、川に石を積み上げ堰を作り、この中に入り込んだ魚を漁獲するという方法もある。

手づかみ漁より漁獲効率を高めた漁法として、道具を用いたツッカゴ漁がある。

ツッカゴとは、竹等を用いて円柱型の筒を作り、筒の上下をあけた状態とした、籠状の道具である。籠の高さは、1尺5寸～2尺5寸、口の広さは上部で1尺5寸、下部で2尺5寸とする。

この籠が出来ると、今まで素手で捕まえようとしていたものが、効率良く漁獲できるようになった。使用方法は単純で水中に入り片手に籠を持って、沼や川の浅瀬の藻の茂った所や水溜まりにいる魚に近付き籠をかぶせ、逃げられないようにしてから素手でつかみ取るというものである。

この漁は、出来るだけ多くの人数で行うことがコツである。そうすることにより、魚が逃げ惑って藻の中に入り込み、動かなくなるので、捕まえやすくなる。また、水が濁ることにより魚の視界が失われ、籠の中に入りやすくなる。

漁獲対象は、河川沼等にいるあらゆる魚種である。

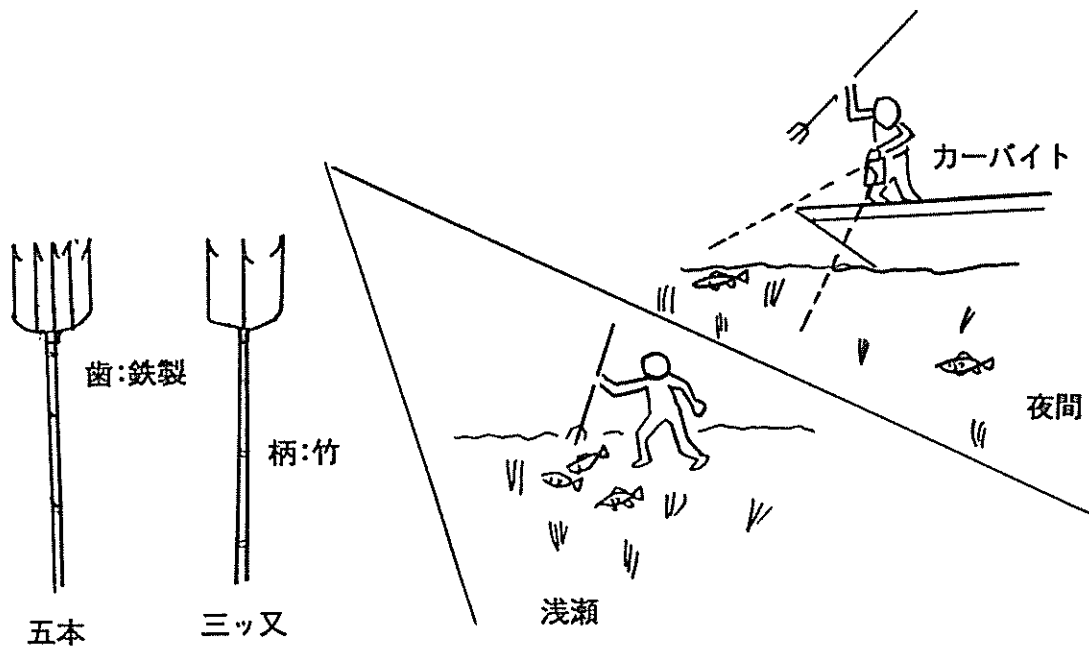
現在は、効率の良い網漁具などの開発により、ツッカゴ漁はほとんど行われなくなっている。



ツッカゴ漁操業図

## 2 ヤス 漁

(河北町)



ヤス漁具見取図および操業図

ヤス漁は、河川や沼等にいる魚に鉄製のヤスを突刺し漁獲する、刺突漁業である。

ヤスは鉄製で、3つ又や4つ手のものを使用する。歯の長さは2寸～1尺、柄の長さは、5～8尺とする。魚種、漁場により歯の形、大きさを変えて使用する。

漁期は周年。漁場は地先河川や沼等。

漁は、漁場や魚種によって違って来る。河川の中下流や沼で行う場合は、コイやフナ等

が漁獲対象物となる。コイやフナ、ナマズは産卵期になると浅瀬の藻場によってくる。この時は、産卵のため1か所に集まって来るので、ここを狙って漁を行う。産卵時期は、警戒感も薄れることと、浅場ということで突きやすくなっている。そのため、1度（1本のヤスで）に数匹の漁獲もできるときとがある。また、産卵期以外では夜に火（カーバイトランプ）を灯して水面を照らし、じっとしている魚を突くやり方も行われる。

ヤス漁には、この他にもサケ、マス、ウグイ等様々な対象種を狙ったものがあるが、各魚種の生態や漁場に合わせた漁獲方法が工夫され行われている。

### 3 ドクモミ漁

（仙 台 市）

ドクモミとは、植物に含まれている刺激物を川に流すことで、魚を麻痺させ漁獲する、独特の漁法である。

ドクモミを作るには次の方法で行う。まず、山に入りサンショの木を見付け、皮をはいでドクモミの材料とする。サンショの皮を持ち帰ると、木炭と一緒に鍋で煮る。こうすることで成分が抽出できる。成分が取れても、こぼれたりして漁場まで運ぶには大変なため、抽出した液状のものをさらに炭の灰にまぶして固形とする。この固まったものを、俵に入れてドクモミの材料は出来上がる。俵に入れると、漁場までの運搬が非常に楽である。ドクモミの成分は、サンショール等サンショに含まれている刺激性のある成分である。

漁期は、周年。漁場は、河川上流部。

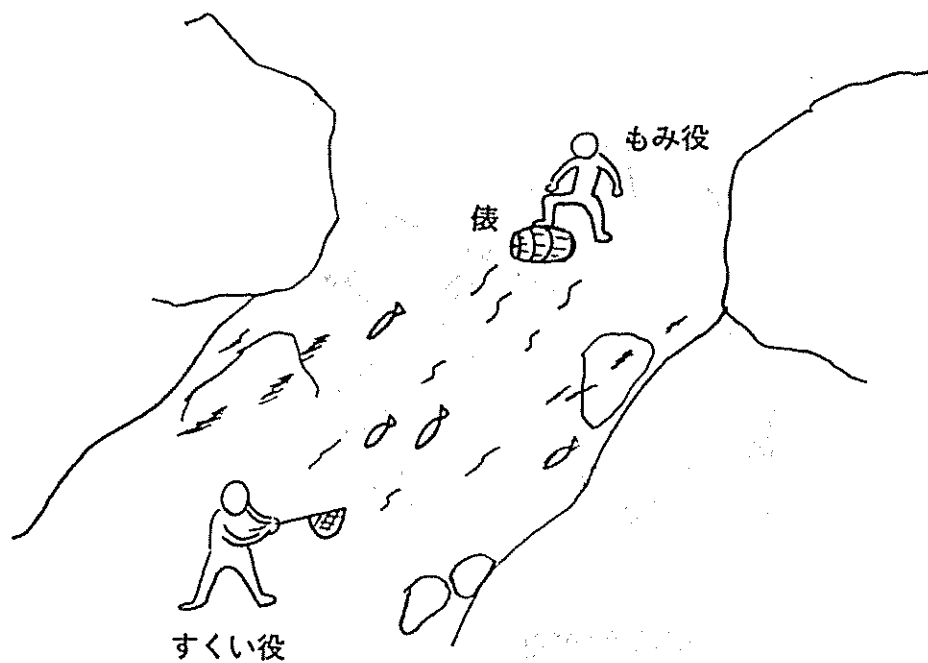
漁師はドクモミができると、漁場に向かう。漁場は、人家がない河川の上流部である。まず、漁場に着くと俵を川の中に入れ、足を使って何度もふむようにする。こうすると、灰についていた、サンショの成分が水に溶け出し川の中に流れ出す。川に流れ出した成分は、付近にいる魚にとどく。魚は、この成分により刺激を受けて、川の上に浮いてくる。この時、網を使ってすくいあげる。

漁獲対象は、イワナ、ヤマメである。

この漁を行うと、付近にいる魚はほとんど漁獲できる。また刺激物を流しても、魚は死ぬわけではなく麻痺するだけなので、きれいな水の中にしばらく入れておけばもとに戻る。このため、人が食べても害にはならない。

ドクモミの名前は、ドク（毒）はサンショの成分のことであり、モミ（ふむ）は俵をふんで行う漁法であるためにいわれる。

この漁法は、古くから全国各地で行われていたが、付近にいる魚が根こそぎ捕れることなどから禁止漁業として扱われ、現在は行われていない。



ドクモミ漁

#### 4 引籠（ヒコ）漁

(河 南 町)

引籠漁は、竹竿の先に籠をつけて川底を引き回し、この籠に入った魚を漁獲する籠漁法である。

引籠は籠の部分と、柄の部分からなる。籠の材料には竹を使用し、半円形の形とする。大きさは、長さ2尺、口の底の部分が1尺2寸～1尺3寸、高さが7～8寸とする。柄は竹を使用し、長さ2～3間のを籠に取り付ける。柄は、籠の3分2程度の部分に取り付ける。引籠は、漁の始まる前に用意しておく。

漁期は、12～4月。漁場は、地先小河川、沼、掘等。

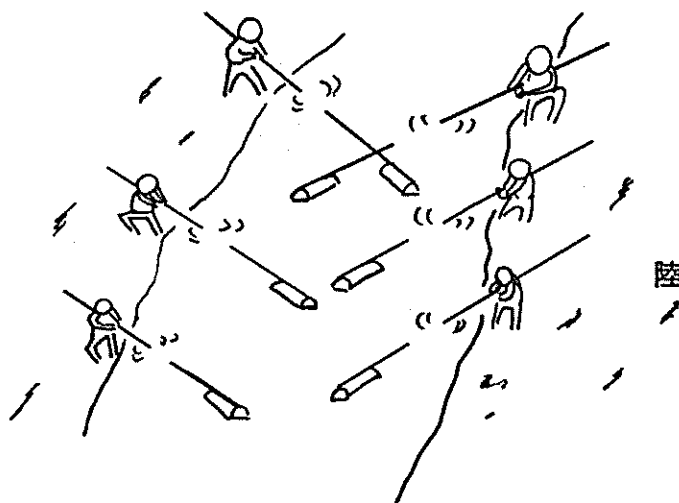
漁は、河川に氷が張り始める頃から春先まで行われる。この時期は、越冬のために、魚は深みに入ってほとんど動かなくなる。この習性を利用して行われるのが引籠漁である。

この漁は、10人単位で行われる。まず、漁場に着くと各自が、自分の位置を決め準備をする。次に、始まりの合図により、全員が引籠を水中に投入し、底を引き回す。魚は、底をかき回されたことに驚き逃げようとして、引籠に入る。魚が籠に入ったところで、水中から籠を引き上げ漁獲する。この作業を繰り返す。

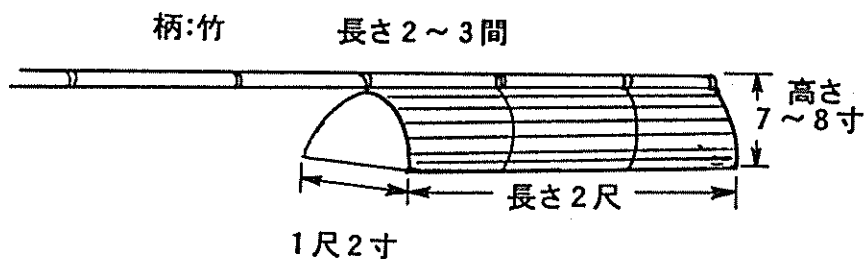
この漁のコツは、魚が多く潜んでいる場所を選定することと、出来るだけ多くの人が底をかき回し魚を驚かせることである。

漁獲されるものは、コイ、フナ等である。

現在この漁は行われていない。



引籠漁操業図



引籠漁具見取図

## 5 浮筒（バフリ）漁

(河 南 町)

浮筒漁は、竹製の籠を水中に設置し、これに入った魚を漁獲する、籠漁法である。

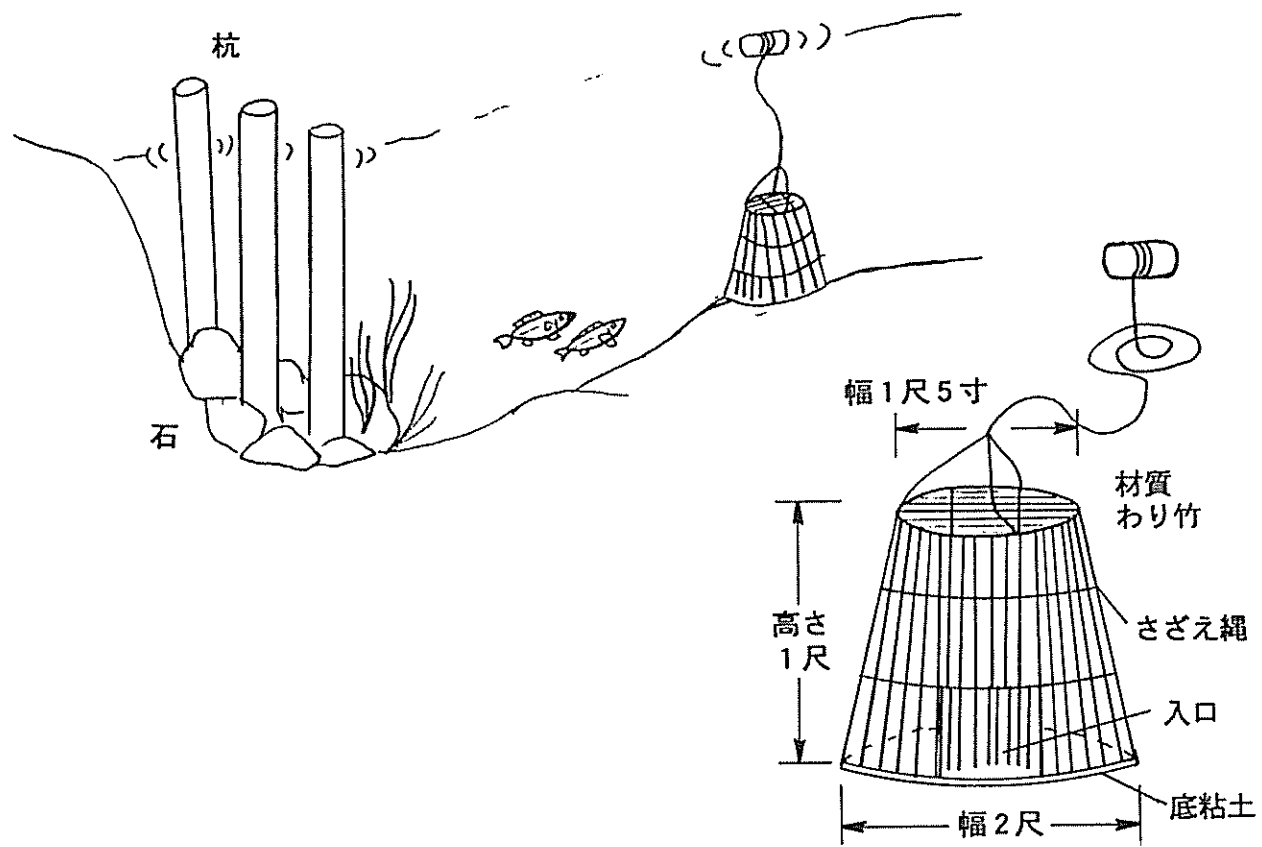
籠の型は、円筒型とする。籠はわりだけを使用し、上部の直径1尺5寸、底部の直径2尺、高さ1尺~1尺3寸とする。籠には、枠をささえるための縄を2カ所に取り付ける。籠の前部には、魚が入るための入口を1カ所開けておく。大きさは、幅が6寸、高さが4寸とする。入口には竹を使って、一度入った魚が逃げ出せないように、クシの歯状のかえしを取付ける。底の部分には、粘土を塗って重りとする。浮網は籠の上部に三か所取り付け、これの一つとして浮きに結ぶ。浮きは桐材を使用する。

漁期は、5~12月。漁場は地先河川、沼等。

漁に使う餌は、魚種によって違って来る。まず、雑食性のコイやフナの場合は、底にひいた泥の上に酒粕や、糠を練ったものをすりこみ餌とし、肉食性のナマズ等には魚等を入れて餌とする。

木船に、籠を積み込み夕方漁場に向かう。漁場に着くと、魚の潜んでいそうな藻や杭等のある場所を選びだす。次にその場所より籠を少し上流の方に仕掛けていく。籠は、場所を選んで一個ずつ設置し、翌朝あげ籠を行う。設置した籠からは、底に塗っておいた餌がしだいにとけだし下流に流れて行く。餌の臭いを嗅ぎ付けた魚は、臭いに誘われて物陰からでて籠に入り込む。一度入った魚は、入り口に返しがあるので逃げ出すことは出来ない仕掛となっている。翌朝は、日の昇る前に漁場に向かい、浮きを目印に籠をあげていく。籠に魚が入っている場合は、船上に取り出し漁獲する。籠は、回収後すべて持ち帰り、掃除したり、餌を入れたりして、夕方の漁にそなえる。

現在は、漁を行う人は少なくなっている。また、籠を自分で作る人はほとんどなく、市販されている籠を購入し、使っている。



浮筒漁具見取図

## 6 投 網 漁

(仙 台 市)

投網漁は河川や沼に生息している魚に向かい網を投げ入れて漁獲する、投げ網漁法である。

網は、漁獲対象となる魚の種類、大きさ、場所等により違って来る。網の材質は絹糸を使用し、目合い5分～4寸、網丈6～18尺とする。網の下部には、鉛製の沈子を取り付ける。網の作りは、上部を細く編んでいき、下部にしたがうにして円錐型に広く編んでいく。網の上部には、4本編の手綱を20尺位取付ける。網は、材料を買ってきて自分で作る。だいたい、3日位で出来る。

漁期は、周年。漁場は地先河川や沼等。

漁は、1人で行う場合と数人で行う場合がある。まず、漁獲する魚種、場所に合わせて網を用意し、船または陸、川中に入り漁を行う。目的の場所に着くと、手に網を持って魚群を探す。魚群が見付かると網を素早く川中に投げ入れ、魚群におおい被せる。次に手綱を使って、網をせばめながら静かに引き寄せ、魚がかかっているれば、取り外して漁獲する。この作業を繰り返し漁を行う。

投げ網方法は、魚の遠近、深浅等周囲の状況に合わせて、釣鐘型、傘型、三角型等様々なやり方があるが、いずれも熟練を要する技術が必要となる。

投網漁については、時期や魚種等によりその方法が異なるため、ここでいくつかを取り出し記述する。

魚期と魚種は、春にウグイ、夏にアユ、秋にサケ、冬はコイとなる。

ウグイは、春(4～6月)になると産卵のために、河川の底が浮石のあるような礫質の、浅瀬に集まってくる。この時期のウグイは、体が黒っぽくなり、雄には腹の下側に赤系の横しまが入る。これは、婚姻色であり、この色合いから宮城ではこの時期のウグイをアカハラと呼ぶ所もある。婚姻色をていしたウグイは、集団で産卵場に集まって来る。この時を狙って投網は行われる。また、降海性で大型のマルタウグイも産卵期がほぼウグイと同じで、投網で漁獲される。マルタウグイも、腹部に赤系の婚姻色があらわれる。

投網を行う場合には、前もって準備がある。ウグイは産卵の時きれいな石の場所を好むので、春先に漁を行うものが産卵礁を設置し、漁獲場所を造っておく。時期になると、ここにウグイが群れをなして集まるので、投網を行い漁獲する。

漁獲量は、一網で4キロ前後である。産卵に来る早めのものは、ワセと呼ばれ大きさが30～40センチ、その後はナンバンコと呼ばれる赤みの強い小型のものが漁獲できる。また



この漁では、網を持って行かれるくらい漁獲出来ることもある。

アユの投網は、夏の漁である。アユは、この時期縄張りを持ち、瀬に付くようになる。また、この時期のアユは釣り等で追われて臆病になっている時でもある。このため、物事に驚きやすく、逃げやすくなっているアユを捕まえるため、漁は集団で行われることが多い。

漁は瀬で行うが、浅い場所と深い場所では網を変える必要がある、また、場所の条件だけでなく、浅瀬より深い場所の方が大きいものがかかる。まず全員が、アユのいる漁場の川下に入る。次に、川下から上流に向かって全員で投網を行う。川下から投網を行うのは、アユが驚いた時に上流に逃げるようにするため、それを追いながら打っていくからである。また、後ろ向きの方がアユからは網が見えないため、漁獲しやすい。

現在は、釣りが多くなり、投網の行える場所は減ってきている。

サケ投網は、秋に行われる。産卵のために遡上してくるサケを狙った漁である。この投網を行うのは、サケが遡上中の瀬を泳いでいる時と、産卵場に集まっている時である。まず、遡上中の場合は、投網を行うものが川に入り、投網の準備をする。漁場は、どぶ（深み）から立ち上がって瀬になる境の場所である。瀬でサケの上がってくるのを待っていると、どぶと瀬の鼻が波立ちサケが上がってきたのがわかる。その時、サケが上る上流に待ち構えていると、足にあたった流れが波立ち、サケはこれを見つけてなにかいると思い向きを変え下流に逃げようとする。この時、素早く投網を行い漁獲する。後ろ向きの方が、サケは漁獲しやすい。産卵場では、サケが集まっているので、投網を普通に行っても漁獲できる。

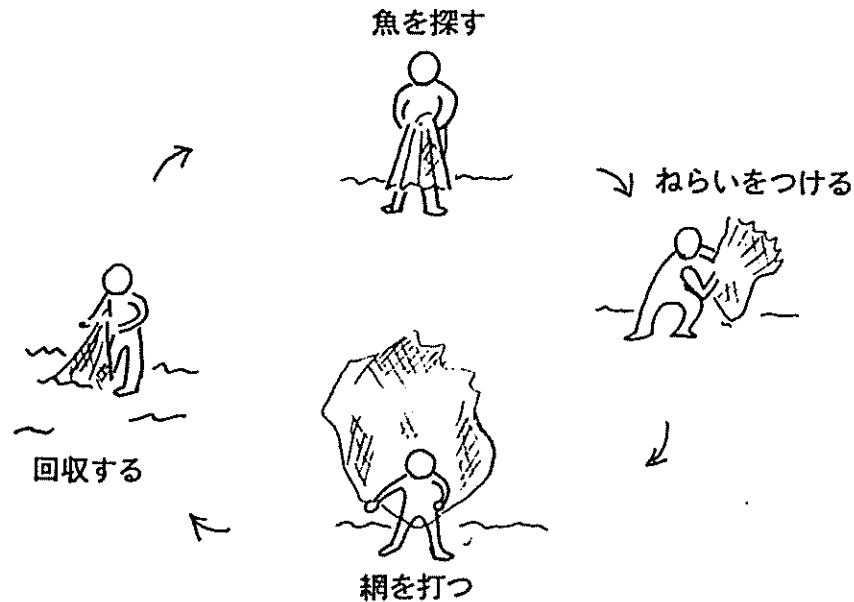
現在は、資源保護の目的等から、産卵場等でのサケ投網は行われていない。

コイ投網は、冬期間行われる。水温が下がると、コイやフナはほとんど動かなくなり、越冬のために少し深みの泥場等にじっとしている。この時期を狙って投網は行われる。一回の投網で、多い時には一度に2本前後の漁獲が出来る。また、コイと一緒にフナ等も漁獲できる。水温が下がったときの魚は、ほとんど動かないため漁獲はしやすいものの、反面潜んでいる場所を見付けだすことは難しく、漁獲効率はそれほどよいものではない。

冬期間行われる投網には、スガ投網もある。これは、寒くなり川に氷がはる時期から行われる。川の中でも、流れのゆるいよどみの部分には、氷が張りやすくなる。ここには魚が集まっており、この集まった魚を氷をわって漁獲するのが、この漁法である。漁獲され

るものは、オイカワや小さい魚が多い。

昭和30年代までは、川も凍ることが多かったが、現在はほとんど凍ることがなくこの漁法はあまり行わない。また、昔はオイカワが多く漁獲されていたが、今はオイカワが減りニゴイが増えてきている。



投網漁操業図

## 7 スガ刺網漁

(河北町)

スガ刺網は、冬になり川に氷がはるとおこなわれる、結氷期の刺網漁業である。

網は綿糸を用い、目合い4寸のものを使用する。網は何種類か用意しておき、魚の種類や大きさにより目合いを変えて使用する。網の長さは20尺、丈は1.5～3尺とする。いせは、3～4割。浮子網は、綿糸3～5号を使用する。沈子網は、綿糸50号を使用する。浮子は桐製で、直径3～5寸の丸型のものを使用する。沈子は使用しない。この刺網は網の他に、網を操作するための竹も使用する。使用する竹の長さは、網の長さ、川の深さにより調整する。

漁期は、河川が結氷する冬期間。漁場は、地先小河川。

川に氷がはるとこの漁が開始される。日中の漁である。始めに、網を持って川に向かう。川に着くと氷の厚さを確認し、のっても大丈夫なら漁を始める。まず、持っている斧で氷

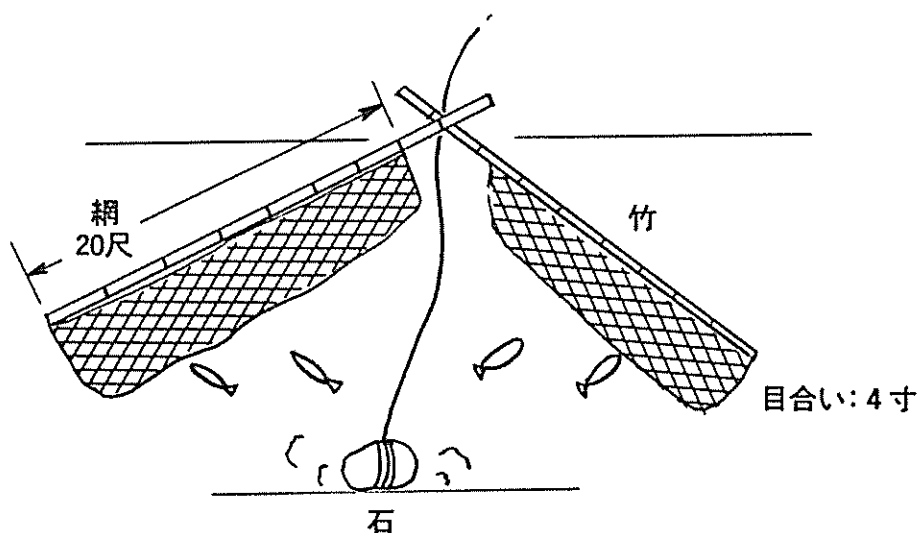
に網が入るくらいの適当な穴をあける。次に、この穴から竹に結んだ網を川の中に入れてやる。網は、1つの穴で2網使用し、かさならないように左右に設置する。網の設置が終わると、網用とは別の穴をあけ、ここから縄に結んだ斧を川底に下ろす。その後、縄を操作し斧を使って川底を引き回し、魚を驚かせ刺網に誘導する。驚いた魚は逃げようとして設置していた刺網に刺さるので、この時網をあげて漁獲を行う。

漁場として良い場所は、中瀬等がある脇の流れが緩やかで少し深くなっているような所である。

網は、1人で10張り使用するため、川には5か所位の穴をあける、このため網と網がぶつからないような間隔を取ることが必要である。また、漁は数人単位で行われるため、お互いが場所をきめて行う。

漁獲されるものは、コイ、フナ、ウグイ等である。年により豊富漁がある。

現在は川も昔ほど凍らないことと、漁獲量が少なくなったためこの漁は行われていない。



スガ刺網漁具見取図

## 8 四手網（モツパ）漁

（石巻市）

四手網は、縄の付いた網を海中に下ろし、魚の入った所を引き上げ漁獲する、簡易な待ち網漁法である。

四手網は、網と引き上げ用の設備からできている。網は麻糸を使用し、目合い3分～1寸2分のものを使用する。網の型は正方形で、一辺の長さ5尺～2丈、高さ2尺～3尺2寸とする。網の目合いや大きさは、魚の大きさ種類によっても若干の違いがある。設備は、

網の引き上げや投入を行う為のものである。まず、陸上から支えとなる太い棒を設置する。次に網の四辺に竹や木を交差するように結び、これを支え棒に取り付ける。支え棒と網には、網が取り付けられ、支え棒や網を操作できるような仕組みとなっている。力をあまり使わないように、滑車等も利用し、1人で操作できるようになっている。



四手網設置風景

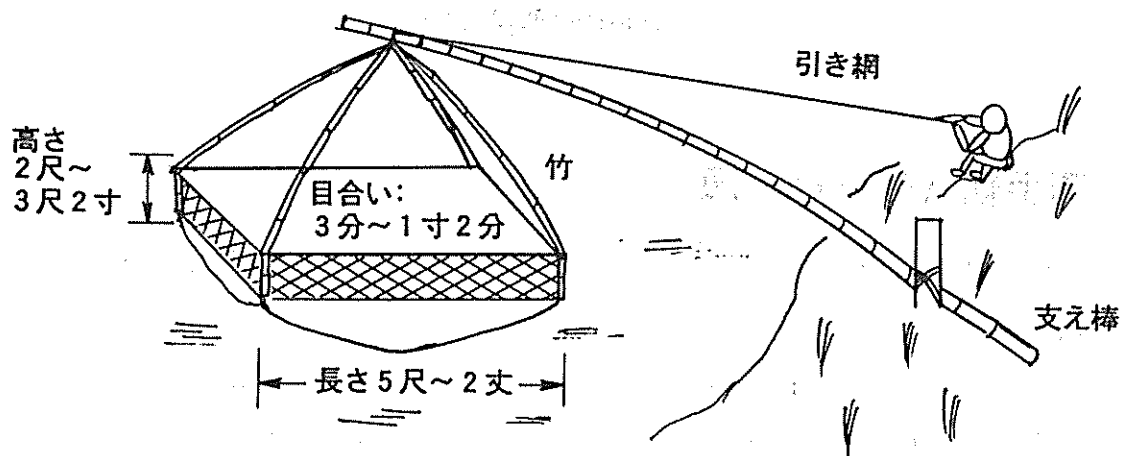
また、引き上げ操作をする場所は、陸上（岸）の場合と、漁獲効率を考慮して栈橋等を設置し川の少し深くなった場所で行う2通りの場合がある。

漁期は、4～12月。漁場は地先河川。

漁を行う前に、河川の適当な場所に四手網を設置する。まず、陸上で網を操作し、網を川の中に下ろす。その後時期を見て、網を水中より引き上げ、魚が入っていれば柄の長いタモですくって漁獲する。網の引き上げ方には2種類あり、一つは一定の時間ごとにあげるやり方と、もう一つは常に川をのぞき込み魚が網の上に来たところを引き上げて漁獲するという方法である。やり方は、漁獲目的の魚の種類や大きさ等によって違ってくる。何れにしても。この漁法を行う場合、網の側にずっといるわけで、漁獲と時間を考えると漁獲が少ない場合は若干効率が悪い漁法である。

漁獲対象は、サケ、コイ、シラウオ等である。また、漁獲が多いのは、川が増水して水が濁っている時である。

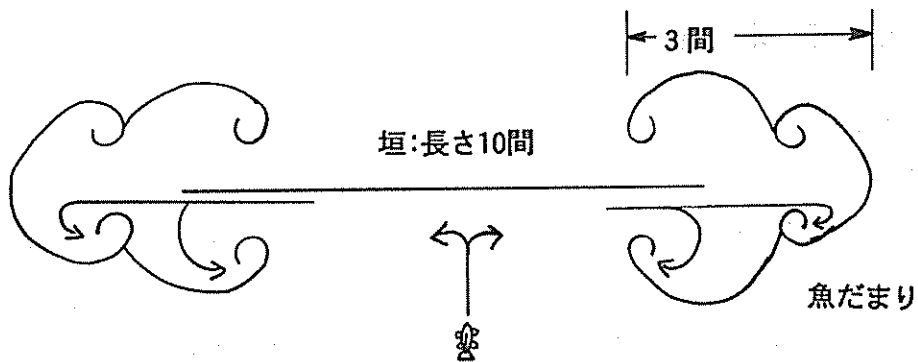
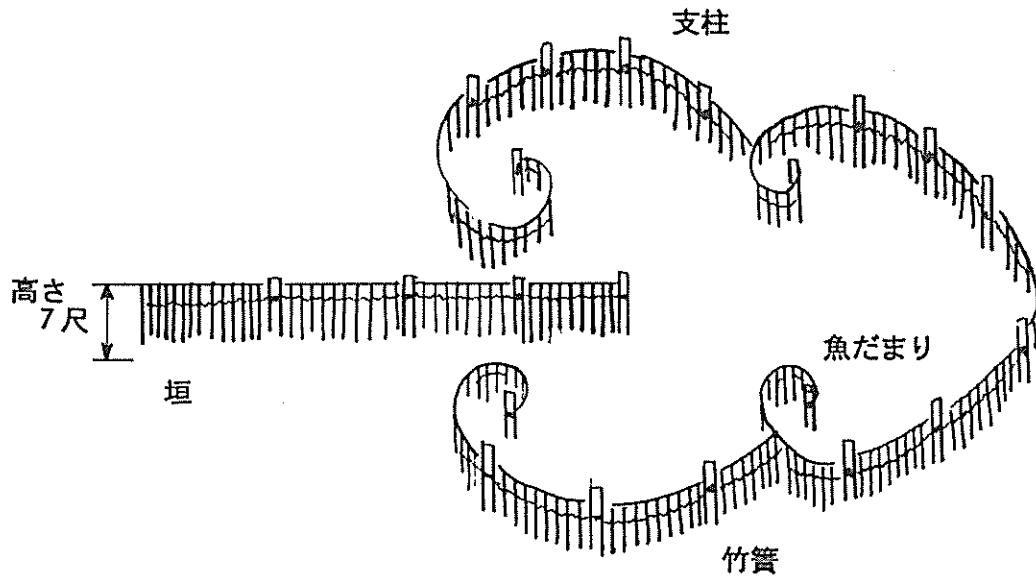
古くから行われていた漁法であるが、漁獲効率等の面から現在はほとんど行われなくなっている。現在は若干、高齢の漁業者の人が漁を行っている。



四手網漁操業図

# 9 簀 建 漁

(若 柳 町)



簀建漁具見取図

簀建漁は、垣を設けて竹で囲ったつぼの中の魚を誘導し漁獲する、えり漁業である。

簀建の大きさは、垣の長さ7～10間、つぼの長さ3間、高さ7尺とする。大きさおよびつぼの型は、地域により違っている。

簀建は、竹を使用して作って行く。竹は水深に応じてそろえていくが、長さはだいたい10～13尺とする。竹がそろるとまず長さをそろえ、スタレ状に編んでいき簀を作る。簀は、垣の部分とつぼの部分では高さを変えて用意する。つぼの部分は、魚が入り込んで逃げないように垣より高めにする。簀ができると、それをつなぎ合わせて長さを整える。この作

業が終わると、立て込み作業が開始される。まず、設置場所を決める。設置場所が決まると、縄を使って簀の位置と型を決めていく。次に、この型に添って支柱となる太い竹を、2～3寸間隔で建てていく。最後に、前もって作っておいた簀をこの支柱に結び付けて、作業は終了する。設置作業は、6名程度の人がたずさわって、5～7日で設置する。また、設置場所もどこでもいいというわけではなく、水の流れ、魚の通り道等を良くよんだ上で決定する。

漁期は8～12月。漁場は、地先沼等。

漁は、木船に1～2人乗り込み行われる。まず、設置した簀建のつぼの部分に船をつける。次に、サデ網を使ってつぼの中に入り込んだ魚をすくい、船に取り上げ漁獲する。つぼの中に入った魚は、ほとんどすくいあげる。1日に1回の割合で、取り上げを行う。また魚が多い時には、1日何回か取り上げを行う場合がある。

漁獲されるものは、コイ、フナ、ナマズ等がある。もっとも、漁獲の多い時期は4～5月で、この頃は越冬から魚がさめて移動しはじめる時である。

この漁は、古くから行われていた漁法であるが、現在はほとんど見かけることはできない。

## 10 キ ッ コ ミ 漁

(河 北 町)

キッコミ漁とは、沼の中に木や竹を設置し魚の隠れ場所を作り、この中に入り込んだ魚を網等を用いて漁獲する独特の漁法である。

キッコミとは、沼の中に設置する魚礁のことを言う。キッコミを作るには、まず枠となる太い木を水中に数カ所設置する。次に、この枠の中に木の根や枝等を投入していく。木は、始め浮いているが数日して水分を含むと、底に沈んでいき安定する。枠は、三角形の型にし、一辺の長さは20間前後とする。設置作業は、漁にたずさわる者全員（8～13人位）が出て行う。この他には、キッコミを囲む竹簀と魚をすくう網が必要となる。竹簀は長さ1間前後のカラ竹をさいて、漁にたずさわる全員が、キッコミを囲む長さを手分けして作る。網は、せまい場所で取り上げを行うため、型が二等辺三角形の三角網を使用する。網は綿糸を使用し、目合い2寸とする。枠の部分は、上部が1尺5寸～2尺、両脇が3尺とする。柄には堅木を使用する。

漁期は秋～春。漁場は地先の沼。

秋になると全員が出て、キッコミの設置を行う。設置場所は、地曳網やスガ網の漁場の側で、少し深くなっている泥場がよい。キッコミは設置してから中に入れた木が沈み、水

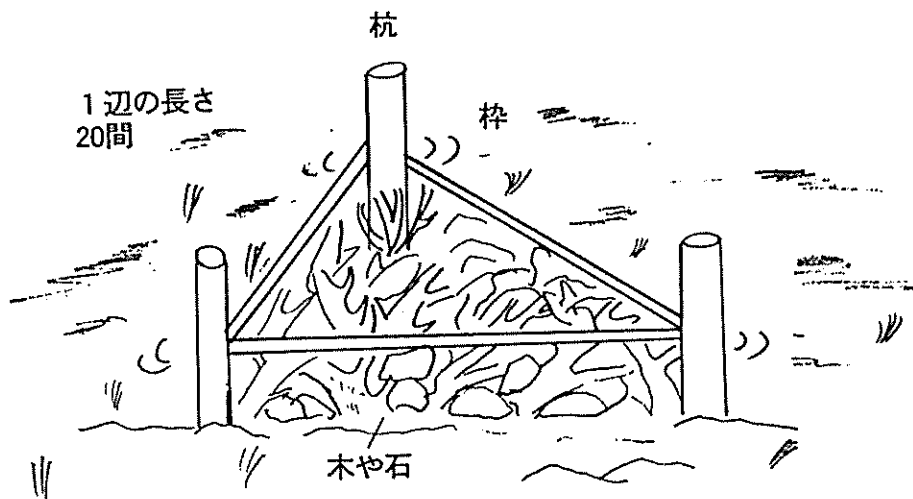
に馴染むまでは数日かかる。水に馴染んできたところから魚が入りだすが、一番魚が入り込むのは地曳網やスガ網を行ったあとである。この時、底を網で引かれた魚は驚いて逃げ回り、障害物の中等に隠れようとする。障害物とは、側にあるキッコミである。こうして、障害物の中に入った魚は水温も下がっていることもあり、キッコミの中にとどまる。地曳回数が多ければ逃げ込む魚も多くなる。その頃を見計らって漁は行われる。日中の操業である。

まず、1枚棚の船に数人が乗り込み、竹簧と網を持って漁場に向かう。船はだいたい4～5隻使用する。漁場に着くと、静かにキッコミの側に船を寄せる。次に、キッコミを囲むように船を内側にして、竹簧を設置する。こうして、魚が逃げられないように囲み終わると漁獲作業を開始する。作業は役割分担を決めて行われる。魚を驚かせる役とすくいあげる役である。まず、船の上から棒や石等でキッコミを叩いたりして魚を驚かせ外に追い出す、次に驚いて出て来た魚を網を使ってすくいあげるというやり方である。

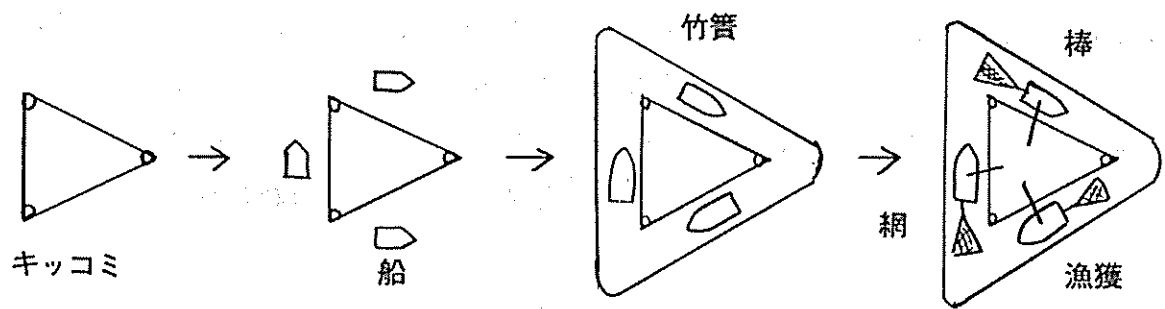
漁は、1回行くとだいたい半月～1ヶ月おいてから行われる。このため、効率を考えて沼には、何カ所かキッコミを設置する。

この漁で漁獲される魚は大型のものが多く、鮒では2枚で500匁目のものがとれた。1回の操業では100貫前後の漁獲があった。漁獲したものは、販売したり、全員で分けたりした。

この漁も、地曳網が操業を終えたのと同じ頃、行われなくなった。



キッコミ漁具見取図



キッコミ漁操業図

## 11 地曳網漁

(河北町)

地曳網は、部落単位で行われた協同的な形を取る漁業である。

網は、垣網と袋網からできている。垣網は綿糸を使用し、目合い3寸、網の長さ50間、高さ1間半～2間とする。網は袋網に近づくにしたいが、目合いをせばめていく。袋網は綿糸を使用し、目合い1～2寸、長さ5～8間、高さ2間とする。網は袋の端に近づくにしたい目合いと幅をせまくしていく。曳網は縄網を使用し、太さ径1寸、長さ50尋とする。縄は、7つをよったものを一つとして使用する。浮は桐製で長さ2尺のものを、浮子網に1間間隔で結び付ける。沈子は石を用い、これを藁縄で包んで、沈子網に適当な間隔で結び付ける。垣網の両端には堅木の棒を結び付けて、曳網を結び付ける。これは曳網を曳く過程で垣網がせばまらない用にしている目的もある。網の材料は、石巻から購入し、8人がかりで1週間位で作る。曳縄も、自分達で編んで作る。

網を作るのは、漁のあいまや漁の切り替え時期である。

漁期は、秋～春。漁場は、地先沼。

この漁を仕切るのは、ダイボウと呼ばれる網主であり、網主のもとに集まって操業は行われる。だいぼうは、漁の指示、漁獲物の分配等も行う。

漁は、旧の10月10日から始められる。日中の操業である。漁場は、沼内に10カ所あり、いずれも底が泥場となっている場所である。また、漁場を選定するときの条件としては、魚が多く集まっている場所であることと、網を岸にあげやすい場所であることがあげられる。このため、魚の集まっている場所を選定することがこの漁での第一条件である。また、沼に流木等が多い時は漁が始まる前に、全員が出て木を岸にあげるようにする。

漁では、まず網を船着き場に用意することから始まる。船着き場に全員が集まると、網



を1枚棚の木船に積み込み出漁する。船は2隻用意し、手綱をとって真つすぐに沖合に進んで行く。適当な場所まで来ると、2隻の船は二手に別れ岸に平行に網を下ろしていく。次に2隻は向きを変えて岸寄りに網を下ろしていく。網が下ろし終わると、2隻はお互いが網の中心点に寄るように岸に向かう(1)。船が岸に着くと8人は二手に分かれて曳綱を持ち網を寄せて行く(2)。(1, 2)の曳方を2度寄りと呼び、この方法を行うことで網の引き寄せが、ただ曳いてくるよりは楽に行える。

操業は、2~3日に1度行い、1日の操業回数は5回前後である。2~3日の日数をおくのは、地曳網のため底をかき回すので、その場所に魚が集まるのを待つためと、無理な漁獲圧力をかけるのを避けるためである。

漁獲対象はコイやフナだが、一番多く獲れた時には小舟で7隻、重さにして700貫前後の水揚げがあった。また、普段の漁獲量は、30~50貫である。

漁獲した魚は、古川や涌谷方面から専門に買い受け人が来て、網を引き上げるとすぐに買いとっていった。買い受け人は追波川を利用し船で魚を運んでいた。

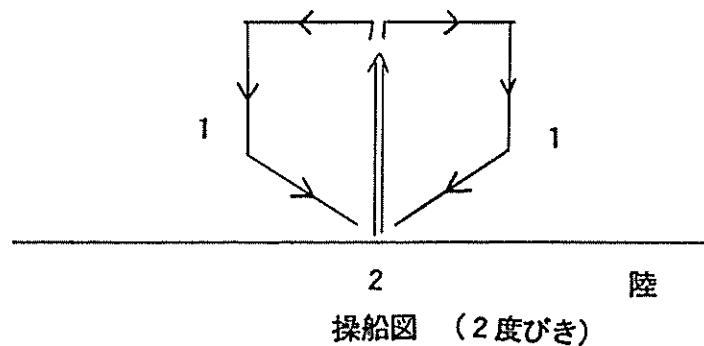
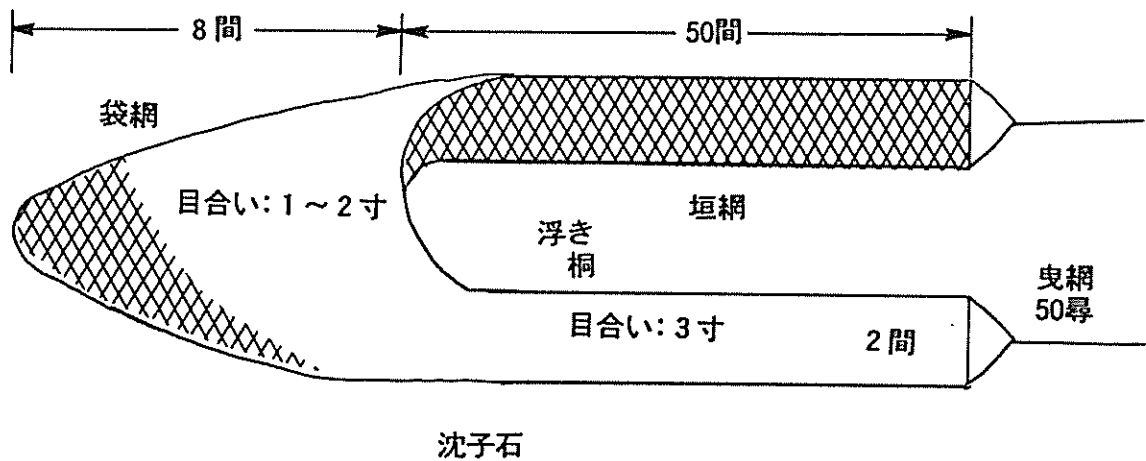
分配(お金)は操業期間内に2~3度に分けて支払われていた。これは、買い受け人が現金取引だけでなく後払い等もあったことと、その年の漁と経営を考えたやり方である。配分割合は、ダイボウが1人半、残りは曳子で均一に分けていた。

旧暦の10月10日は、その年の第1回目の網曳きを行う日とされ、この漁で漁獲された魚は、1番大きいものをもってダイボウの家のエベス様に、漁の安全と豊漁を祈願して供え、残りは曳子に配ったり祝宴用に使っていた。漁が終漁した時にも、ダイボウの家集まりキリアゲの祝いを行った。

富士沼でこの漁が始まったのはいつ頃かはっきりしていないが、明治頃には行われていたようである。沼は昔からかなりの魚資源があり、四季を通じて漁業が行われていた。また、海で行われるような、部落単位での地曳網等が行われていたということは、地域の生活を支えるくらいの生産性とこの沼の資源を有効に利用にするとする漁業者の人達の努力がうかがえる。それは、ここで記述した地曳縄を例にとってもわかる。地曳網は冬期間行われる。ところが沼は3ヶ月位結氷し、氷の厚さは1尺2寸~1尺3寸にもなる。こうなると普通の地曳網は行えないが、ここではスガ網という独特の地曳網を行っている。この漁法を行うことにより、他地域ではあまり操業されていない時期にも漁が行えたわけである。また、漁と販売をみても、いつでも漁獲して売るのでなく季節によってその利用を考えている。まず、冬期間の漁(鯉や鮒)は、沼魚特有の泥臭さがなくなるため商品として買い受け人に販売する。しかし、夏期間の魚(鯉や鮒)は商品とはならないためあまり漁獲せず、現金収入となる鰻を専門に漁獲している。こうすることにより、年中続けて同

じ種類の魚の漁獲やむやみな漁獲は行わないため、資源の維持につながっていく。そしてそのことが自分達にとって生活を支える糧を絶やさないと知っていた。そこで生まれたのが、季節に合わせた漁具漁法や、自分達にとってどういうことが大切かという教えだった。現在は、沼を取り巻く人達の生活基盤も変わり、沼自体の生産力も昔のようにはなくなったため、専業で漁業を行う人はほとんどいなくなっている。しかし、内水面において、漁業が四季を通じて専業的に営まれた地域の例として富士沼はあげられる。

現在、高齢の人に話を聞くと、やはり川魚をずっと食べてきたので、海の魚よりいいという。また、料理方法も多くあるが、子や孫があまり川魚を食べないので食卓に並ぶことはほとんどなくなっているという。



地曳網漁具見取図

## 12 スガ網漁

(河北町)

スガ網は、沼に氷がはった時に行われる独特の、地曳網漁である。この漁は、県内で富士沼だけで行われた漁業である。

スガとは、氷のことをいう言葉である。

網は、地曳網と同じものを使用する。この他には、ホソバ、ヌイダケ、マツカギ、サデ等を使用する。ホソバは鉄製の刃の幅がせまい斧で、結氷した沼の氷を切るために用いる。ヌイダケは竹製で長さ4～5間ものを使用し、この根元に穴をあけて曳網を結びつけ氷の下をとおすのに用いる。ヌイダケを氷の下から引き上げるために使用する。サデは杵と柄からなり、杵は竹製の楕円形をしており、柄には堅木を用いる。網から魚を取り上げる時に使用する。

漁期は、沼が結氷する12月中旬～翌年の2月。漁場は、地先沼内。

漁は、地曳網と同じく、ダイボウを中心として行われる。天候次第で漁は行われる。始め8人位が1組となって、船に網やその他の道具を積み込み出かける。漁場は何か所かあり、操業に合わせて魚が集まっていそうな場所を長年の経験から選び出し漁を始める。漁場に着くと、まず網を曳く方向と投入場所をダイボウの指示により決定する。場所が決まると、網を入れる穴をホソバを使って6尺四方に空ける。切り取った氷は、網を曳く反対方向の氷の下に棒を使って押し込んでやる。網を入れる穴ができると、今度は曳網を通す穴を4～5間間隔で数箇所あけていく。この時、曳網用の左右の穴は同じ位置に来るようにする。穴の大きさは、2尺前後とする。最後に網を取り上げる穴を6尺四方の広さに切る。穴は作業の流れに沿ってあけていくようにする。網の入れ方は、まず始めにあけた網入れ用の穴からヌイダケに結んだ曳網を入れてやる。次に、ヌイダケが曳網用の穴にとどいた時点で、マツカギを用いて次の穴に送り出してやる。この作業を繰り返す、5つめの穴に来た時点で網を引き上げ網を投入する。引き上げた網は、まえもって立てておいた杭にからませ、網を曳いていく。ある程度網を引き上げると、マツカギを用いて次の穴に送り出してやる。この作業を4～5回前後繰り返す、網を曳いていく。最後に、網上げ用の穴まで網が来ると4人ずつに分かれて、網を曳き網を上げていく。網をあげながら袋網が見えてくると網を固定し、袋網からさで網を用いて魚を取り上げ漁獲する。網は氷の下を曳くため抵抗がかかり、一度に引き上げることは難しい。そのため、何度かに分けて曳く作業を繰り返すことがこの漁では必要となってくる。また、冬期間行うということで、魚がほとんど動かないことも、この漁法を可能にしている点である。

操業は、1日1～2回行われる。漁が終了すると、網を岸近くの場所を選び、そこに氷

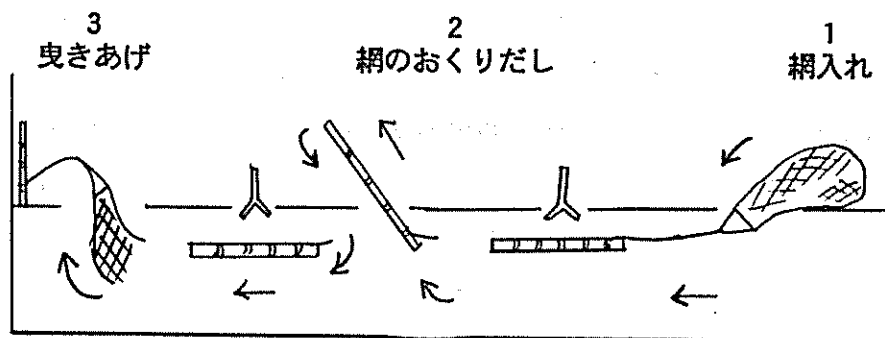
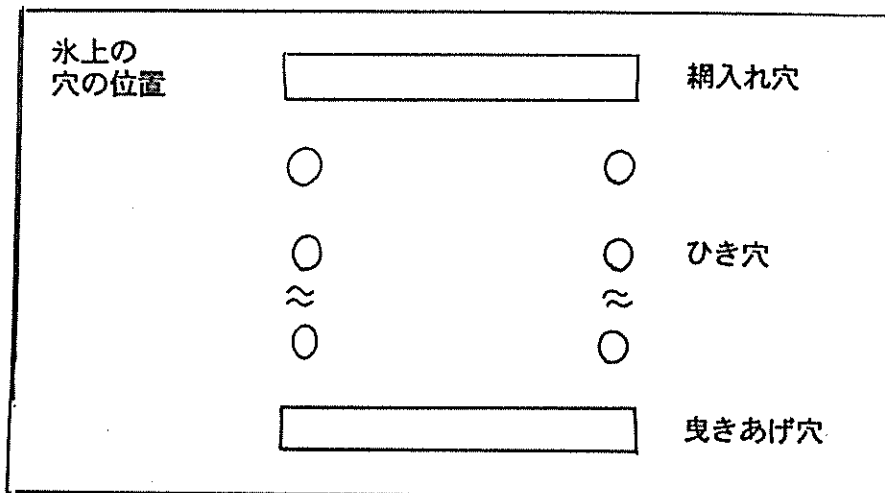
をわって沈めておく。これは、網が凍るのを防ぐためである。漁に出掛ける時は、網を水から引き上げ漁場に向かう。

漁が終漁をむかえると、網を陸に引き上げ乾燥させる。乾いた時点で、ゴミを取り除き、翌年の漁期まで納屋等にしまっておく。翌年の漁期前には、納屋から出して修理してから漁を始める。

魚やお金の分配、習慣は地曳網と同じである。

操業は、氷がはる前と解けてからは地曳網、氷が張ってからはスガ網が行われる。また、地曳網、スガ網と対で行われる漁にキッコミ漁もある。

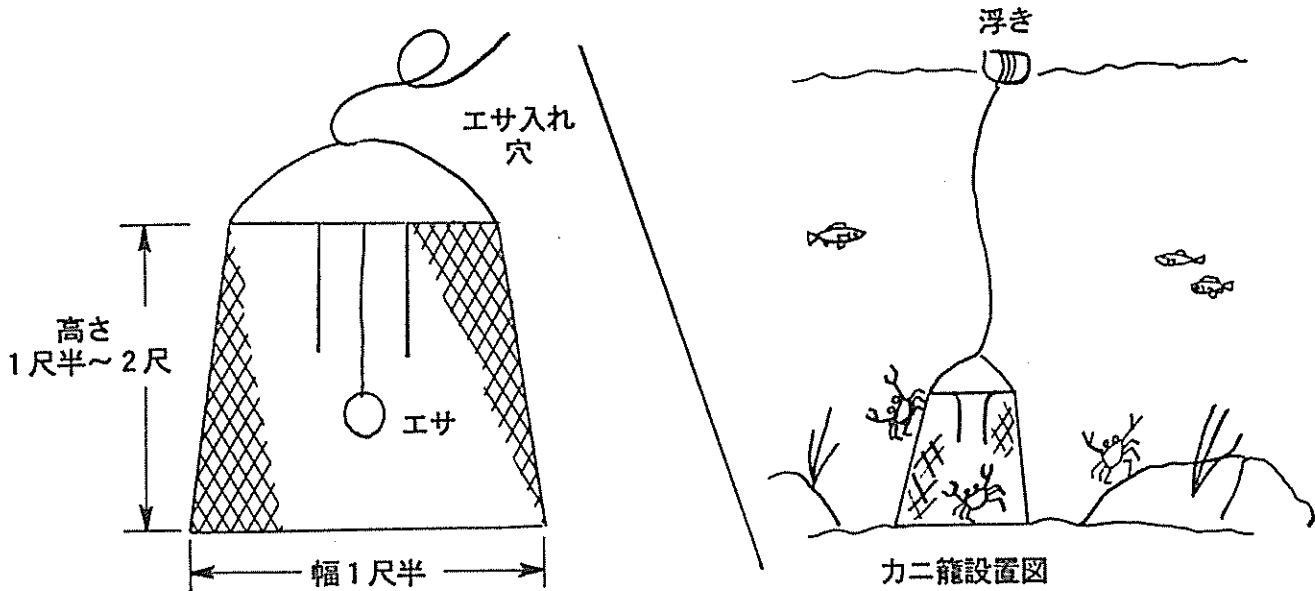
漁は、戦前まで行われていた。また、現在は沼に厚い氷がはることは、ほとんどなくなったという。



スガ網操業図

# 13 カニ籠漁

(仙 台 市)



カニ籠漁具見取図

カニ籠漁は、産卵のために川を下って行くモクズガニを対象として行われる、籠漁法である。

籠は円筒型の型で、高さ1尺半~2尺、幅1尺半とする。籠の上には、カニの入る穴を開け、底の部分には重りを取り付ける。

漁期は夏~秋。漁場は地先河川。

モクズガニは、海で産卵し成長したものが春に河川を上る。川を上る時期は、5~6月でこの頃のカニを上りガニと呼ぶ。大きさは、2~3センチで、移動する時は群れをなしてくるので堰を上がる時等は、堰が真黒になるくらいである。とくに雨降りあとの堰が濡れている時が上がりやすいと見えて、集団で移動している。その後河川で成長したものは、夏~秋にかけて産卵のため川を下る。大きさは、10~15センチくらいである。この時のカニを下りガニと呼び、カニ籠漁はこのカニを対象として行われる。

木船に1人乗り込み夕方出漁する。籠には、魚等の餌を入れておく。漁場は、淵やよどみの所で、流れが緩やかで深みのある場所がよい。まず、カニの集まりそうな場所を選び出し、籠を投入する。籠は1つずつ投入し、適当に場所を変えて仕掛けていく。投入が終わると籠を一晩設置し、翌朝取り上げを行う。カニが多く入っている場合は、夕方の投入

場所をその近くに寄せるようにする。

1回の漁で、多い時には1籠で50匹前後漁獲できる。

漁獲したカニは、家にもち帰りカニコジキにして食べる。カニコジキとは、すり鉢を使ってカニをすりつぶし、その後目のあらいザルに入れ大きめの殻を取り除きながら豆腐とネギを入れた鍋で身をおとし、身をとじた状態にして食べる料理である。

## 14 エビ 洞 漁

(仙 台 市)

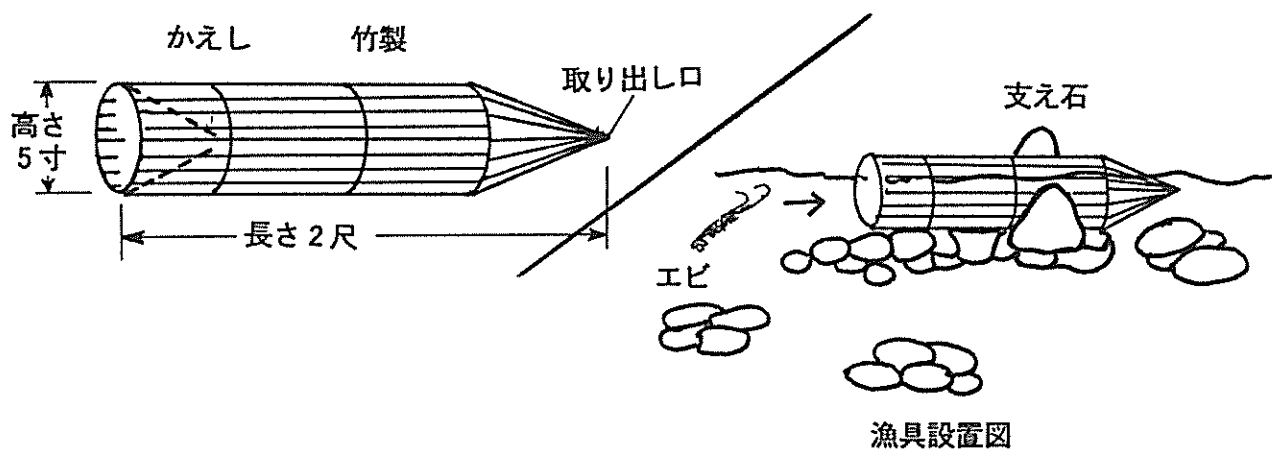
エビ洞漁は、河川の岸沿いに洞を仕掛け、これに入ったエビを漁獲する、洞漁法である。洞は竹製で、長さ2尺、高さ5寸の筒状のものを使用する。口には竹製のかえしを付け、後部は狭めて漁獲物取り出し用の部分とする。

漁期は周年。特に秋がよく、冬場はあまり動かないので漁獲は少ない。漁場は、地先河川。

この漁には、ユツがあり誰がやっても捕れるというものではない。そのため、漁を行う人は、限られている。まず洞を持って漁場に向かう。洞を仕掛けるのは、川岸の水際である。次に適当な瀬を選ぶと洞の仕掛けを開始する。この漁では、今ある瀬を崩さないことが必要である。瀬には、それぞれエビの通る道があり、石を動かすことによってその道が変わるとエビが入らなくなるためである。洞を仕掛けるときは、今ある石を動かさないように、石を積み上げ堰を作って行く。その先に洞を仕掛けるようにする。洞は、乾いた少し大きめの石を両側に置き固定する。洞の設置の仕方でもう一つ大事なことは、エビが洞に入る時、入る部分は暗いとその先は明るく出口になっているという仕掛け方をすることである。暗いだけのものには、入らないようである。また、洞は全部を水に沈めないで、かならず水から出ている部分を残すことも必要である。以上のような点をうまく行わないと、この漁ではエビを漁獲することは難しい。洞は、1か所に1つずつ設置し、場所を変えながら何本も設置していく。ある程度時間をおきながらみまわりし、エビが入っていれば取り上げ漁獲する。

1本の洞で、多いときにはお椀で1杯位の漁獲が出来る。エビの他には、ドジョウやカニも入る。ただし、カニが入った場合には、エビは食べられるため、洞には入らない。

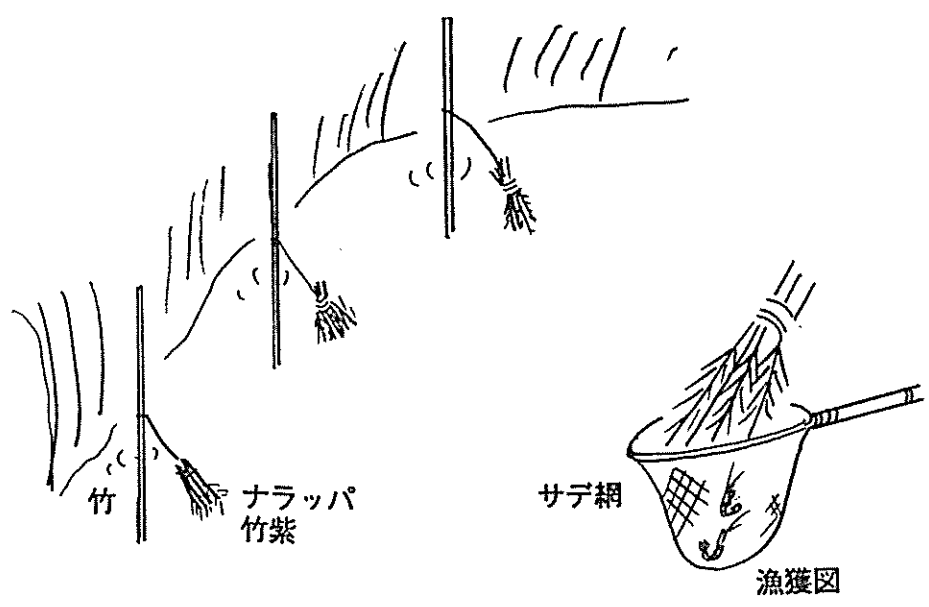
漁獲したエビは、食用にしたり、漁のエサとして使用したりする。



エビ罎漁具見取図

### 15 エビナラッパ漁

(河北町)



エビナラッパ漁具見取図

エビナラッパ漁は、沼等に木の枝を設置しこれに入り込んだエビを漁獲する、漬け漁業である。

ナラッパの材料には、竹柴を使用する。柴は、数本を束ね1つとして使用する。

漁期は、春～秋。漁場は、地先沼等。

船に1人乗り込み漁場に向かう。まず、竹を適当な場所に立てる。この竹に、縄を取り

付け、これに柴を結び付けるようにする。竹は数か所～数十か所にたて、柴を設置していく。設置した状態で、だいたい5日位したら取り上げを行う。まず、船を竹の近くに寄せ、縄をつかんで柴を上げながら、下から網を入れてすくい上げるようにする。水面に柴が出た時点で、船べりで柴を叩き網にエビを落として漁獲する。この作業を繰り返す。柴は、漁獲後もとの位置に戻しておく。漁の間隔は、だいたい5日に1回の割合である。

柴は、水にいられておくと葉が落ちるため、この時は葉のついているものに入れ替えて漁を続ける。

漁獲したエビは、漁の餌用としたり、食用としたりする。漁に使うのは春先がよく、この時期のエビは卵を持っている。食用にするときは塩辛にしたり、空揚げにしたりする。

## 16 エビタモ漁

(仙 台 市)

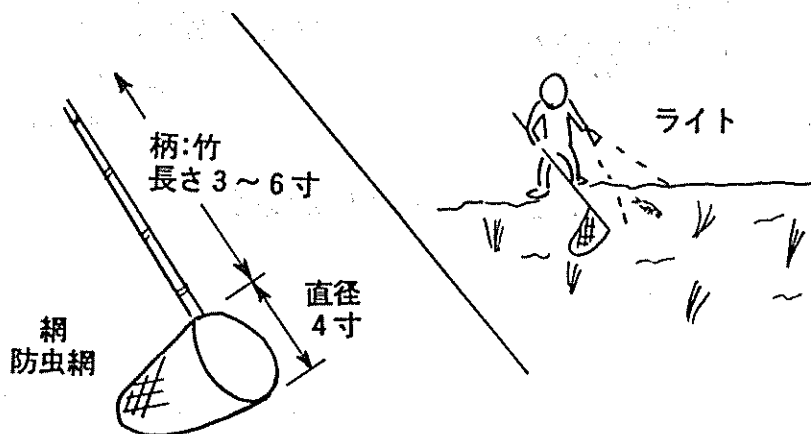
エビタモ漁は、タモ網を使った、すくい網漁である。

網は、防虫網を使用し、枠の大きさは直径4寸、枠の長さ3～6尺とする。

漁期は、春～秋。漁場は、地先河川。

日中漁を行う場合は、網を持って川岸を歩き、エビが川岸に近い場所に上がっているのを見付けると、後ろの方から素早くすくって漁獲する。夜間行う場合は、網とライトを持って川岸を歩き、日中と同じようにすくい捕る。夜間の方が、エビは岸近くまで上がっている。夜間は、日中のように広くは見えないものの、川岸をライトで照らすとエビの目が光るので、エビのいる場所がわかりやすい。

この漁では、多くの漁獲をのぞめない。ほとんどの場合は、釣り餌の調達用として行われる。



エビタモ漁具見取図および作業図



## 17 ゴカイ漁

(河北町)

ゴカイ漁は、産卵のため水面に浮上してくるゴカイを網を使ってすくい捕る、すくい網漁である。

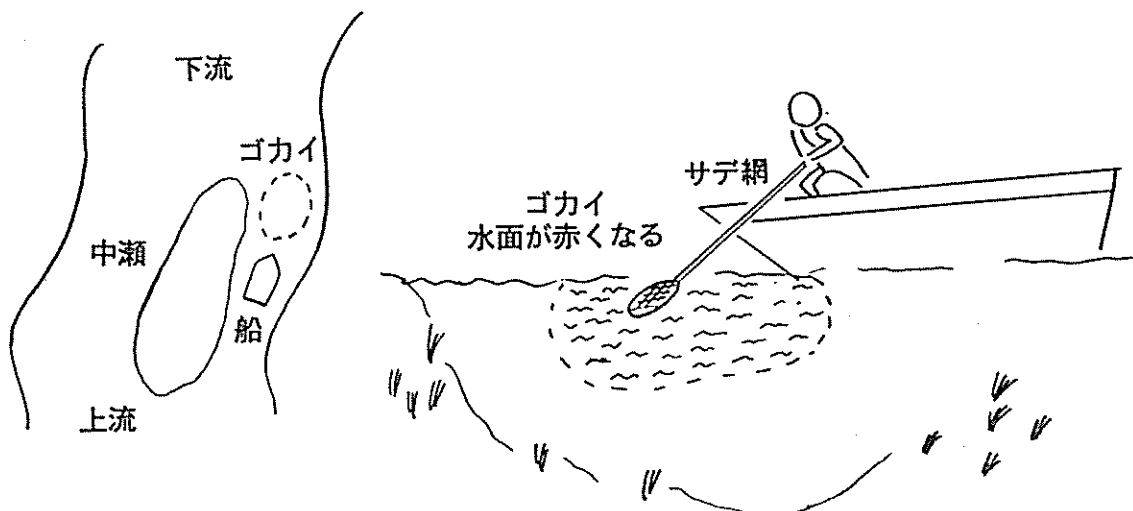
網は、丸い枠にたるみのない網を張ったもので、枠の直径1寸、柄の長さ1尋とする。

漁期は、秋。漁場は、地先河川。

漁は、旧暦の9月18日と10月の大潮時に行われる。漁の時間帯は、日が沈んでから月が上り始める間の短い間である（暗い間）。それは、月が上り始めるとゴカイは分散してしまうので漁獲ができなくなるためである。漁場は、河川でも河口近くの海水が流入する汽水水域である。場所は、河川の岸寄りにある浅瀬（中瀬）で、底質が粘度質の所である。夕方、木船に乗り込み漁場に向かう。漁場につくと、ガスランプを灯して水面を照らし、ゴカイが浮いている所を網ですくいあげ漁獲する。この時、ゴカイは、水面が赤くなるくらい浮いている。漁獲したゴカイは、樽に入れて活かしておく。

漁は、多い時には一斗樽でいっぱいになるくらい捕れるが、自分で決めた量以上は捕らないようにする。漁獲したゴカイは活かして販売したり、釣り漁の餌として使用する。

この漁は、河川の汽水域でおこなわれるが、漁場によりゴカイの大きさが違っており、販売単価もまちまちである。



ゴカイ漁操業図

## XI その他の漁

①ドジョウ漁 ドジョウ漁は、竹で編んだ胴を用いて行われる。特長は、ドジョウが腸呼吸を行うため、胴を水面下に沈めず、必ず一部分を水面上に出しておくということである。仕掛け場所は、田のあぜ等である。漁獲されたドジョウは、みそ汁やでんがく等にしてたべる。また、現在は釣り餌として販売も行っている。

②ナマズ漁 ナマズは、グロテスクな風貌と夜行性の性質等から沼の主や、地震を敏感に感じることから地震を起こす魚等として扱われてきた。食性も、魚やカエル等の肉食性である。漁は、こんな習性を利用して、カエルを餌に掛けてカエルが水に飛び込む所をまねて釣る釣り漁、魚を掛けて夜間放置し釣る置き針漁または延縄漁等がある。

③カラスガイ捕り カラスガイは、淡水に分布する貝類の中では最大になる。志津川町では小さい沼で足を使って泥を探りこの貝を漁獲していた。貝は、大型であり漁獲したものは殻を海での漁に持って行き、餌入れや魚をきざむ台として使用していた。しかし、昭和のなかばの大津波で沼に海水が入り込んでからは、カラスガイの姿は見えなくなった。

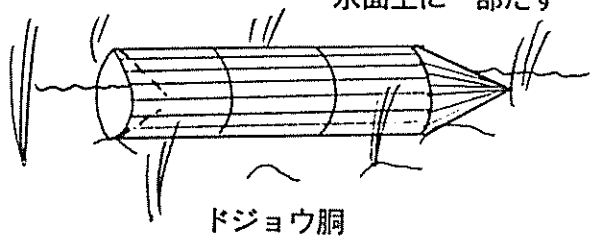
④ヤマメ漁 ヤマメ漁は、溪流でおこなわれる釣りが主体の漁である。性質は、敏感で警戒心が強く、驚くと物陰に隠れて出て来なくなる。このため、漁では釣り逃がしは絶対にしないようにする。釣りは餌釣り、疑似針釣りがある。いずれも、魚を驚かせないように釣りをおこなうことが重要である。

⑤シジミ漁 シジミ漁は、河口付近の汽水域でおこなわれる。漁は、浅瀬は手掻きや簡易な道具をもって行い、深場は船を用いて桁を利用して行う。旬はいずれも夏の土用頃でこの頃のシジミは非常に美味しいとされる。

⑥その他 今回記入した漁具漁法の他にも各地区で行われていた漁具漁法が多くあり、その内容については調査期間等により収集できなかったのもうしそえる。

その他

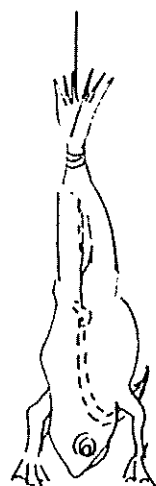
水面上に一部だす



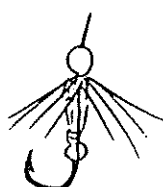
ドジョウ胴



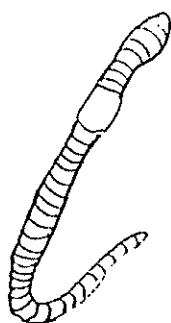
カラス貝とり



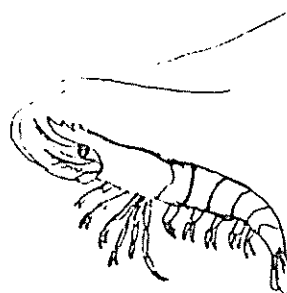
ナマズ釣りの  
エサ掛け



ヤマメ毛針



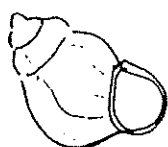
ミミズ



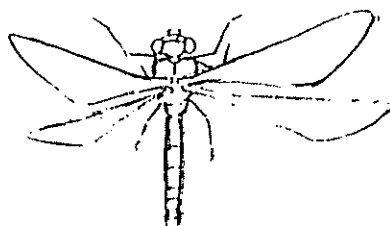
エビ類



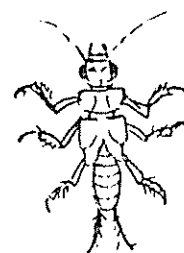
ドビゲラ類



巻き貝類



トンボ類



カワゲラ類

エサ生物のいろいろ

## 編 集 後 記

漁村高齢者活力促進事業の一環として、今回は内水面の漁業を中心に調査、収集を行いました。

調査の中では、内水面漁業の形態変化、漁業種の移り変わりなど時代と共に変化している点を若干でもかいまみることができました。中でも、自然とともにあゆんできた内水面漁業者の人達の考え方が強く印象に残りました。

記載資料については、明治時代に行われていたものを中心として、出来るだけ当時の状況を記載するようにしましたが、ある漁業者が、ある時点で使用していた漁具ということで、大方の目安となれば幸いです。また、現在行われていない漁法もあり、当時の記憶をたどったため、内容については幾分不明瞭の点もあるので、お許し願います。

漁具、漁法の収集、その取りまとめについては各方面のご援助を得たが、特に河北町の狩野鉄三郎氏、狩野勝男氏、高橋長氏、仙台市の白崎亀逸氏、蔵王町の堺六郎氏、志津川町の佐藤久六氏になみなみならぬご尽力をいただきました。各氏は長年漁業に従事し、漁具漁法に精通しておられました。また、調査に協力していただいた関係者の方々に心から感謝致します。

調査編集担当者

技 師 阿 部 啓 一

# 参 考 文 献

書 籍 名	著 者	発 行 所	発 行 年
陸前の漁撈文化と 民族信仰	小野寺 正 人	(株)ヤマト屋書店	1 9 9 1
魚の文化史	矢 野 憲 一	(株)講 談 社	1 9 8 3
日本の淡水魚	川那部浩哉他	(株)山と溪谷社	1 9 9 0
魚の博物事典	末 広 恭 雄	(株)講 談 社	1 9 9 0
内水面漁具調	宮城県水産部漁政課	宮城県水産部漁政課	1 9 5 2
川釣り百科	芳 賀 故 城	金 園 社	1 9 9 1
蔵王のまたぎと 岩魚釣り	堺 六 郎	堺 六 郎	1 9 8 6

平成4年3月30日 印刷

平成4年3月30日 発行

発行所 宮城県水産試験場  
〒986-21 宮城県石巻市長浜町11番6号  
TEL 石巻 0225(24)0138

印刷所 (有) 遠山プリント  
仙台市青葉区木町通り2丁目5番24号  
TEL 仙台 022(272)7371



